

東京大停電

黒川 文



目次

「CODE 1」	
1. 「CODE1」	3
ハッカー	
2. ハッカー	11
脆弱なネットワーク	
3. 脆弱なネットワーク	19
電力供給	
4. 電力供給	37
電力シミュレータ	
5. 電力シミュレータ	55
ハッカー侵入	
6. ハッカー侵入	83
反撃開始	
7. 反撃開始	95
新たな危機	
8. 新たな危機	117
決着	
9. 決着	123
ネットカフェ	
10. ネットカフェ	129
東京大停電	
11. 東京大停電	135
奥付	
奥付	145

「CODE 1」

1. 「CODE1」

芽衣は、パソコンに向かい、ネットの広大な世界から「CODE1」というファイル
を必死になって探していた。友達から頼まれた、JPOPグループの新曲アルバムだっ
た。発売は二週間先のこと。手に入れるには、不正アクセスしかなかった。

実際、なんちゃってハッカーを気取っていた。

自分で組んだファイル共有ソフトである「スパイネット」を使って、企業や組織の端
末にアクセスすることが出来た。

人気のソフトで全世界数千万台のパソコンにインストールされていた。

欲しいファイルの検索キーワードを入れると、ソフトが勝手にそれを探し回ってダウ
ンロードしてくれる。一昔前のファイル共有ソフトに似たものだが、互いのハードディ
スクでやり取りするのではなく、一旦クラウドを介してデータのやり取りをするよう
になっていた。以前のように、何時間も待たなくてもいい。そんな利点から、映画や音楽
ソフトのやり取りに用いられるようになっていた。

「スパイネット」には、ウイルス的なものがついていて、芽衣しか知らない隠しコマンド
を打ち込むと、それが載っているパソコンのファイルを自由に見たり聞いたり出来るよ
うになっていた。今回それを利用してみたのだ。

「CODE1」というファイルはすぐに見つかった。どこかの企業.....多分、音楽制作
会社の端末だろう。そう思い、それをダウンロードしてみた。

「あれ、音楽ファイルじゃないじゃん」

ダウンロードしたフォルダの中にあった「CODE1」を早速開いてみたが、ニュー
アルバムに入っているはずの曲は再生されなかった。音楽ソフトでなければプレイヤー
は動いてくれない。不審に思って識別ソフトにかけてみた。

そして内容を確認することができた。簡単な暗号化されたテキスト文書だ。何だろう
と思い暗号解読ソフトにかけてみた。

漢字がずらりと並んだ。

「作為有事時局的作戰、由於來自外部的訪問竄改日本的發電站的操作盤的系統、把發電站做為駕駛不能的計劃。……美國海軍第七艦隊的行動需要提前封鎖、我們的網絡黑客是為此目的的破壞者之一。為了實現這一目標、以日本首都東京為中心的電網將受到重創」

何となく中国語のように思えたが、芽衣には現代中国語の知識なんてなかった。だが、有事、作戰、日本、不能と言う文字が入っていることから何となく日本を狙った危ない計画であるような気がした。

「なにこれ？」

と、芽衣はつぶやいた。

何となく、世間を騒がすサイバーテロリストの存在を感じた。

先日も、政府省庁のホームページが外部から改竄されたり、ハッカーの仕業かどうか分からないが、銀行のオンラインシステムがダウンしたことがある。兄に聞くと優秀なハッカーは痕跡を残さないで、彼らはアマチュアだと言っていた。

だが、発電所が攻撃を受けたら停電も免れない、関東一円が被害に遭うと、主要プロバイダや大学・研究機関のコンピュータが落ちるので、通信が麻痺するし、何より水道・ガスなどのライフラインや病院の高度な設備が止まってしまう。今時、聴診器だけで見ている病院などないからだ。「人命に関わるじゃない」と思った。

その瞬間、芽衣のパソコンの画面上にポップアップメッセージが表示された。

—YOU ARE WATCHED BY CYBER SECTION!

芽衣は英語が苦手であった。五秒ほど眺めて、あっと思った。次の瞬間画面が真っ黒になり、パソコンが電源遮断してしまった。ダウンロード先のファイアウォールに攻撃されたようだった。

「うわ、ウイルスだったんだ。お前は監視されている？ って 脅迫のつもりかな」

芽衣が再度、パソコンの電源を入れるとシステムは起動したが、ユーザ領域に保存していたファイルやデータはきれいになくなっていった。大切なデータだ。と言っても不正に入手したものばかりだったが、ウイルスによって消去されてしまったことに、芽衣は頭にきた。CD・ROMに保存している自分のハッキングツールの中から、一番強力なウイルスを装填し、さっきのウイルスを送り込んできた相手に送り込んだ。自分にしかけられたものと同じタイプのウイルスだった。

「ざまあ見ろっての。でも誰だったんだろう」

芽衣が心配したところで何も解決しないのは分かっている、専門分野外のことは兄貴に聞くしかなかった。さっきの解読したファイルは消されたのとは別の領域に全部残っている。分析してもらおうと思って、大学にいるであろう健一の携帯電話に掛けてみた。

「あ、お兄ちゃん？ 芽衣だけど」

「なんか用か、仕事中に掛けるな」

「せっかく、かわいい妹が電話してるって言うのにい」

「かわいくなんかない」

「身もフタもないこと言わないでよ」

「それで何だよ？」

「聞きたい？」

「ふざけるな、切るぞ」

あまりふざけると本当に怒ってしまう。

「いや、本当に面白いファイルをダウンロードしたんだ」

「ほお？」

「今日ね、音楽ファイルをダウンロードするつもりがね、変なファイルで暗号ファイルだったの。それでその後、相手からこっちに向けてウイルスを送り込んできたの」

「何？ 逆探知されたってこと？ お前何もしなかっただろうな」

「ううん、一番強力なウイルスを送り込んでやったわよ」

「ふうむ、余り無茶をするんじゃない。お前のやっていることも違法行為なんだから、問題にされたらこっちが圧倒的に不利だ。まあ済んだことはいい。そのファイルとやらをこっちに送れよ。暇があったら解読しといてやる」

「ありがとう、じゃあすぐメールに添付して送るね」

芽衣は兄貴に忘れられないうちにすぐに送信した。

「それはそうと、芽衣はもう来年の進路は考えているのか？」

健一は急に話題を変えた。現実的な話題だった。芽衣は今現在、都立高校の三年生だった。もう二学期である。模試の成績もいまいちだし、来年どうなるか、想像したくもなかった。

「ううん、まだ悩んでいるところ」

「なら、うちの大学の計算機物理に来ないか？」

「どうして？」

「俺が、なぜ優秀な同級生を差し置いて飛び級で大学院に入り、最短で博士号をとり、助教の椅子を獲得できたか知ってるだろう。俺の強みは、教授や准教授に取り入ることがうまかっただけだ。だから、信用のできる手下が欲しい」

「またあ、そんな事言ってお父さんが聞いたら落胆するよ、お兄ちゃんが飛び級したときもすごく喜んでたし、博士号とったときは近所中に言いふらしてまわったんだから。でも、お兄ちゃんの役に立ちそうならちょっとは考えとくね。でもあたしの成績じゃ東都大なんて無理よ」

「うん、まあ前向きに考えておいてくれ、受験のときは教授陣に根回しはしておく」

芽衣はこれには、返事しなかったが、健一には研究者なのか政治家なのかよくわからないところがある、とにかく「研究」の二文字より「根回し」の三文字の方が好きなのだ。メールでさっきの「CODE 1」を計算機センターの兄へ送ると、一時間ほどして芽衣の携帯電話が鳴った。

「おっ、芽衣か？　色々面白い情報を送ってくれますな。解読は五分ですんだんだがファイルは中国語だった。お前のパソコンに簡体字フォントは入ってないのか？　まあいいけど、そんでもって、中国人留学生をつかまえて色々内容をチェックしていたんで、返事が遅くなった」

「それで、どういう内容なの？」

「電話で言っているのかどうか判らんが、内容がよく判らんからいいだろう。有事の際の作戦の一つとして、日本の原子力、火力発電所の操作パネルのOSを外部からのアクセスで改竄し、発電所自体を運転不能にする計画らしい」

「それって、大変なことじゃん、そんなことが本当に起こったら？」

「まあまあ、この文書だけでは、誰が、いつ、どんな手順でこんな事態を引き起こすかがまったく不明なんだ。拾ったファイルとっていたな」

「うん」

「そしたら、IPアドレスとかパケットの通信径路が割り出せないか？　単なるいたずらファイルだったら大騒ぎするだけ恥をかくことになるぞ」

「わかった。調べてみる」

IPアドレスとはインターネット上につながっているパソコンやサーバーに一台ごとに割り振られているナンバーで、アメリカにある十三台のサーバーで、管理・運営されている。個人のは、接続会社がまとめて登録して接続するごとに割り振ってくれるのだが、大きなサーバーなどは固定されたアドレスになっている。従って、IPアドレスが分かれば、相手と管理者、連絡先が検索可能である。パケットはデータのかたまりだ。

芽衣の使用しているダウンロードソフトは計算機センターからコードの一部を拝借したオリジナルソフトで、インターネット上のパケットの動きを監視し、欲しいソフトだけダウンロードするようにアレンジしたものである。従って、パケットの経路履歴なども調べられる様にできている。

ただ、「CODE 1」は、芽衣が強引にダウンロードしたもので、発信場所は中国国内になっていた。しかし、インターネットで調べても、この会社についての情報は一切なかった。

「ホームページもない……の？」

と芽衣はつぶやいた。今時、ホームページを持たない企業など考えられない世の中だった。会社の格付けも下がってしまうだろう。

芽衣は、インターネットでこの会社の取引先やメインバンクを探したが、ここでもこ

の会社と取引している会社が検索にかかることはなかった。ということは、実際には営業実態のないダミー会社と考えたほうがよさそうだった。だが、中国の商社の登記簿を調べるわけにも行かないし、実態のない会社を訪問する訳にも行かない。ここまでで、調査は限界だった。芽衣は行き詰るのはちょっと悔しかったが、今は受験生なのだ。こんなことにかまけているわけにはいかない。もともと新作アルバムをダウンロードしておしまい、にするはずだったのだ。

結局、迷った挙句、芽衣は健一の携帯電話にかけた。

「お兄ちゃんどうしよう」

「どうだった？」

芽衣は「CODE 1」の発信元が中国国内の商社で、どこにも取引実績のないダミー会社であることを告げ、調査が行き詰ってしまったことを説明した。

「ふーん……やはり本物かもな」

「どうしよう」

「さっき、電気工学科のやつに聞いたんだが、普通、発電所の操作盤は四、五台のUNIX端末を通信ケーブルでつないでいるだけだから、外部との接点は発電量の指示の他にないらしい。外部から接続できるとするなら、その方法を突き止めないとな」

「突き止めるって、どうしたらいいの？」

「こちらから発信元に侵入して他のファイルを探してみるか？」

「それって、非合法なんじゃないの？」

「いつもお前がやってる音楽ダウンロードだって非合法なんだよ。でも、万一危険な目にあっても困るから、大学のパソコンを使えよ。交通費のバス代くらいは経費で出してやる」

「もうっ！　いつもその調子なんだから」

とは言いつつも、芽衣もここまで介入した以上ここで手を引こうとは考えなかった。

お気楽な高校生活。いつも聞いているミュージック・サーバーの音楽。家へ帰ればテレビの衛星放送にパソコン。こんな便利で平和な生活が、サイバーテロによってぶち壊されてしまう。こんなことをたくらんでいる人間がいることが芽衣には許せなかった。

その日の夕方、家族で食事中にテレビのニュースを見ていると、緊迫感のある口調で、——沖縄と中国との中間線付近の海域で、中国海軍の駆逐艦とアメリカ第七艦隊所属の駆逐艦が小競り合いをし、一触即発の事態に陥りました。情報は海上自衛隊の哨戒機からの情報によるものです。詳細な情報は現在入ってきておりません。とアナウンサーが早口に喋っていた。

健一は芽衣に疑わしげな口調で尋ねた。

「お前何かしたのか？」

「知らないわよ。海軍に知り合いなんていないもの」

「馬鹿なこと言ってないで早く食べなさい。片付かないじゃないの」と母親。

「はい」

ニュースの映像はセンセーショナルなものだったが、芽衣は海軍の小競り合いなんて興味がなかった。

ハッカー

2. ハッカー

ワン・イー（王偉）は那覇空港近くのホテルの一室にいた。

昨日、彼の雇い主である、ウー（武）大佐から、本部コンピュータサーバーが落ちたと言われ、事態の収拾に当たっていたのだ。ワンが調べたところ東京の個人の端末からアクセスがありその直後に電源が落ちたことが分かっていた。大佐は即座にシステムの復旧に当たっていたが、ワンには相手の正体を突き止めることと、敵国エージェントであれば抹殺せよと指示を受けていた。

とんとんとん、とドアをノックする音がした。

「どうぞ」

ワンは流暢なアクセントの日本語を話した。

「失礼、どうも、王《おう》さんお久しぶりです」

背広姿の男が入ってきた。九月半ばとはいえ沖縄はまだ暑かった。額に浮かんだ汗を拭いているところからホテルについてすぐだと分かった。

「勝永さんには、わざわざ遠いところをお越し頂いて申し訳ありません。まあ、おかけ下さい。ドアの外の人にもどうぞ」

ワンは水差しのコップを指で指した。ドアの外の人など見えないが、ボディガードを二、三人は連れていていると思っていた。わざわざ那覇まで呼び出したのには理由があった。ワンは上海にいたので、成田へ行くのも那覇に行くのも大した違いはなかったし、実際のところ最終ターゲットは東京都墨田区内まで割り出してもいた。

「いや、よくおわかりで」

勝永と呼ばれた男は愛想笑いを浮かべたが、目には冷たい光があり決して和らいだ雰囲気ではなかった。この暑いの中にもかかわらず黒っぽい高級ブランドの背広を着込み、人相は悪いが顔には傷一つない。ワンとは対照的な男だった。

勝永の経営する会社で大佐の所属する組織から金を貸している、という情報を聞いていた。ワンはそれだけしか知らないが、その情報だけで過去六ヶ月の間、仕事をしてきたのだ。ワン自身、大佐の個人的な情報屋に過ぎず、その計画の全貌を知らされたことなど一度もないが、これまで絶対的な忠誠を持って任務をこなしてきたのだ。勝永は金を振り込まれているだけで実際にはワンとしか接触してこなかった。つまり、組織のボスのように思わせているのだ。敬愛している大佐にこんな勝永ごときの相手をさせるわけにはいかない、そうも思っていた。

「それで、今回の相談なんですがね」

「ええ」

勝永は手を組んで身を乗り出した。

「我々の組織に手を出す奴がいてね、本社のデータベースを壊されたのです。相手は東京都墨田区まで割り出しました」

それを聞いた勝永は少し鼻白んだ。だったら、わざわざ沖縄まで呼び出すんじゃないと、不満が顔に出ていた。

「王さん。あなた、どうしてこんなホテルにわたしを呼び出したんです。わたしが東京で仕事をしていることを知ってらっしゃるでしょう」

「ええ、よく存じてます。今回の仕事は少し物騒なのと、他人に漏れると困るのです」

ワンはそう言って自分のジャケットの左胸をちらっと見せた。拳銃のグリップが見えたはずだった。勝永がよほどのひま人でない限り、飛行機で沖縄に来る、そのために拳銃は持ち歩かない。

その条件はワンも同様だったが、オールプラスチック製の拳銃だった。元はオーストリア製のグロック26Cだった。プラスチックのフレームにスライドとバレル、ハンマーなどが金属製だが、ワンの持っている物はすべてがプラスチック製で、彼の組織が手配した物だ。もっとも、トイガンに実弾を詰めただけの代物で一発撃ったら壊れることは彼も承知していて、もっぱら威嚇《いかく》と自決用にしか使えない物だった。

勝永は少しうろたえたが、やはり、肝は据わっていて動じなかった。

「王さん。冗談が過ぎますな」

「ええ、冗談ですよ。おもちゃです」

「それで、その東京の御仁とは誰なのです」

「実はそれを探って欲しいのですよ」

「まさか、冗談もほどほどにしてください。わたしの本業を御存知でしょう」

勝永が会社経営を表向きにしている暴力団幹部と知っているからこそ、ウー大佐が目をつけて金を流しているのだ。

「勝永さん。ここだけの話です。今回のターゲットは三種類考えられます。一つは日本の官憲、たとえば警視庁サイバーポリス。二つめはアメリカのエージェントにそそのかされた地下活動家。三つ目は個人の犯行。……あなたは、探偵を何人か雇って恐喝などの非合法活動も行っていきますね」

ワンはわざと弁護士のような物の言い方をした。

「そう言われれば、探せないこともないですねえ。しかし、警視庁に手出しは出来ませんよ。命がいくつあっても足りません」

「ええ、単純にサイバーポリスなら外交筋から圧力を加えてもらいます。ですが、地下活動家がネットカフェなどを使って動いているのなら、勝永さんに消してもらいたいですよ」

「はあ、それが言いたくてここまで呼んだんですか。いやはや、……ノーと言ったらどうします？」

いかに暴力団幹部といえど一般人に対する殺人などそう簡単に犯すことは考えていなかった。よほどの対価を要求されるに違いない。あとは、交渉しかない。

「あなたはノーとは言えないはずだ。金を返せとけちなことは考えていないが、あなたの会社に乗っ取られ従業員の皆さんが路頭に迷って、あなたを逆恨みするかも知れないし、またあるいは、金の流れを国税庁にたれ込まれるかも知れない。結果は同じことだ。従業員のみなさんが給料をもらえなくなってもあなたに忠誠を捧げるなら別ですけどね」

ワンは一気に喋った。金の流れ以外に取引材料がないのだが、実際に一番強いのは金なのだから分かり切った取引ではあった。肝心なのは彼が部下の前でOKする姿を見せて、部下の軽蔑を買うのを防ぐことだった。勝永が失脚すればせっかくの金が無駄になってしまう。

「ふむ。……一つ条件があります」

「何でしょう、出来ることでしたら」

「相手が警官なら手出しはしません。情報だけ提供します。もし、ちんぴらなら処分はこちらの自由でいいですね」

「こちらへの引き渡しという意味なら、不要です。埋めるなり沈めるなり好きなようにしてください」

「ああ、それから、上海の合弁会社への投資なんですが、役所へ口を利いてもらえないですか。日本企業で金を流したいというのがいるんです」

「ええ、いいですよ。では、三日以内に見つかっても見つからなくても一報をいれて下さい。いいですね」

「ええ」

勝永は不承不承だったが引き受けた。もし東京だったら大勢のボディガードがつくだろうから、もっと高飛車な態度で、殺人をねたに条件をつり上げていたに違いなかった。それに、ワン自身の危険も高まるのだ。勝永相手にさらに金を要求されでもしたらウー大佐からの信用が下がってしまうので、ワンにとってはむしろこっちの方が心配だった。

彼が部屋を出てホテルからタクシーが出て行くのを部屋の窓から見送ると、ワンは水を飲んだ。北京の本部に連絡を入れてウー大佐の声が聞きたかったが、国際電話はアメリカに盗聴されるおそれがあるので時間をおいてから暗号化した電子メールを入れることにした。

窓の外を見ながら、気ばかり焦るのを感じた。

昨日、上海で反政府組織の探索に当たっていたワンのところにウー大佐直々に緊急命令が入ったのだ。温厚篤実な大佐にしては、鬼気迫る勢いだった。

ワン・イーは四川省の農村で生まれた。両親はなく、おじ夫婦に育てられて子供時代を過ごした。母親が父親の知らない子供である彼を産んでから、しばらくは観光ガイドをして働いていたがワンが物心つく前に亡くなってしまっていた。父親が分からないために、ワンはおじたちに家畜のような扱いを受け、それに、戸籍もなかったから、学校にも行っていない。物心つく頃から自然と社会を憎む様になっていた。

十三歳で、村の若者と上海に飛び出してきて、職もないままスラム街で暮らしていた。

稼ぎは恐喝と窃盗だった。手先が器用で頭がいいことを買われてすぐに暴力団幹部に見いだされて手下となった。

ウー・シャオ・フー（武小虎）に出会ったのは上海市内の繁華街だった。ワンがいつもの喧嘩をしていると、物腰の柔らかい中年男が仲裁に入ってきた。最初から路地に引き込むつもりだったのだ。だが、ウーはたやすくワンの腕をねじり上げ動けなくしてしまった。後で、陸軍の格闘戦のエキスパートだと知り本気で殺されなくてよかったと思っただけだ。ウーはワンの身の上を聞くと彼を自分のマンションの部屋に案内した。それまで、見たこともないくらい豪華な部屋だった。そして、しばらく泊まっていいと言い、飯を腹一杯食べさせてくれた。

なぜ、自分にこんなことをしてくれるのかと、ワンは疑問に思った。このまま薬を盛られて臓器を売られるのではないか、そんな疑いを抱いた。そんなワンに対して、ウーは率直に語ったのだ。

——君のボスから、君が頭がいいことは聞いている。腕っ節の方も自分の手で確かめた。簡単にねじられたのは君が素人だからだ。特殊部隊に入って訓練を積みばすぐに自分を抜くだろう。どうだ、国家のために尽くしてみないか？

ウーはそう言った。国家とは共産党のことだが、ワンはなぜ自分をスカウトするのか聞いた。いくらでも役に立ちそうな若者がいると思ったのだ。それに最初から知っていて近づいたのが気に入らなかった。

——君に両親がいないことは調べさせてもらった。この国のエリートはみんな一人っ子なんだ。

そう聞いて余計に逆上した。親がない子なら死地に送り込んでいいのかと言う思いだ。

——わたしにも、君の年齢くらいの息子がいたんだ。事故で死んだがね。

それが、ワンをスカウトした本心の様だった。少なくともワンはそう信じ込んだ。それで、ウーの下で働くことを了承したのだった。このときの選択は間違っていなかったと十五年たった今でも信じている。彼はのちに大佐となったウーの養子として戸籍を作ってもらい、人民解放軍将校の扱いで北京に高級マンションをあてがってもらっている。本当にウー大佐の息子のような扱いだ。大佐は裏で画策して出世するタイプではなく、陸軍時代から温厚篤実な人柄で部下から慕われ、その人徳を持って、党中央軍事委員会直属組織である電子戦攻撃部隊を任されるようになったのだ。このとき、ワンも大佐を父と慕って、彼の個人的情報部員として働いてきた。大佐の取り計らいで上海交通大学にも少しだけ通い、コンピュータが使えるようになり、今では、文字通り大佐子飼いのハッカーの一人となっている。

そうなる、それまで冷たかった親戚がワンを英雄のように扱いだしたのがおかしかった。野良犬のように扱われていたのに急に書をかいてくれと言ってきたのだ。ワンは冷笑しながら汚い字で書いてやった。

彼は絶対の忠誠心を大佐に持っていることを誇りにしており、金だけで動く連中を軽蔑しているが、それも、彼自身そうした尊敬から生じた忠誠心というものを信じたとい

いう願望があるからに他ならない。

その、大佐が困っているのだ。

大佐は私利私欲で動く人ではなく、本部サーバーが落ちることが、国家の大事であることを一番認識しているからなのだ。いざ、戦争と言うときに戦車や戦闘機だけで戦うと被害が大きくなる。そのために、敵の国内の通信や電力を攪乱して前線に出撃する数を少しでも減らすための電子戦部隊なのだ。だから、これが停止している間は、軍も大きな作戦を実行できないことを意味している。

学のないワンでもそれくらいは以心伝心でわかっている。

夜間になりインターネット人口が増え、接続が難しくなるタイミングを見計らって、ワンは北京のウー大佐に電子メールを送った。東京の勝永に仕事を依頼し、彼がそれを引き受けたという内容だった。この時間帯のメールなら大量のデータに紛れてすぐには発覚しないし、仮にマークされていても解読される頃にはすでに上海に移動していると思った。

ワンはウー大佐への連絡が終わると、上海に国際電話を掛けた。これは、プライベートな電話だった。

「こんばんは、まだ、起きていたのか？」

「もう、長期出張だと言うから心配してたのに、近くにいるの？」

「いや、国際電話なんだ。あまり長くは話せない」

「そうなんだ」

相手はワンの恋人だった。マー・ジャ（馬佳）という二十歳の大学生だ。父親が党幹部で裕福な家庭の女の子だった。ワンの元の身分ではとても付き合える立場ではなかったが、ウー大佐の息子の身分で将来の結婚まで約束されている。お互いそのつもりでつきあい、ワン自身彼女にはまだ手も出していないのだ。

金で囲っている女は、北京と上海市内に三人ほどいるが、もっぱら彼の仕事専用だった。

商社の駐在員や大使館職員を落とすために、彼女たちを使い、ベッドシーンを撮影し恐喝して相手のIDやパスワードを頂いてしまう。凄腕のハッカーとして極秘情報にアクセスするために、ときに、こういう手段を使っている。

自分の女をこういうことに利用するなど、普通なら抵抗があるものだが、ワンはその生まれからこういう女達を心の底から軽蔑しており、殺す以外のことは、少しの呵責もなかったのだ。

そんなワンもマー・ジャだけは心から愛していた。深窓の令嬢として育ち、ワンのこれまで見たことのないタイプだったから余計にそう思っていた。それに、二十歳になって男も知らない彼女に、レディに尽くすナイトの様に自分をダブらせていた面もあった。だから、彼女の父親に婚約を許されても、彼女の身体には未だに指一本触れてもいな

かった。

「ね、今どんな仕事をしているの？」

「国際電話ではいけないんだ。軍の仕事だ」

「へえ、すごい。わたしも卒業したら入ろうかな」

「もう、共産党青年団に入ってるじゃないか。君が卒業したら結婚して近くにいて欲しいんだ。だから軍だけは困るよ」

そう言うと彼女は笑った。ワンに取り天使のような声だった。

脆弱なネットワーク

3. 脆弱なネットワーク

翌日、芽衣は高校が終わってから兄の大学の研究室に行った。芽衣が来ることについて、学生たちには来年受験のための見学生だと健一から言っているようだった。その辺は健一は抜かりなかった。

作業用に、芽衣は一台のパソコンをあてがわれた。ちょっと型遅れの感はあるが、実際には計算機センターの大型コンピュータに接続されている端末なので性能的にはまったく申し分なかった。

芽衣は作業を開始した。

家から持ってきたCD・ROMを挿入する。芽衣の作ったハッキングツールが入っている。そして「CODE 1」の発信元の会社のIPアドレスにアクセスした。芽衣特製ブラウザソフトに文字列が流れる。危険なので画像などは表示させない様にしてある。IDとパスワードの要求画面が出てきた。芽衣は兄の前だったが瞳を素早くスキャンさせパスワードを解析して一分でアクセス可能になった。案外、ラフなセキュリティーだと芽衣は思った。パスワードを抜くのも、特技のひとつだった。

「ほう。さすが芽衣は天才ハッカーだな」

と健一は茶化す。確かに、他人のコンピュータに侵入するのは容易なことではない。

「もう。茶化さないでよ。これでも集中してるんだから」

「ごめん、ごめん。それで、何か役に立ちそうなファイルはありそうかい？」

「うーん。ファイル名は判るんだけど、中身は全部中国語！ わけわかんない」

「確かに『CODE 1』というファイルもあるな。それフォルダごといただいておけ」

昨日、芽衣がダウンロードしたものの親フォルダだった。

「了解」

その瞬間、相手のファイアウォールが、作動し、芽衣のブラウザソフトに警報の文字が流れる。芽衣は慌てずアクセス履歴を改ざんしてから通信遮断をして行方をくらませた。芽衣はただの会社ではないと感じた。おそらく情報機関だろう。だとすると、昨日の警告の文字はひょっとしてここから送られてきたことになる。芽衣は何かやばいことをしたような気になった。

収穫したファイルには中国語の文書ファイルと、暗号化されたプログラム、名簿などが入っていた。

「お兄ちゃん、このプログラムが発電所を止めるウイルスなわけ？」

「それは判らない。ここで解読してみるけど、外部とつながっていないコンピュータにウイルスを送り込めるわけではないんだが.....」

「そのからくりを暴くのが次の仕事というわけね」

「まあ、そういうことだ」

中国語の文書ファイルについては、健一が、文学部の学生をアルバイトに雇って翻訳させることにし、暗号化ソフトは計算機センターのコンピュータにかけることにした。内容がやばいものであることを直感した健一は、今回は中国人留学生は使わなかった。

暗号ソフトはすぐに解読できたが、単なるインターネット上に広まっているウイルスだった。これにはあまり情報価値はなかった。

健一は、その後、教授の学会発表に付き合っ、一週間、出張に出かけてしまった。芽衣は不安だったが、その間自分だけで調査を継続するしかなかった。だが、高校生活もあり余り時間が割けなかった。

芽衣は、現在文系志望コースにいる。特に進学校でもなく中堅校なので兄の通勤している東都大学へいける可能性はまずない。理学部など特にそうだ。兄は教授には根回ししておくと言っていたが、そんなことは高校の進路指導教諭には言えるはずもなかった。

友人たちは、短大組か就職組がほとんどである。先日の進路調査には、私大の教育学部と書いたばかりだ。マークシート問題の鉛筆ころがしはよく当たる方であるが、二次試験の記述式問題や論文問題には通用しないだろうことは、わかっている。

友人関係は、と言うと、結構、美形であるのだが性格……人の話を聞かないところ……に問題があり、男子にも女子にも余り人気がない。親友と呼べるのは、中学から一緒だった中原裕子一人だけだ。高校生活は先日のハッカー事件以来、事の経過が気になってしょうがないので、ぼうっとし勝ちにになっている。

だが、今日の裕子は芽衣以上にぼうっとしていた。目が赤くなっている。芽衣は心配になり聞いてみた。

「裕子、どうしたの？ 目が赤いよ」

裕子の目から涙がこぼれた。芽衣は誰か亡くなったのかなと心配した。

「どしたの？」

「お父さんがね、昨日仕事中に倒れたんだ。くも膜下出血で救急車で運ばれたの」

「えー、嘘、お父さんて商社員でしょ」

商社員だろうが、公務員だろうが倒れるときは関係がなかった。

「きっとあたしの進学で学費がかさむから頑張りすぎたんだよ」

芽衣には耳が痛かった。

「それでどんな具合なの？」

「隅田川総合病院に入院中なんだけど……昨日ね、急に電話があつて……救急搬送さ

れた先で緊急手術で頭を開けて血腫を取り除いたらしいんだけど……」

それだけ聞いて芽衣は気分が悪くなった。グロいのに弱いのだ。だが、裕子は更に続けた。

「それで頭蓋骨を元に戻したんだけど、意識が元に戻るかどうか分からないんだって。今は生命維持装置につながってるの。今日も学校が終わったら見舞いに行くんだけど。ICU（集中治療室）の中だし」

「入れないの？」

「ガラス越しに見られるだけ、もう少ししたら滅菌服を着て、中まで入れてくれると言ってたけど。いつになるか……あたし、もう大学行けそうにないや」

「もう、水くさいわね……あたしもお金ないけど」

「ありがと、気にしてくれて。病院代は生命保険から出るんだけど、学費までは面倒見てくれないから」

裕子はそう言ってまた机に突っ伏してしまった。背中をさすっても泣いているばかりだ。芽衣も気持ちは分かるような気がした。芽衣の親父と違って裕子のパパは、優秀な商社マンなのだ。裕子はあんなオーバーなこと言っているが、あのパパなら裕子を大学へ行かせるだけの貯金くらいしているだろうと芽衣は勝手に思った。

話相手がなくなってしまったので、久々に斜め前の席の智美に話しかけてみた。別に仲がいい訳じゃないが、智美は無駄に敵を作るような性格でもなく、芽衣の話し相手になってくれた。おしゃれの話をしていたら、ついでに進路の話も出てきた。推薦で早く決まる人っていいよねーなどと話題を振ると、

「そう言えば、芽衣知ってる？ ついに我がクラスで就職内定第一号が出たよ」

「え、誰？」

「藤原さんだって。関東電力総務部らしいよ」

「何で、関東電力？」

「親のコネだって。発電所の所長だと偉いのかな？」

「へえ～」

願ってもない情報源が近くにあった。だが余り親しくないので、苗字しか知らない。クラス名簿で確認してから呼びかけた。ロングの黒髪が似合う、ちょっと大人びた感じの美人だった。いかにも、大企業の受け付けにいそうな雰囲気である。

「理恵ちゃん、だったっけ？ 就職決まったんだって、おめでとう！」

「ありがとう。でも親のコネだから……」

「コネがあるだけいいわよ。でね、発電所のお仕事ってすごく興味があるの。今度お父様に会わせていただけないかしら」

——なんか不自然だなあ、と芽衣は思った。

「今日うちで私の内定祝いするからいいよ。一人でも多いほうが楽しいから」

「そう？ほんとにいいの？ ありがとう！ 絶対行くね」

なんていい人なんだろうと思った。

まずは約束を取り付けた。一旦家に帰って荷物を置いてから、藤原理恵の家に向かった。バスの中から芽衣は健一の携帯電話に連絡して、発電所の所長に会えることを伝えた。

「せっかく会えるんなら、今使ってる操作盤が中国製でないかどうか確かめて見てくれ」
「そんなこと言われても、初めていくうちだし、そんなに親しい友達でもないしわかんないよ」

「そうか、まあできるだけ情報を集めてくれ」

「うん、わかった」

電話をするうちに目的のバス停に近づいた。藤原理恵の家は歩いて十分位と言っていた。バス停で待ち合わせ、彼女の家に向かった。藤原理恵が歩きながら話しかけてきた。

「ねえ、黒澤さん」

「あ、芽衣でいいよ」

「じゃあ、芽衣ちゃん」

「うん？」

「芽衣ちゃんって、パソコンのこと詳しいんだよね？」

「いやあ、詳しいってほどでもないけど、お兄ちゃんが専門家だから自然と鍛えられちゃったというか……どうして？」

「あのね、今、あたし、お父さんと一緒のパソコンでインターネットを使っているんだけど、時々怪しげなメールが送られてくるの。一度見てくれない？」

「怪しげって？」

「何て言うのか、出会い系って言うの？　そう言うやつだと思うんだけど、全然、そんなホームページなんか見たことないのに、メールが送られてくるの。なんか心配で」

「わかったわ、一度見てあげる」

「ありがとう。助かるわ」

午後六時に、芽衣は藤原家に着いた。早速理恵の母親が出迎えてくれた。

「あなたが黒澤さん？　今日は来てくれて有難う」

「いいえ、本日は、理恵さんのご内定、本当におめでとうございます」

「いえいえ、うちの子は成績が悪くて、それで主人が在籍中に、無理やり入れてもらったようなものですから。黒澤さんは、お兄様が東都大の先生をされているとか？」

「はあ、私もちょっとはあやかりたいんですが、成績のことを言われると頭が痛いです」

「まあ、でも黒澤さんは、女の子らしくていいわ、うちの子なんてがさつで……」

「いいえ、理恵さんはおしとやかで、素敵な人だと思いますよ」

芽衣は理恵ががさつなら、自分など例えようもないほどがさつだと思った。

そこへ理恵が口を挟んだ。

「もう、お母さんいい加減にしてよ。芽衣ちゃんにはこれから、パソコンを見てもらう約束をしてるんだから」

「まあ、理恵ったら」

そして、一階の書斎にあるパソコンを見に行った。スイッチを入れると、普通にOS

が起動した。が、勘のいい芽衣はかすかに起動が遅い、ウイルスにやられているなど直感した。

準備が出来ると、芽衣はメールソフトを立ち上げた。確かに、スパムメールと呼ばれる出会い系サイトからのメッセージが大量に入っていた。芽衣は一つ一つ、メールヘッダーを読み、二、三の限られたIPアドレスからの大量発信であることを突き止めた。芽衣は理恵に、安心させるためになるべく軽く言おうとした。

「大丈夫だよ、機械的に送られてきてるだけみたい。きっとどっかでメルアドがもれたんだね。心配無用、ファイアウォールでこのIPアドレスだけブロックをかけとくからね」
「芽衣ちゃんありがとお、これで安心して使えるね」

しかし、芽衣はウイルス対策ソフトの通信履歴が、あるIPアドレスからのネットワークウイルスをブロックしていた記録を見逃さなかった。あの中国の商社からのものである。

しかも、何回かはファイアウォールを通り抜けて、このパソコンがウイルスに感染していることもわかった。ここから発信されるメールのあて先を探している様だった。芽衣はどこだろうと考えた。

でも、このことを理恵に言うべきか、芽衣は迷った。言えば、必然的に彼女とそのお父さんを、この一件に巻き込むことになる。他のファイルを見ると、幸い、このパソコンは仕事には使っていない様だった。悪いが、このパソコンをリモート化して、監視させてもらおう、サイバーテロリストたちの手がかりがつかめるかもしれない。そう決心し、そおっと設定を変えておいた。

午後七時を過ぎて父親が帰宅した。

後で、理恵から聞いたところでは、千葉県内の発電所に東京から通勤しているらしい。本当は家族で引っ越したいらしいのだが、娘を都立高校から転校させるのが嫌とのことだった。

ささやかなパーティが始まった。理恵は一人娘なので、芽衣を含めて四人の食卓だった。

父親はビールをあけつつ、かわいい一人娘が自分の会社に入ったことがうれしくて仕方ないようだった。もちろん、自分のコネで入れた訳だからあちこちへの根回しが大変だったようだ。芽衣は、健一も芽衣を大学へ入れるために同じ様に根回しをするのだろうかどついで思ってしまった。

「黒澤さん、今日は娘のために来てくれてありがとう、これからも仲良くしてやって下さい」

「いいえ、こちらこそ」

「黒澤さんは進路はどうするの？」

「はあ、去年までは小学校の先生を目指していたんですが、今はコンピュータに夢中に

なってしまうと、それで、計算機物理学の方面に進みたいと思っています」

「ふうーん、それは偉いね、今はコンピュータ全盛だから無理もないかもしれないね」

「あの、発電所でも、コンピュータを使うことがあるんですか？　すみません、あたし何にも知らなくて。でも、こんなに平和で、便利な生活が送れるっていうのも電気があるおかげだと思うんです。なのに全然、そんな仕事を知らないなんていうのが恥ずかしくて」

「君は偉い！　気に入った。君の様な人材にこそ関東電力に入ってもらいたい」

「恐れ入ります」

「私の若いころはね、アメリカ製のアナログ計算機が入ってたんだが、徐々にデジタル化が進み、今の発電所は最新型プロセッサのUNIXマシンを五台通信回線で結んで使っている。どれが壊れても他の機でフォローできるんだ」

「外部とは信号のやり取りはしてるんですか？」

「発電用の機器からの信号だけだよ。それ以外は完全にスタンドアロンと言えるだろう。ただし、中央指令所からの指令は受けるけどね」

「コンピュータはどこメーカーなんですか？」

「そうだね。三菱電機か立河HP社が多いんじゃないかな。もっとも、中の基盤は中国製かもしれないがね」

「そうすると、無線LANやモデムボードを内蔵されてもわかりませんか？」

「まさか？　プラントメーカーの設計で回路図と部品を照合してるはずだよ。コストに関わるからね」

「そうですよね。あははー」

二人の会話に理恵と母親はまったくついていけなかった。しかし、父親は話の分かる相手がいって満足そうで、この後、一時間以上発電所の話で盛り上がった。芽衣も九時ごろには退出した。

帰りの足で、家の近くだったので裕子のパパが入院している病院をのぞいてみた。門限は過ぎてているが、救急病棟のICUなので二十四時間開いていた。廊下の椅子で裕子が座って涙ぐんでいた。

芽衣は、昔、親父が虫垂炎で入院したときのことを思い出した。墨田区の小さな電気店に勤めていたが、急に腹痛を起こして救急車で都立病院に運び込まれたのだ。一ヶ月ほど入院したが、あのときは芽衣は病院に行くのが楽しかった。別に芽衣が馬鹿だったわけではない。うるさい親父がおとなしく寝ていたのと、お見舞いのお菓子が食べ放題だったからだ。だが、今回の裕子のパパとは事態が違う。命に関わる状態なのだ。芽衣はそっと声を掛けた。

「裕子、大丈夫？」

「あたしは……うん、でもちょっと疲れたかもしんない。お父さんは全然反応がないし」

「お母様はどうしたの？」

「昼間会社の人が一杯お見舞いに来てくれて、その相手してる内に疲れちゃって、点滴打ってもらったんだけど、あたしが家で休むように言ったの」

「そう。早くよくなるといいね」

「ありがと」

「でも、大学行かないなんて嘘でしょ。お父さん目が覚めたとき、それで裕子が進学あきらめたなんて知ったら悲しむと思うよ」

「そうね、……あたしどうしたらいいんだろ」

「今できることを頑張りな」

「そうね」

芽衣は、そうね、ばかりだと気付いた。完全に心ここにあらずと言う状態だ。裕子が参ってしまう前にお父さんが意識が戻らないと、と思った。だが、芽衣がここにも何の役にも立てない。それで、裕子には申し訳ないが、芽衣は帰宅した。

帰り際、裕子のパパが体中にチューブやケーブルを機械につながれていたのを思い出した。

——もし、東京で停電が起こったら、裕子のパパはどうなるんだろう？

と思った。今まで、衛星放送が見られなくなることや、ビデオ録画ができなくなると心配していただけだったが、それ以上の脅威だった、親友のパパが死んでしまうのだ。芽衣が何とかしなくてはと言う気持ちだけが空回りする。具体的に何をしたらいいのかまだ分からないのだ。

芽衣が帰宅して落ち着いていると、十時ごろになり健一から電話があった。

「おお芽衣か？ まだ起きてる？」

「当たり前でしょ、これでも受験生なんですから」

「で、発電所の親父さんに会ったんだろ？　なんか収穫はあったか？」

「理恵ちゃんのお父様のこと？　一応お話は伺ったんだけど、発電所のコンピュータはスタンドアロンで外部との信号のやり取りはないって」

「あ、そう」

「それから、中の基盤は中国製かもしれないけど、これもプラントメーカーで回路図と部品を照合してるはずだと言うことです」

「その辺が盲点だな」

「どういうこと？」

「今のわが国の製造業は表向き日本人が働いているが、一歩見えないところへいくと外国人労働者がほとんどなんだよ。だから、基盤チェックなんて中国人かインド人の派遣社員の仕事になってる可能性があるんだ」

「ええーそうなの？」

「でも無線LANなんて可能性は低いかもよ」

「どうして？」

「今回の出張中に原発を見てきたんだが、壁が厚くて外から電波は入らない」

「そうなんだあ」

そして、芽衣は理恵のパソコンを見た際に、スパムメールはさておき、例の中国商社のIPアドレスからのネットワークウイルスの攻撃を受けていたことを健一に報告した。「お前、結構ついてるな。滅多にあることじゃないぞ。まさかそのままにして、帰ってき

たんじゃないだろうな」

「まあね。こちらから監視できるようにリモート状態に設定してきたよ」

「うんうん、上出来上出来。でも信号は家のパソコンで受けずに大学の俺のマシンに送れ。念のためだ」

「はあーい」

「じゃあ、あさってには帰るけど元気だな」

芽衣は携帯電話を閉じて充電器に差し込んだ。

あの中国の商社が、未だに暗躍しているようだが、芽衣のパソコンへの攻撃は、こちらからウイルス攻撃を掛けてからプツリと途絶えてしまった。あきらめたのかなと思っただが、ふと気が付いた。やつら、IPアドレスが分からなくなっているんだ。あのウイルスでこちらの大切なファイルを失った以上に、向こうもデータを消去されている。それで、芽衣のパソコンのデータが分からなくなったので、攻撃しようがなくなったのだ。

次の日、高校へ行くと藤原理恵が楽しそうに話しかけてきた。

「あのね、うちのお父さん、芽衣ちゃんのこと気に入ってしまって……それで、また遊びに来てくれる。なんか、急になれなれしくなって申し訳ないんだけど」

「そんなこと言わないで、こちらこそ急にお邪魔してしまって、でも、理恵ちゃんのお父様の仕事には興味があるから、また、寄らせてもらいます」

「ほんと？　ありがとう」

それから、進路指導教諭にも仁義を切っておかなければならない。

しかし、先日、芽衣は私立大教育学部で申告しているのに、今度は国立、しかも東都大学理学部。今の芽衣の成績では、どう考えても、考え直せと説教されそう。それに自分でも合格できるとは、到底思えない。試験会場に行くことすらおこがましく感じてしまう。智美に、東都大だけ省いて相談してみた。

「確かに、芽衣には女子の友達しかいないから、短大組か就職組ばっかだけど、男子の話も聞いてみるといいと思うよ」

「でも、うちの男子で成績のいいやつなんていないじゃん」

「それは、一方的な見方よ。別に偏差値三十八だって、東都大を受験してはいけない決まりなんてないんだから。それに、もともと一浪のつもりで、難関大学を記念受験する人も多い見たいよ」

「ふーん、男子ってそんなもの？」

女子の浪人は就職に不利、ちょっとだけ差別を感じた。でも、偏差値三十八で東都大受験する神経の持ち主がいることを知り、当面の悩みは吹っ切れた。進路指導教諭には黙っておき、勝手に受験して、もし合格したら報告すれば済む話だ。

放課後、就職も決まり、もう悩みも何もない理恵が話に加わった。

「実はね、芽衣ちゃんのパソコンを見せて欲しいなあーって前から思ってたの。駄目？」

「いいけど、本体はお兄ちゃんのお古だからぼろぼろで、画面も汚いよ」

「それがいいの。なんて言うのか、マニアが使い込んでる道具って言うの？　そういうのにあこがれちゃう」

「あれ、芽衣、藤原さんちに遊びに行ったの？」

「ああ、智美に話を聞いてから理恵ちゃんに話して強引に押しかけたの。いつの間にか友達になっちゃったね」

「今日はお兄ちゃんもいないし、みんなでおいでよ」

芽衣の家は下町にある一軒家で築四十年位だ。兄の健一が東都大に入ったのを機に、健一のリクエストで光ケーブルを敷設した。おかげで、芽衣のパソコンと大学の計算機センターは、高速回線で結ばれているので、お古のパソコンでもスーパーコンピュータの端末として使うことができる。

これを見た友人は、ウィンドウの画面が出てこないことに驚き、さらにアプリケーションのほとんどを自分で作っていることに驚嘆の声を上げた。

「芽衣ちゃんてほんとにマニアなんだね。こんな文字ばかりのコンピュータなんて、あたし全然理解不能だよ」

「でも、性能は世界一だよ、今のところね」

そんな話をしていたら、芽衣の母がケーキと紅茶を持ってきた。

「あらまあ、いつも芽衣がお世話になっています」

「いえ、こちらこそ。この間なんて芽衣さんにうちのパソコン見てもらったんですよ」

「まあまあ、余り調子に乗せないで下さいな。こんなことばかりやってて成績はさっぱりなんですから」

「もう、お母さん、いい加減にしてよ。成績のことはほっといて！」

母親は、はいはいと言いながら、降りて行った。

「でも、芽衣、こんなパソコンでゲームとかできるの？」

「もちろん、コマンドを打ち込むと、画面が開くの。基本的な画面はウィンドウと同じだよ。て言うかマクドナルドOSに似てるかな」

ほら、と、操作するとネットゲームの画面になった。シミュレーションゲームにもなる。

「ふーん、でも動作が滑らかだね」

「このパソコン自体は遅いんだけど、実際の処理は大型コンピュータでやってるから」

「え、そんな事できるの？」

「これ、ほんとはお兄ちゃんの計算機センターの自宅端末なんだ」

「へえー、いいな。と言っても、あたしには使えそうもないけど」

「慣れれば簡単だよ」

智美と理恵は十分、好奇心を満足させ、友人たちは五時ごろ帰宅して行った。

この後、芽衣はまた、裕子のパパの入院している病院に見舞いに行った。今日は裕子

のママだった。

「あの黒澤です」

「あらまあ芽衣ちゃん？ 大きくなって。また遊びに来てね」

確かに身体だけは大きくなっていた。

「はい、ありがとうございます。それで、お父様の具合はよろしいんですか？」

「まだ、手術後とほとんど一緒。でも先生が、体温と脈拍は一定してきていると云われました」

「そうですか？」

だが、体温と脈拍と病状との関係がさっぱり分からなかった。

「黒澤さん、進路はどうなさるの？」

「私大の教育学部を考えています」

「そう、うちの裕子も大学を目指してたんだけど。お父さんが入院してから、進学あきらめるって言い出してね。でもね、主人がいつ倒れてもいいようになって、裕子の学費だけ別に貯金してあるから、行っても差し支えないのよ」

「あたしも、あきらめるなって説得はしたんですが」

「もうちょっと時間が経たないと、考えもまとまらないかな」

「そう思います」

芽衣はこうした場ではつくづく無力だと思った。そこに主治医の先生が診察に来た。芽衣は先生に質問してみた。

「あの、裕子のお父さん、いや、中原さんの身体につながっている機械なんですが」

「ああ、生命維持装置のことかい？」

「はい、あれって停電の時どうなるんですか？」

「非常電源があるから、医療器具と電子カルテは使えるようになってるよ。エアコンは切れるけど」

「ああそうなんですか、でも、どのくらい持つんですか？ その非常電源」

「地下1階のガスタービン発電機が電源なんだ。燃料は三日分あるから大丈夫だよ」

「そうですか」

芽衣は、三日では足りないと思った。東京で大停電が起これば、コンピュータシステムはほぼ壊滅する。電力会社は手作業で復旧作業に当たるだろう。数週間電気のない生活になる可能性がある。そうなると、裕子のパパは三日の命と言うことだ。だが、そんなこと、医師にもお母さんにも言えなかった。小さい声で、それではと母親に告げて病院を出た。裕子のお母さんが今日は来てくれてありがとうと言ってくれたのが、芽衣の背中に突き刺さった。

兄の健一が出張から帰ってきた。いそいそと迎える父と母だった。芽衣とは扱いが違う。

「芽衣、明日あいてるか？」

「土曜日だから午後からなら……」

「土曜日なんて何があるんだ？」

「生物部の活動。金魚にえさをやって記録をつけなきゃならんのだ」
「そうか。なら、この間のハッキング結果の分析をやろう、昼から大学へ来てくれ。昼飯はおごってやる。と言っても、カレーライスくらいだけだな」
「暗号解析結果だけなら、うちの端末でも見られるのに……」
「馬鹿者！ 足が付くようなことをしては情報分析屋としては失格。情報は収集より分析が命なのだ」
「わかりました。行けばいいんでしょ」
「分かればよろしい」

芽衣には、この兄の行動は全く予想できない。本来は研究者であるべき理学部の助教が、政治家の様な活動をずっとやっている。また、本業とは関係のない電力会社へのサイバーテロの調査を熱心にやっている。芽衣としては、うれしいのではあるがこれもこのままでいいのか、ずっと気にしている。ひょっとすると、これをネタに新たな研究テーマを作ろうとしているのかもしれない。芽衣はそう思うことにしていた。

翌日、午前中は部活動で、昼過ぎに高校前からバスに乗り大学へ向かった。理学部前で降り、計算物理学教室の助教の個室をノックした。

「よう、早かったな」
「いいえ、で、何か分かったの？」
「ふん、余りよろしくない。都合ではさらに一働きしてもらわなきゃならんかもしれない。まあいい先に飯にしようか？ 学食と喫茶店どっちがいい？」
「たまには回らないお寿司がいい」
「はあ？」
「冗談よ、学食のカレーで結構でございますっ」

健一は芽衣を連れて学食に行きかけたが学生で一杯だった、結局、大学前の喫茶店に行き、健一はカツ丼定食、芽衣はスパゲティを頼んだ。お腹いっぱいになると、コーヒを飲みながら芽衣から話を切り出した。

「それで、この間のファイルの解読結果はどうだったの？」
「その前に重要な話がある。この間のお前のハッキングの後に、脚が付いていたみたいだ」
「どういうこと？」
「今日、警視庁サイバーポリスにいる友人から連絡を受けた。うちの家のネットが加入しているODAネットの社員を恐喝して住所を聞き出そうとした男がいるらしい。その男は任意で事情聴取を受けている」
「え？ ばれたの？」

芽衣は真っ青になった。ハッカーとしてのプライドらしきものが、ちょっとだけ傷ついたが、それよりも、訳の分からない男が自宅を突き止めてうろついているかも知れないのが不安だった。

「男は自称探偵らしいが、実際には暴力団に雇われてる情報屋ということだ。現在、警視庁捜査一課の捜査員が、その暴力団の内偵を進めるとともに、手を引くよう警告してくれている。一応、危険はないと思うが、夜間に出歩くことのない様、気をつけろ」

「うえーん。こわいよ」

「だから、危ないぞと言っただろう」

「でも、どうして警察が、あたしなんかのために動いてくれるのよ？」

「芽衣のためじゃない、個人情報保護法強化月間で点数を稼ぐ必要があるらしく、だから、組織犯罪対策課でなく捜査一課に話を回したそうさ」

「サービスが違うの？」

「政府がらみの圧力だと言うことを強調したんだろう。いつものマル暴の刑事だと、安心してもらっては困る」

「そうなんだ」

芽衣は一安心した。

「それで、解読の方はどうなったの？」

「こんなところで話す内容じゃないんだが、解読失敗だからまあいいだろう。中国語の文書ファイルは、文学部の現代中国語専攻の学生に頼んだんだが、内容はそのダミー会社の業務報告書が大半だった。ただ、彼らが言うには文章が機械的でどこも不自然な感じがすると言っていた」

「例えば日本語の挨拶作成ソフトを使ったような感じてこと？」

「いや、そうじゃなくて、文章の論旨が一貫してなくて、文法上の不自然さもあることから色々な文章を継ぎ足して作成したんじゃないかと言っていた」

「と、言うことは何かの偽装ファイルかもしれないよ」

「どういうこと？」

「例えば、お兄ちゃんのフォルダにエッチな写真がいくつかあるけど、かわいい動物の写真に偽装して保管してるでしょ？」

「何でそんなこと知ってるんだ」

「まあまあ、怒らないで。それで、この文書ファイルも、ひょっとしたら偽装ファイルかもしれないと思ったの」

「なるほど、その線はあるな。後で、計算機センターで調べよう」

健一はカツ丼に付いていたお茶を飲み干すと、勘定を済ませ計算機センターへ向かった。いつもは計算機物理の専属のようにすいているのに、今日は学生で一杯だった。

「うわ、なんで土曜なのに学生がこんなにいるんだ。工学部の学生の実習日だったか」

「え、ここは、計算機物理の専用じゃないの？」

「世界最速のスーパーコンピュータの端末なんだ、うちだけじゃ使わせてもらえない。一応、全学と文科省の機関が使えることになってる。しょうがないから俺の部屋の端末を使おう」

二人で健一の研究室に入り、作業を始めた。

「これが、もとの中国語ファイルと翻訳文だが、翻訳のほうは要らないか」

「お兄ちゃん、この中国語ファイル十六進数表示に変換すると、一定間隔で同じ数字が入ってる」

「あ、ほんとだ。そういうところは目敏いね。それじゃ、もとのファイルがあると仮定して文書ファイルを除去するぞ」

「うん、簡単なフィルタでやってみて」

「了解」

案の定、中国語ファイルには画像ファイルが隠されていた。画面一杯に展開するとあみだくじの様な図面が出てきた。健一は物知り顔に説明した。

「こいつはラダー線図だな」

「何それ？」

「論理回路から電気回路に直す、途中の図面と言ったところかな」

「なにに使うものなの？」

「うーん、こっちは理論が専門で実際の電気回路は、工学部の学生にでも聞いた方がいいかもしれないな。丁度、今、計算機実習をやってるだろう。どこの学科かな？」

ちょっと行ってくると言っ、健一は計算機センターの端末室に向かった。学生が端末を占領して、なにやら熱心に作業している。一人のまじめそうな学生を捕まえた。

「君たち工学部の学生かい？」

「あ、はいそうです。実習の締切り前なんで結構必死なんです」

「どうだい、世界最速のスパコンは？」

「はい、でも製図実習なのであんまりメリットないです」

計算機実習だと思っていた健一はがっかりした。製図に使うんならパソコンでいいじゃないかと言いたげだ。

「何だ、そんなことに使ってるの？ どの学科？」

「はあ、機械工学科です」

「まあ、卒論の時には大いにお世話になると思うよ。分からないことがあったら、理学部の教官でも遠慮せずに聞いてね」

「はい、ありがとうございます」

残念ながら、電気工学科ではなかった。助教個室に戻ってくると、芽衣が健一の端末を使って何やら作業している。

「ねえねえ、ここから工学部のファイルはのぞけるの？」

「何をやってるんだ？」

「さっき、研究目録を見たら、電気工学科の送電工学の論文で、『送電網のネットワーク解析的アプローチによる脆弱性の研究』と言うのがあったの。今度の一件の参考になりそうな気がするのよ」

「脆弱性の研究ねえ。なんか関係ありそうだな。俺が後でその研究室に行ってみる」

一時間ほど、独りになり芽衣は学内を散歩した。

今日は土曜日なので、サークル活動の学生がほとんどだ。こうして歩いていると、なんとなく大学生になった様な気分になる。不思議な空間だ。

売店で、缶コーヒーを買い、大学では本やソフト、CDなどが安く手に入ることを知った。

芽衣も欲しかったCDを見つけ、買おうとしたら学生証の提示を求められた。

あきらめた。

「なーんか不公平」

と、思った。高校生と大学生では、全然、世間の扱いも異なる。

しかし、構内に入ると雰囲気は一変した。卒研究生や大学院生が必死の形相で勉強したり実験したりしている。これが、大学の真の姿なんだ。ちょっとだけ感動した。

ふと、初老の紳士から声を掛けられた。

「失礼だが、……君、黒澤君の妹さん？」

「はい、……理学部の黒澤健一は私の兄ですが」

「あ、そう。私、計算機物理学教室の山本と言います。はじめまして。なんとなくお兄さんに似ていらっしゃるから、ひょっとしてそうかな？　と思って声を掛けたんです」

「山本先生？（あ、教授のことだ）、失礼いたしました。兄がいつもお世話になっております」

「なかなかしっかりしたお嬢さんだ、黒澤君の懐刀と言った所かな」

「いえ、兄に似ず、あんまり勉強はできないんです」

「人間、成績だけがすべてじゃないですよ。黒澤君だって、研究よりむしろ、応用力が優れていますからね。私はそこを買っているんです」

「応用力？　ですか」

「そう、いくら立派な研究テーマを見つけても、予算と設備がなければ何も出来ません。彼は予算を集め、設備を調達する能力に長けています。研究なんて彼の下の方の大学院生にやらせておけばいいんです」

なるほど、この教授にしてあの兄貴ありだと思った。まあ、純粋な研究者もたくさんいるんだろうけど、それだけじゃ社会は回らない。「それじゃあ」と山本教授は立ち去った。

また独りになり、テニスコートを眺めていると、学生に声を掛けられた。

「君、ここの学生？」

「え、いいえ」

「じゃあ、どこかの短大生？」

「あ、いえ、来年受験予定なんです」

「あ、そう、せっかくテニスサークルに勧誘しようと思ったんだけど。じゃあ、来年ぜひきてね！」

「あ、はい」

「じゃあ」

爽やかな学生はそのまま、颯爽と去って行った。やはり大学生になりたいと芽衣は

思った。

でも、どうしてわたしだけ声を掛けられたんだろうと芽衣は不思議に思った。他にも見学者は大勢いる。

以前、親友の裕子から、
「あなた美人なんだから性格さえかわいくすればすぐもてるようになると思うよ」
と言われたことを思い出した。

青春の感慨にふけていたら、携帯電話がなった。兄からだ。
「もしもし」
「あ、俺だけど、今から工学部の建物まで来てくれ。入り口で待ってる」
切れてしまった。芽衣は工学部がどこにあるのか知らなかった。大学生協の売店のレジの人に聞いた。五分ほどしてたどり着けた。
「もう、全然中のこと分からないんだからね！」
「でも、着いたじゃないか」
「まあ、そうだけど……」
「とにかく来てくれ」

兄貴は先に立って、歩き出した。芽衣は追いかけた。

電力供給

4. 電力供給

健一と芽衣は、電気工学科の送電工学教室の准教授室に入って行った。ここから先は、主に健一の出番だ。

「笹井先生の論文で、送電網の脆弱性についての研究と言うのを拝見しまして、ぜひ内容を詳しく教示して頂きたくて、参った次第なんですけど、お時間よろしいでしょうか？」

「ええ、いいですよ。で、その論文はもうお読みになられたんですか？」

「いえ、理学部では目録しか手に入らなかったもので、……それと、こちらにつれてきた学生にネットワーク理論をテーマに与えようと思ってまして、同行させました」

あ、あたしのことだと芽衣は思った。

「この研究は、関東電力との共同研究で、送電網の脆弱性評価をネットワーク理論を使って行ったものです」

「この、送電網の脆弱性というのは関東電力でも問題になっているのですか？」

「いえ、現実にはまだ問題になっていません」

「まだ、というのは？」

「関東電力の主要な発電所は、ご存知のとおり陸奥電力の管内と、中日本電力の管内に分散しておりそこから、長距離送電線網で東京まで送電しています。もし、地震や、航空事故で送電線が切れたり、発電所が停止した場合、その電力は他のルートを使って送電されます。その制御をしているのが中央指令所です」

「ああ、それで、送電網とネットワークのアナロジー（相似性）を用いたわけですね」

「そうです。その結果、六割程度のネットワークが破壊されても民間の停電などを除き主要設備の送電には影響がないことを証明しました」

「証明と言うことは、シミュレーションを行ったんですか？」

「はい、三年ほど前の研究ですので、ワークステーション（高性能パソコン）に、関東電力の送電網を実物大で設定し、飛行機を落として架線を切ったり、地震で発電所を緊急停止させたりしました」

「そのワークステーションはまだあるんですか？」

「ええ、関東電力の所有物ですので、うちの実験室でまだ稼働中です」

芽衣は話に割って入った。

「もし、中央指令所がウイルス攻撃された場合、ネットワークはどうなるんですか？」

「うーん、鋭い質問だね。残念ながらこのシミュレーションには入っていないよ」

「どうしてですか？」

「電力会社の中央指令所の存在自体が機密だし、それを狙ったウイルスなんて当時考えられなかったからね」

健一が続けた。

「今、プラントを狙っているウイルスを十匹飼っているんですが、中央指令所のシミュレータと電力各社の送電網シミュレータを構築して実験することはできますか？」

「うーん、各電力さんが予算を出してくれるなら……. ですが、それに、そんなウイルスあるんですか？」

「実は、うちに定期的にネットワークウイルスを送り込んでくれる人がいるんです。外国人なんですが、……」

「面白い設定ですね。でも、うちでは出来ません」

「何ですか？」

「もう、論文にはならないからです」

芽衣は少し腹が立った。自分の論文のことしか考えてない。それに、民間の停電程度なら問題ないとはどういうことよ。こっちは国家安全保障上の問題で悩んでいるのに。それに裕子のこともある。

健一は続けた。

「もし、計算機センターで、その実験をやることになったら、関東電力の送電網のデータと中央指令所のデータを提供して頂けますか？ また、他社のデータも入手できる様、口を利いてもらいたいです」

「細かいデータに関しては、関東電力と工学部の間で守秘義務契約があるので、別の研究目的で理学部に渡せるかどうか、先方に打診してみないと判りません。他の会社については、うちでは扱いきれません。申し訳ないですが」

「そうですか、わかりました。それでは関東電力さんの分だけお願いします。

今日は長い時間ありがとうございました」

健一と芽衣は一礼し、退室した。

「随分やる気のない人ね、腹が立っちゃった」

「まあ、怒るなよ。研究者なんてほとんどあんなもんさ。自分の文献のことしか興味が無い。うちのボスなんてまだ理解力のある方だよ」

「ああ、山本教授？ さっき、構内で出会ったけど素敵なおじ様じゃない？」

「そうかい？」

「ええ、お兄ちゃんのこと高く評価してたわよ」

「なあ、芽衣」

「なに？」

「大学で生き残ろうと思ったら、とにかく論文を書かなきゃなんない。論文を書くためには予算と設備が必要だ。俺は、予算集めの才能には恵まれたが、論文の数は圧倒的に少ない。まあ、飛び級したせいもあるんだが、……. だから、お前に大学院に残ってもらい俺の下で、研究をしてもらいたいんだ。お前には才能がある」

「そんなこと言われても、困るよ。わたしに才能なんてないよ」

「いや、自分自身気がついてないだけだ。さっきだって、工学部の論文リストから必要な

論文をずばり見抜いたじゃないか？ あんなこと、普通の学生にはできないんだよ。それに、ハッカーの技術もずば抜けたものがある。これは計算機の中身を熟知してないと出来ることじゃない」

「確かにそうだけど、わたし、さっきの笹井先生みたいな人と駆け引きなんて出来ない」

「そんな汚い仕事は俺が全部やる」

健一にそこまで言われて、言葉に詰まってしまった。

「ところで、話は変わるけど、中国語偽装ファイルのあみだくじの図面の正体わかったの？」

「ああ、さっき電気回路の専門家にどっさり渡してきた。内容がわかったら電話をくれることになってる」

「それって、ただでやってくれるの？」

「どういう意味？」

「いや、もし笹井先生みたいな人だったら…….とって」

「ああ、そういうことか。学生を使うからただなんだろうけど、手持ちの予算を一部寄付した。やっぱりただじゃ悪いからね」

「ふーん」

今日は大学のいい面と汚い一面とを、両方見せられた。芽衣は今後の成り行きに不安が募った。

次の日は日曜だった。前日、兄に付き合わされた上、夜中遅くまで受験勉強をしていたので、起きたら十時だった。いい加減、母親が起こしにきた。

「芽衣、起きなさい。藤原さんから電話よ」

「へ」

——誰だっけ？

完全に頭がぼけていた。

「後から携帯電話に掛け直すって言っといて」

「いい加減にしなさい！ もう」

「あ、ちょっと待って、やっぱり出る」

やっと起き上がって、寝ぼけ眼のまま、コードレス電話機の子機を取り上げた。

「もしもし芽衣です」

「あ、朝からごめんなさい。理恵だけど、まだ寝てた？」

「まさかあ、ちゃんと起きてたよ」

——うそだけど。

「ああよかった。それでね。まだちょっと早いんだけど。お父さんが今年の年賀状はパソコンで作ることにするって言い出したの」

「まあ、よくあるパターンだね」

「でね、うちまだプリンターを買ってないの。年賀状ソフトも買わなきゃなんないし」

「そうだねえープリンターを選ぶだけでも結構面倒くさいかも」

「やっぱりそう？」

「だって、年賀状専用と言ったって、一旦買うと、どんどん他の使い道が広がるから、画質優先かスピード優先か経済性優先なのか考えて買わないと失敗しちゃうもん」

「と言うわけで、今日秋葉原まで行こうかと思うんだけど、よかったら一緒に行ってくれないかしら」

「そうだなあ、せっかくの日曜だし、智美も誘ってお昼一緒に食べる？」

「それいいかも」

「じゃあ三十分後駅前集合ね」

事態は動き出した。理恵のパソコンにはウイルスが常駐していたはずだ。こんな状態でお父さんが、会社関係者に年賀状を印刷すれば、相手に筒抜けになることになる。芽衣は緊急で健一の携帯電話に掛けた。

「もしもし、黒澤です」

「あ、お兄ちゃん？ あたし、芽衣です」

「何だ、お前か？ 朝から元気だな」

「それがちょっと事情が変わってきたの」

以前から、リモート監視下においている、藤原理恵のパソコンで父親の年賀状を作成する予定があることを伝えた。

「そりゃ、まずいな」

「でしょう？」

「プリンターだけ、インクジェットの適当なのを選んで、年賀状ソフトは今日は買うな」

「じゃあ年賀状書けないじゃん」

「後でフリーウェアをあげると言っておけ、ある程度の機能を持たせたもので、名簿だけ暗号化して、今入っているスパイウェアにはでたらめな名前と住所を表示する機能を持たせるようにしておく」

「すぐに出来るの？」

「今日は日曜なんで兵隊がいない。明日大学院生を使って作成する。出来たら彼女に必ずCD・ROMで手渡せ。ダウンロードは駄目だぞ。相手の監視でばれてしまうかもしれない」

「うん、わかった。やってみる」

十一時半に駅前に着いたら、理恵が先に着いていた。

「ごめーん。待った？」

「ううん、今来たところ」

「智美は？ まだみたいね」

五分遅れで智美がやってきた。

「みんなごめーん」

「いいよ、いいよ、さあ、いこ」

二十分ばかりで秋葉原に到着。智美が朝食食べてないと言うので、おしゃれげな喫茶店に入って、軽食と紅茶を頼んだ。サンドイッチをほおぼりながら智美が聞いた。

「ねえ、芽衣。もう進路は決めたの？」

「うーん、実を言うとなんか迷ってるの。最初は私学で教育学部のあるところって思っ

ただ、実際お兄ちゃんの所に遊びに行ったりしてるうちに、あそこでコンピュータを専攻するのも悪くないなあって、思い始めたりして……」

「うえー、東都大理学部ってこと？」

「まあ、そういうことになるかな」

「この間の模試の合否判定はどうだったの？」

「京浜女子大の教育学部ならAマイナスってとこ。東都大に関してはデータなしなのだ」

「いばっていうなよ」

「でも、理恵の友達も偏差値三十八で東都大受けるって言ってたよ」

「それって、井上修二君のこと？」

「何で芽衣ちゃんそんな事知ってるの？」

「いやまあ、ちょっと判定カードが見えちゃったから」

実は芽衣は以前、高校のサーバーにも侵入したことがあった。

「それでね、井上君、もし合格したら一緒にテニスサークルに入らないかって言うの」

「まあ、確かに大学のサークルは誰でも入れるみたいだけど、大学に入るのはもっと大変よ。でも、理恵ちゃん井上君と付き合ってるの？」

藤原理恵のほっぺが赤くなった。

「別に付き合ってるわけじゃないけど、……一応誘われただけ」

「まあ、向こうには気はありそうね」

「で、智美はどうするのよ」

「ああ、わたし？ わたしは京浜女子短大保育科にしたの。まあ、実力相応かな。保育士さんになるのも夢だったし」

「ふーん、で、彼氏は？」

「彼氏なんていないわよ。同級生の男子って、どうしてあも冴えなく見えるんだろかね。大学へ行ってから、理恵ちゃんじゃないけど東都大のサークルにもぐりこんでさがすつもり」

「あっは、それ言えてる〜」。芽衣はお腹を抱えて大笑いした。

「笑いすぎだよ」

二時ごろまでおしゃべりでつぶれてしまった。これから買い物である。秋葉原の電気店を何軒か周り、一番安い店で買うことにした。機種は芽衣に一任された。汎用性を考えれば、年賀状専用プリンターはよくないと思い、通常タイプのインクジェットプリンターを選んだ。これだと、葉書にも手紙にも論文にも使える。

次に、年賀状ソフトだが、きれいな絵だけあれば、宛名書きは理恵が毛筆で書くというので、兄には悪いが、売れ筋の年賀状ソフトを選んだ。店の人が、届けてくれると言っていたが、三人もいるし、今日設定したかったので、持ち帰りにした。四時ごろ、藤原理恵の自宅に到着した。

「ふー、軽いと思ったけど、距離があると結構重いよね」

「みんな、ごめんね。やっぱり届けてもらえばよかった」

「気にしなくてもいいよ。これくらい。平気、平気」

「じゃあ、お茶入れるね」

お茶を入れている間に、芽衣はこの間触ったパソコンを見に行った。スイッチを入れ起動させた。パソコンはしばらくして、ハードディスクの音を立てて起動した。芽衣はシステムフォルダ内を検索し、「敵」の残したウイルスを探した。案の定、レジストリも書き換えられていた。ウイルスがメインメモリ上に常駐している証拠だ。普通のウイルスは、ウイルスと気づかれないようにまるっきり違う形式に偽装されているが、芽衣には見ただけでわかる。テキスト画面で開いてみると明らかに、ウィンドウのシステムファイルではない。このウイルスはこのパソコンから発信するデータを何箇所かに転送するらしくIPアドレスが何箇所かに記載されている。芽衣はそれらをメモった。

芽衣は出来ることなら、このウイルスの入ったファイルを凍結してしまいたかったが、そうするとこちらの動きが「敵」に漏れてしまうと思った。「敵」の素性が全く分からない以上、そんなことは余り得策ではない。芽衣は仕方なくもう一個ウイルスを仕込むことにした。年賀状ソフトの名簿機能を無効にしてしまうものである。理恵の言うとおりに、宛名を毛筆で書かなければならない機能である。そんな細工を施していると、興味深げに智美がやって来た。

「芽衣ー。独りで何してるのー？」

「うん、プリンター設定の下ごしらえ」

芽衣はすっとぼけて言った。

「そんなの必要なの？」

「だって、プリンタドライバーやソフトのインストールで結構ハードディスクの容量を使うもん」

「へえー、さすが、要領が良いわね」

理恵が呼びに来た。

「お茶が入ったよ」

「あ、ありがたい。のど乾いてたんだー」

紅茶を飲む間、高校生活の思い出話に花が咲いた。一番の思い出、それは三人とも違っている。芽衣は入学祝に兄からパソコンをもらったこと。智美は高校一年の文化祭で合唱の指揮を執ったこと、理恵は修学旅行の新幹線で井上君と隣の席になったこと。長かったようで高校生活もあと半年なのだ。

「ねえ理恵ちゃん、井上君て、どんな人？」

「どんなっていわれても、困るんだけど、まあ、面白い人かな」

「でも、普段は教室の隅で、むっつりして漫画読んでるだけだよ」

「芽衣はよく見てるわねー。何読んでんだろ？」

「いやー、漫画じゃなくて、よくわかる法律講座らしいよ」

「それで、東都大法学部ってか？」

「きゃー、あはは」

芽衣は腹を抱えて笑った。漫画で東都大に行けるなら自分も悩みなんてなくなると思った。

「もうー、みんなわらいすぎっ」

紅茶で一服すると、早速、皆でプリンターを開梱しパソコンの横に設置した。芽衣がUSBケーブルをつなぎ、パソコンの設定画面のプリンタ追加画面でどんどん作業を進め十分位で使用可能になった。次に年賀状ソフトをインストールして完成した。

「どうもありがとう。かわいい年賀状送るからね」

「うん、期待してるよ」

「ところで、毛筆って誰が書くの？」

「毎年わたしが書いてるの」

「エー、理恵ちゃん習字得意なのー？」

「まあ、一応、五段持ってるんだ」

「へえー、すごーい」

芽衣は、余り目立たない理恵に意外な特技があることを知った。字はきれいなだけで商売になる。デパートののし紙を書いたり、色々アルバイトができるからだ。少しうらやましかった。

だが、これで、パソコンの年賀状ソフトの名簿機能を使われることはなさそうで、少し安心した。が、友人を騙しているような気がして、ちょっぴり罪悪感を感じた。

芽衣は家に帰ると、兄の健一に、年賀状ソフトの偽装工作は不要なことを伝えておいた。健一は心配そうだったが、ここは理恵を信用するしかない、それに宛名書き名簿は作れない様に細工しておいたことを伝えた。

月曜日、放課後、芽衣に計算機センターに来る様、健一から携帯電話で連絡があった。

芽衣は結構忙しい身の上だが、授業が終わるとすぐにバスに乗り、大学へ向かった。バスに揺られながらも、英単語帳から目が離せない。今週末、センター試験模試があるのだ。毎回、鉛筆ころがしでしのぐわけにはいかない。

そんな芽衣に比べて、就職する理恵は、制服のサイズを連絡する様、会社から手紙が来たそうだ。総務部なので、通常の事務服と受付用制服と何種類か支給されるのだが、理恵の話では、事務服はいまいちダサいが受付用は結構かわいいデザインだと言っていた。

そんなことを考えているうちに、結局、単語は一つも覚えられず、理学部前停留所に着いた。通用門から中に入り計算機センターへ向かって早足で歩いた。

「あれ、こんにちは、また来たの？」

山本教授だった。どこか出かける途中らしい。

「あ、どうも、こんにちは、いつもお邪魔しております」

「お邪魔なんて思ってないですよ。今何か、黒澤君の研究を手伝ってるみたいですね」

「あ、いえ、研究と言うほどのものでもないんですが……」

「まあ、しっかり頑張ってください。期待してますから、はっはっは。ああ、ついでに紹介しておきましょう。こちらは、私の研究室の准教授の田端先生です」

「あ、はじめまして、黒澤の妹の黒澤芽衣と申します。兄がいつもお世話になっております」

「こちらこそ、お世話になってます」

芽衣はどことなく、いかつい感じの人だと思った。ほかの先生とはまるきりタイプが違う。

「じゃあ、私たちはこれから出かけますので、失礼します」

「あの～、失礼ですがどちらまでいかれるんですか？」

（あたし、何聞いてんだろ）と芽衣は自分自身とまどった。

「なかなか、勘の鋭いお嬢さんですね、関東電力本店です」

「あ、そうですか、ご苦労様です」

それを聞いて、芽衣は不安になった。

——まさか、もう兄の計画に教授がかんでいるのだろうか？ ハッキングしているのもばれちゃったのか？

不安が募った、芽衣は急ぎ足で兄の部屋へ飛び込んだ。だが、無人だった。

「あの一、誰かいませんか？」

誰もいなかった。トイレかと思えばしばらく待ったが、帰ってこない。

ふと、健一の机を見るとメモがおいてあり、行き先と内線番号が書いてあった。

「電気工学科回路設計工学教室二〇四九まで、来て下さい 黒澤」

芽衣は机の上の内線電話を取り、プッシュボタンを押した。

「はい、回路設計教室です」

「あの一、計算機センターの黒澤と申しますが、黒澤先生おりますでしょうか？」

「はい、少々お待ちください」

しばらくして、健一が出た。

「はい、もしもし黒澤です」

「芽衣です。もう、何でここにいないのよっ」

「ああ、悪い。この間のラダー線図の結果が出たんだ。お前もこっちへ来いよ」

「場所はどこなのよ」

「えーとね、この間の笹井先生の部屋覚えてる？」

「うん」

「あそこの一階の真ん中へんで、回路設計教室と看板が出ている」

「わかった」

——何よ、この態度！

と少し頭にきた。

だが、場所を覚えているつもりが、芽衣は全然、覚えていなかった。また、売店のレジで電気工学科までの道を聞き、迷いながらやっとこたどり着いた。目的地はこの建物の一階。電話してから十分近く掛かって着いた。

「遅かったな」

と、健一が馬鹿にしたように言った。

「す・み・ま・せ・ん・ね」

怒り心頭の芽衣だった。

「で、この間のラダー線図を解説して、ブロックダイアグラムに直してもらった。プログラマーにはこの方がわかりやすいだろう」

怒り心頭ながら、顔に出すほど芽衣は子供ではない。あくまでスマイル。そんなことに気づかず、健一は電気工学科の大学院生と話を続ける。

「で、このラダー線図は通常どう扱うの？」

健一はいかにも教官らしく偉そうに聞いた。

「はい、電気屋なら、このままりレー回路に結線していきますし、デジタル回路なら、この線図どおりにROMライターに入力して、ROMに焼き込みます。回路図なんかは、設計の人が確認のために製作するだけで、電気屋はあまり使いません。と言ったらちょっと言い過ぎかもしれませんが」

「そう、じゃあパネル製造メーカーから直接外部に流れた可能性があるね」

「そう思います」

「君は、このパネルの用途は何だと判断する？」

「そうですね、本体は表示灯とスイッチのみ、行き先は通信回線ボードとなっていますから、列車の中央指令所、電力会社の中央指令所などが、考えられます。入力信号がそんなに多くないので、電話通信の中継所や、また、航空管制でもないと思います」

「そうだね、妥当な判断だと思う。因みに、この回路にウイルスが侵入することは、可能性として考えられる？」

「あくまで、仮定ですが、リレー回路の電気盤なら不可能です。でも、デジタル回路なら侵入してくる余地はあると思います。でも、内部回路を書き換えるとか言った大それたことはできないでしょう」

「じゃあ、偽の信号をあちこちに発信することは？」

「ああ、その手がありましたね。それは可能だと思います。でも、送電工学の笹井先生の論文では、送電網の脆弱性は問題ないということだったと思いますが」

「いや、あの論文では、中央指令所へのウイルス攻撃はまったくシミュレーションに入っていない」

「よくお調べですね。知りませんでした」

「いや、気にしないで。もし、日本規模の送電網シミュレータを作るとしてこちらの教室でサーバーの構築などやってもらえる？」

「ああ、それは教授と相談してみないと。……でも予算なんかつくんですか？」

「うん、それは心配しなくていい。近々やるから心の準備だけしといて」

「なんか、面白そうですね。うちの教授へは、山本教授から依頼してもらえませんか？」

「うん、それは問題ないよ。じゃあ、今日はどうもありがとう」

芽衣は今ひとつ要領を得ない感があった。ROMに回路を焼いてしまっているなら、外部からいじりようがないではないか？ そのことを大学院生に問うた。だが、その問いに大学院生は簡単に答えた。

「確かに、ROM自身は書き換えられることはないよ。でも、入出力に一時的にデータを貯めるキャッシュメモリと言うのがあって、この内容を勝手に書き換えられると、黒澤

先生が指摘された偽の信号をあちこちに送ると言うことが可能になるんだ」

「そうなんですか」

——やっぱり東都大生だ、頭いいー
と芽衣は感心した。

部屋を退出した後、芽衣は健一に、さっきここへ来る前、山本教授と田端准教授が関東電力本店へ出かけていったことを伝えた。が、健一はすでに知っていた。中央指令所の回路図が外部に漏れていることを知らせ、新たに対策を講ずることを名目に共同研究を申し込みに行ったらしい。さすがに、動きが早かった。

芽衣は、さっき出会った田端准教授が他の教官と違うことを健一に聞いた。

「田端先生って、なんかほかの先生と雰囲気が違うけど、何者なの？」

「はあ？ 何者って言っても、計算機物理の准教授だよ。ただ、防衛省研究所の情報分析官だった人だけだね」

「なーるほど。それで、教授から、助教までCIAみたいな人ばかりそろってるわけね」

「なんだよ、それ」

「じゃあ、あの時見つかった名簿はひょっとして関東電力の幹部社員？」

「惜しい。電力十社の取締役だ」

「へえー、まあいいわ。結局欲しいデータはすべてそろったわけね」

「俺たちにとっては、そうなんだが。……後は、電力会社にどれくらい危機感があるかだな」

「どういうこと？」

「今日の山本先生の訪問は、あくまで挨拶だ。あんな凶面一冊じゃ説得力がない。だから、共同研究に乗ってくるまでにもう一押ししなくてはならない」

今朝、健一は山本教授と田端准教授と話し合い、サイバーテロリストからの攻撃からの送電網防御のために、日本規模の送電網シミュレータを作り、日本中の電力を見守り、ウイルス攻撃があったら、中央指令所ではなく、シミュレータにウイルスを誘導して、シミュレータ内で大停電を起こし、敵のサイバーテロリストを欺瞞するプランを考え出した。そのためには、電力各社の送電網のデータ化と、数台のサーバー、回線が必要であるとの結論に達した。また、予算も出してもらわなければならない。

そこまで聞いて芽衣の頭の中はハングアップした。高校生の出来ることなんてない、と思った。しかし、健一は許してくれなかった。

「今から、山本先生達に合流しようか？」

「え、どうやって？」

「どうやってって？ タクシーに乗って関東電力本店に行くだけだ」

「わたしも行かなきゃ、駄目？」

「芽衣には、これからもう一仕事やってもらう」

「えー、何をすればいいの？」

「俺のノートパソコンで、簡単なプログラムを作ってもらうだけだ。バッテリーは満タン

だからタクシーの中で出来るよ」

理学部の庶務室で、タクシーを頼んだ。芽衣はその間、笹井准教授のパソコンに侵入し、関東電力の送電網データをコピーしノートパソコンに移した。

「じゃあ、出ようか」

「ちょっと、パソコン持ってよ」

「自分で持て」

タクシーは通用門で待っていた。手馴れた様子で、健一は乗り込む。

「関東電力本店玄関口までお願いします」

「はい」

タクシーは走り出した。芽衣はノートパソコンをひざの上で開いた。

「で、何のプログラム？」

「さっきの送電網のデータで、結線の多い箇所があるだろ」

「ああ、変電所とか、中継所とか書いてあるところ？」

「そうそう、そこの周囲にランダムに断線箇所を作って、そうすると、電力は周りの線を迂回する。迂回された送電線は容量を超え遮断される。そうすると、もっと周囲の送電線も容量オーバーとなり、後はドミノ式に送電線は遮断される。周りの送電線が遮断されると発電所は緊急停止する。……といったシミュレーションを判りやすい動画にしてくれ。実際のシミュレーションじゃなくていいから」

「実際のでないなら、知識がなくてもできるかな。動画自体ならすぐよ」

と言って、二十分くらいで、動画を作成した。見栄えもまあいい。何ととっても、時間を追って送電網が虫食い状態になるのがリアルでたまらない。これを見せられたら、保安担当者なら真っ青になるだろう。

健一は一応芽衣を誉めておいた。

「さすが、芽衣だな。センス抜群」

「お兄ちゃんにほめられると後が怖いわ」

「もっと素直になりなさい。今日は寿司くらい食えるかもしれないぞ」

「回るやつ？」

「前も言ってたけど、それなんのこと？」

「回転寿司のことだけど」

「寿司って回転するのか？」

「やだっ、お兄ちゃん食べたことないの？」

「馬鹿にするな、寿司といたら、職人が握るもんだろう」

「げっ、そんな高級品！　いつも食べてるの？」

「いや、仕事のときだけだ」

「わたしも、東都大の先生になろうかなあ」

「やっとその気になったか？　やっぱり食べ物に釣られる性分だな」

「ぐすん」

兄妹でほのぼのした会話をしている間に、関東電力に着いた。受付で東都大学理学部の黒澤と名乗る。芽衣も受付嬢を観察した。理恵の言っていたとおりがかわいい制服だ。程なくして品のよい若手社員が現れた。彼のネームプレートには社長秘書室とあった。彼

が二人を社長室まで案内してくれた。

二人が社長室に入ると、会談机には幹部数名と、山本教授、田端准教授が座っていた。遅れてすみません。と健一が挨拶して座り、芽衣もその横にパソコンを持って座った。早速、健一が発言した。

「教授、どこまで説明されました？」

「送電網の脆弱性までだよ」

「そうですか、それでは追加の説明をさせていただきます」

「ちょっと待ってください。われわれ関東電力と、貴研究所の笹井先生と共同で、以前脆弱性評価をやっているんです。それで、問題ないという結論に至ったものと認識しているのですが」

「はい、その通りです」

健一は動じなかった。また、同学の笹井准教授の批判もしてはならない。

「笹井准教授の研究は三年も前のものであり、最近外国から、侵入が試みられている敵対的ウイルスに対する、評価が十分ではありません。また御社におかれても、アナログパネルからデジタルパネルへの換装が進んでおり、ウイルスにとっては好都合な状況といえます。たとえば、中央指令所のパネル内のキャッシュメモリが書き換えられ、偽の信号を発せられた場合恐るべき事態が生じます」

設備担当取締役が、いぶかしげに健一に質問した。

「どういうことが起こるんですか？」

「ここに、同行しました学生のシミュレーションをご覧ください」

芽衣はノートパソコンを開いて、幹部社員の並んでいるほうに向けた。動画の準備はすでに済んでいる。

「まず、ウイルスが中央指令所のキャッシュメモリを書き換えます。回路自体はROMに乗っているので書き換えられることはありません。つまり、証拠を残さないということです」

画面上で、一部の中継所で断線が起こった。

「一部で断線が起こると、電力はこの周りの送電線を迂回します。迂回した電力により、容量オーバーとなり、周辺の送電線はドミノ式に落ちていきます」

画面上で、送電線が遮断され、虫食い状態になっていった。

「周りの送電網がなくなると、電力は行き場を失い、今度は発電所が緊急停止します。結果的に約三十分で東京大停電を引き起こす可能性があります」

一同にどよめきが走った。一部に青ざめている重役もいる。効果満点だったようだ。副社長が質問した。

「黒澤先生、そのようなウイルスは実際に確認されているんですか？」

「はい、計算機センターでネット上のパケットを監視していますが、今のところ十種類ほど確認済みです。現時点で安全なのは、中央指令所のIPアドレスが敵に知られていないからです」

「敵に知られる可能性は？」

「それは時間の問題と考えます」

「敵対的ウイルスの防御方法はあるのですか？」

やっと話に食いついてきた相手に、山本教授は今朝のシミュレータを使うプランを説明した。幹部社員の中で、しばらく話し合っていたが、丁度取締役会の議決に必要なメンバーがそろっていると言うことで、その場でこのプロジェクトが決裁された。また、他社への呼びかけは、関東電力が幹事となって行うことも約束された。山本教授は最初から想定内と言う顔をして、任せてくださいと言わんばかりの表情をしている。芽衣はこの人達は大した役者だと思った。

会議後、ロビーでタクシー待ちをしているとき、山本教授が芽衣に話しかけた。
「君、えらくリアルな資料だったけど、シミュレーションしたの？」
「いえ、黒澤先生が頭の中でシミュレートしたことを、わたしが動画にただけです」
「そう。ご苦労さん。ところで君今年生？　うちの研究室に来ない？」
「高三です」
「え、うちの学生じゃなかったの？　黒澤君もひどいねえ」
「いや、こいつには来年、本学を受験させるつもりです。教授にはその折、試験委員の先生に根回しをお願いしたいんですが？」
「おいおい、彼女ほどの能力があれば大丈夫だよ」
「でも、あたし、コンピュータ以外何のとりえもないんです」
「あ、そう、まあ考えとこう。どうだい、これから寿司でも食べに行かんか？」
「はいっ」
「な、言った通りだろう」
「何のことかね？」
「いえ、何でもありません」

しゃべっているとタクシーが到着した。受付嬢が案内してくれた。一行は、教授の予定通り銀座へ向かった。銀座の高級寿司店など、芽衣には初めての経験だった。

のれんをくぐると、大将が愛想よく迎えてくれる。よほど常連客らしい。大学教授ってみんなお金持ちなのかしらと、脳天気考えた。

「先生毎度ありがとうございます。お飲み物はなんになさいますか？」

「そうだな、私はぬる燗をもらおうか、田端先生は？」

「私は冷で」

「じゃあ、私は生ビールを、……ああ、こちらは未成年だからお茶だけにしとね」

ああ、早く大学生になりたい。友達は、カクテルくらい飲んでるのに、……と芽衣は思った。

山本教授が、大将に話しかけた。

「今日は、何が入ってる？」

「はい、大間産の脂ののったのが丁度、入っております」

「じゃあ、マグロをメインに、お任せで握ってもらおうか」

「かしこまりました」

芽衣は兄に聞いた。

「おうまんってなあに？ 馬の肉？」

「馬じゃなくて、産地だよ。津軽海峡の青森側で獲れる本マグロのことだ。同じ海でも北海道側と青森側で味が違うんだ」

「へえー、そうなんだ」

面白いお嬢ちゃんだね、と大将にからかわれてしまった。が、回転寿司とは比べ物にならないほど美味しかったので、大満足。

一通り、味わった後で、山本教授が切り出した。

「今日の会議は、黒澤先生のファインプレーで、うまくいきましたね」

「は、ありがとうございます」

「それで、シミュレータの設計・製作は工学部でやってくれそうですか？」

「はい、今日大学院生と話したんですが、ユニットを納入後、組み立て、結線し起動するまで、大体二週間位で、できそうとのこと。ただ、プログラミングとデータ入力には計算機センターでやってもらいたいと言うことでした」

「それは当然だね。他に条件は？」

「はい、回路設計教室の教授には、山本先生から正式に依頼してもらいたいということと、向こうでも研究テーマとしたい。ということです」

「回路設計は中山君だったかな。明日にでも頼みに行きましょう。研究テーマの件は極秘扱いにしたいから、このシミュレータ上で出来ることで、別に何か考えてくれないとこまるな」

「送電網効率化による地球温暖化対策への影響、というのはどうでしょう」

「ああ、それでいいでしょう。中山君に言っておきます」

「で、今回どのくらい出してもらえそうですか？」

「まあ、五億くらいじゃないかな。電力十社が協力すれば二十億くらいは使えるかもしれません」

「じゃあ、明日から早速動きます」

「頼みましたよ」

最後のお茶を飲みながら、田端准教授が芽衣に聞いてきた。

「君、この間の米中海軍の小競り合いのニュースは知ってるね」

「テレビで見た程度ですが」

「あのとき、双方の駆逐艦のミサイルは互いにロックオンしたまま、三十分近く対峙したと、我が国の護衛艦のレーダーが確認している。問題は誰が挑発したかだ。君は何か知ってるんじゃないか？」

「知らないです。でもあのにらみ合いはどうやって回避したんですか？」

「アメリカ空母がああ海域に接近し、中国の駆逐艦を追い払った。これはニュースにも出ていない」

「高校生にそんなこと分かるわけじゃないじゃないですか？」

「なら、いい」

芽衣には何のことかまだ分かっていなかった。

帰りのタクシーの中で、芽衣は健一に聞いた。
「ねえねえ、今日食べたお寿司って、いくら位するの？」
「俺も正確には知らない。何せ時価だからな。でも、一かん二千から四千て所じゃないか」
「えー、そんなに高いの？ 回転寿司なら一皿百円だよお」
「馬鹿、山本先生がそんなもの食べるわけじゃないか。まあ、退官したらどうかわかんないけど」
「でも、山本先生お勘定払ってなかったよね？」
「あんなところで、現金決済するやつがいるか。後で請求書が来るんだよ。まあ、経費で落とすんじゃないか？」
「ふーん」

家に着いたのはかなり遅かったが、健一と一緒にだったので、芽衣も何も言われなかった。健一に、勉強を見てもらっていると思っているらしい。着替えて、お茶を飲んだ後、受験勉強の続きをしようと思ったが、昼間の興奮が残って全然集中できなかった。

やはり、自分にも兄と同じ血が流れている。あんなCIAみたいな連中と一緒にあって、大きな仕事をするのも悪くない。テレビの見すぎかな、とも思ったが今日的一幕はテレビより迫力があつた。何より、電力会社の重役を前にした兄の姿が忘れられない。テレビの中では間抜けな役で登場するのだろうが、実際には立派なすごく貫禄のある人たちだ。事実、芽衣も会談室に入ったときには、その貫禄に圧倒されてしまい、いつもの生意気な口を聞くことすら出来なかった。

芽衣は、健一から独自の暗号理論を学んだ。「もっとも難しい暗号は、洗練された暗号コードではなく、仕事の出来ない社員が作成した業務連絡書である」と言う。それは、書いた本人すら、何が言いたいのか判らない上、読み様によってはどのような意味にも取れるからである。逆に、仕事の出来る人の文書は、論旨が明快で冒頭を読めば結論が予測できる。

最初は、意味がわからなかったが、与えられた暗号ファイルの解読を経験するうちに実感するようになった。解読しても意味の取れない文書が存在するのだ。

そのような情報をつかまされると、状況証拠が揃う様、再度のハッキングが必要になるし、その情報量も膨大になる。再度のハッキングは罠に掛かりやすく、危険度も増す。この様な教育を、計算機センターの自宅端末を使って三年間受けてきたのだ。

電力シミュレータ

5. 電力シミュレータ

次の日、芽衣は寝坊しそうになった。あわてて着替え、朝食を抜いて飛び出していった。健一はいつも通り出勤していった様である。さすがサラリーマンだ。

芽衣の高校には制服はない。だから、昨日とおんなじ服では行けないし、こういうとき不便である。しかし、制服ではないから、健一に呼び出されて大学へ行ってもあまり違和感がないし、都合のよいときもある。でも化粧は禁止されているので、大学へ行くとちょっとダサく見られているかなと思っている。

バスが丁度よいタイミングで来てくれたので、ホームルームの始まる直前に席に着くことが出来た。裕子が心配そうな顔をして、どうしたの、と聞いてきた。

「昨日、お兄ちゃんの仕事の手伝いでこき使われちゃって、寝坊したの」

「あら、かわいそう。今週末、センター試験模試だよ。大丈夫？」

「全然勉強が進まないよー。ところで裕子のパパは大丈夫なの？」

裕子は首を横に振った。

「まだ状態が落ち着かないの。意識もないし」

「大変だね」

「うん、あ、先生来た」

ホームルームも、結構無駄な時間だと思う。週末にあるセンター試験模試なんかも、わざわざ言われなくても知っている。掲示板に張っておけば済む話だ。

三年も二学期から受験体制に入り、体育実技など受験に関係ない科目の時間は補習やテストに当てられる様になっている。部活動も原則引退だが、芽衣は生物部の活動だけは参加している。コンピュータの中の金魚だけよりも、実物が大切だと思うからだ。だが、芽衣は心配事だけがふえて行き、授業には集中できなかった。ぼんやり考え事をするうちに、一日が終わる。

放課後、金魚のえさをやってから帰ろうとすると、ポケットの中でマナーモードの携帯電話が、ブーンと振動した。なんとなく予想がつく。

「はい、芽衣です」

「ああ、俺だ。今時間いいか？」

兄の健一だった。研究室からだった。

「丁度帰ろうとしてたところ」

「ああそうか、じゃ帰りながら話そう。昨日のシミュレータの話を覚えているな」

「うん」

「それで、その元になる、サーバーを組むのに、CPUや、ハードディスクの仕様を決めなくちゃならない」

「そんなの、工学部で決めてもらえばいいじゃない」

「そうはいかん、メインはあくまで、こっちだ」

「それで、私に何をしろと？」

「うん、プログラマーの立場から、仕様決定に参加してもらいたい」

「ええー、私がプログラムを組むの？」

「いや、実際の作業は学生を使うが、メインのアルゴリズムは芽衣にやってもらいたいんだ」

「私、今週テストがあるんですけどっ」

「国家安全保障とどっちが大事だ？」

「わかりました」

「じゃあ今から来てくれ。予算があるからタクシー使っただいぞ」

「ひえー、今から？」

タクシーなど今まで使ったことはなかったが、せっかく言ってくれたので使うことにした。でもちょっとだけ、恥ずかしかったので高校から離れた国道でタクシーを捕まえた。

東都大学まで、というと、駒場ですか本郷ですかと聞かれた。二箇所キャンパスが分かれているとは今まで知らなかった。理学部の計算機センターです。と答えると通じた。

文部科学省や他学科が使っているので結構ポピュラーらしい。途中、健一から携帯電話へ連絡があり、料金を一旦立て替えて領収書をもらう様指示された。あて先は「理学部黒澤様」と書いてもらえと言っていた。私も黒澤様よ、と思ったが、つまらないので言うのをやめた。二十分ほどで到着した。言われたとおり領収書をもらう。計算機センターに着き、健一の部屋をノックした。

「はい、どうぞ」

「きたよー」

「おお、芽衣か。早かったな。領収書もらった？」

「うん」

健一はその場でタクシー代を清算してくれた。

今回構築するシミュレータのプランについて、健一がまず、自分の考えを述べた。

電力十社の中央指令所のみだけ回線を敷き、それぞれにIPアドレスを取得する。その上で、実際の運転を並行してシミュレートして、いざウイルス攻撃があったとき、ウイルスをシミュレータに誘導する。そのため、CPU十基、ハードディスク十基、通信ボード十基のマシンを考えているらしい。芽衣の意見を聞かれた。

芽衣は、あまりに教科書的なシステムは不慮の事故に弱いことを経験的に知っていた。

「バックアップがないと、リアル感に欠けるんじゃないかしら」

「どういうこと？」

「CPUを各社二基ずつにして、一基がウイルス攻撃を受けたらもう一基がバックアップをかけるの。大停電はバックアップ系がこけた後じゃないと、うそ臭いと思うよ」

「ふーむ。さすがだな」

「それに、ウイルスにさらされている理恵たちを早く解放させてあげたいと思うの」

「それもそうだ。で、どうする？」

「このシミュレータが、出来上がった時点で、ウイルスの大掃除をして、今の発信元に強力なウイルスを逆に送り込むの。サーバーが真っ白になるくらいなの」

「そんなことしたら、宣戦布告だぞ」

「だって、相手なんていないじゃない？」

確かに、実質、表には出てこない相手ではあった。

「うーむ、それもそうか」

「だから、このシミュレータ自体に強力なファイアウォールをつけて、ちょっかいを出してくる、サイバーテロリスト達に、しっぺ返しを食らわせるの。このファイアウォールが強力であればあるほど、このシミュレータはリアル感を増すわ。それと、中央指令所の信号のやり取りは全部、一旦このシミュレータを通過させたらどうかしら、フィルターにもなるし実物と同期させるにも都合がいいし」

「なるほど、恐れ入りました。その線で行こう」

システム自体は、シミュレータが出来上がってから計算機センターでプログラミングすることにし、仕様については、芽衣の意見を取り入れ、それぞれバックアップ系を導入することにした。この内容を、回路設計教室に書類で連絡した。回路設計教室では明日早速、ユニットを発注すると言っていた。納期は早いもので三日、長いもので一週間位らしい。

その間、計算機センターでは芽衣の書いたアルゴリズムで、アンチウイルス・ウイルス（ウイルスを撃退するためのウイルス）を用いた、強力なファイアウォールソフトの開発が進められた。

健一たちの作業が進む中、芽衣の高校生活も進んでいく。放課後、毎日、裕子のお父さんの病院に裕子の様子を見に行っているが、相変わらず変化はないようだ。裕子のお母さんはこのまま、寝たきりになって植物状態になることを心配していた。裕子は本気で進学を断念する気味にいるみたいだった。芽衣の説得で何とか授業には出ているが、これ以上慰める言葉も見つからなかった。

ついに、センター試験模試のある金曜日を迎えた。一日、模試にあてられるが、時間の都合上、数学、英語、国語の三科目だけの簡易模試である。全然試験勉強の進まなかった芽衣は、毎度使っている鉛筆ころがしに頼った。これは、鉛筆のお尻をカッターで削り、一、二、三、四、はずれ、やりなおし、と番号を振ったもので、確率的には二十五パーセントで当たるはずである。が、実際には四十パーセント程度の得点を稼いでいる。

試験が始まった。

芽衣は早速、判らなくなったので、鉛筆転がしを始めた。五問くらい解いたところで、勢い余って机から落ちてしまった。

「しまった」

思わず、叫びそうになった。こんな場合手を挙げて試験監督に取って貰わなければならない。後ろから歩いてきた試験監督が拾ってくれた。

「ありがとうございます」

小声で言った。

「むむ、なんだこれは」

鉛筆転がしがばれてしまった。まじめに解きなさいとたしなめられ、鉛筆を取り上げられてしまった。仕方ない自力で考えるかとあきらめた。

芽衣は少し冷静になり、かつて、健一に教わったことがある。「情報分析において、選択は重要な作業であるが、テストの択一問題などは初歩的なものだ。考えるまでもないくらいにきなさい」などと言っていた。

つまり、選択条件のうち三つは誤った回答を選択する様、誘導する文章であるのに対し、残りの一つである正解には何も対策が採られていない。という法則があると教えてくれた。このことを思い出し、問題文を読まずに選択領域だけ分析をはじめた。

すると、不自然な表現や、ほかと文章の長さ、語数が明らかに違うなど、問題作成者の意図が読み取れてきた。芽衣の天性の才能が生かされた。

結局、半分の時間で全問解くことが出来た。これで得点率がどのくらいかは後にならないとわからないが、うまくいけば、共通テストの対策は放っておいて二次試験の対策に時間を割けるかもしれない。

チャイムが鳴り、試験時間が終わった。後ろから前に送る様、試験監督の指示があった。「ふー、やっと終わった。裕子どうだった？ わたし途中で鉛筆ころがしの鉛筆取り上げられちゃったよー」

「馬鹿ねーあんた。真面目にやんなさいよ」

裕子は結構解けたと言っていたが、どこか表情が暗かった。芽衣はちょっとだけ落ち込んだ。今日は金曜だし、気分転換に大学のキャンパスでも行ってみようかな。高校は試練の場だが、大学キャンパスは希望の場のような気がする。

「ねえ、裕子、これから大学に遊びに行かない？」

「エー、一般人でも入れるの？」

「別に制限なんてないよ。この間なんてテニスサークルに勧誘されたくらいだもん」

「なら、面白そうね。行こ行こ」

二人でバスに乗り、理学部前で降り構内に入った。さすがに金曜日の夕方だ、サークルの学生ばかり目に付く。覚えているのは売店までの道順くらいだが、二人であっちへ行ったりこっちへ行ったりと結構楽しい。

「いろんなサークルがあるんだね。落語研究会って何だろう」

「お笑いじゃないの？」

「そのままじゃんか」

喫茶店らしき建物があつた。

「ねえ、なんか喫茶店ぼくない？」

「そうだね、お茶して行こうか？」

「うん、レモンティーがいいかな」

と、お気楽なことを考えながら入ってみると、やはり喫茶店だった。店の中を見渡すと、健一の姿があった。一人で論文を読みながら、コーヒーを飲んでいる。芽衣は、やばい、来るんじゃないかと思ったが、遅かった。

「あれ、芽衣のお兄さんじゃない？」

「そうみたいだね」

「無視していいの？」

「ま、悪くはないと思うけど……」

「なんか歯切れ悪いよ」

「しょうがないか」

芽衣は健一に声を掛けた。

「お兄ちゃん。何してるの？」

「お、芽衣か、いいところに来たな」(しまった)

「えっと、こちらは友達の中原裕子ちゃんです。そんでもって、兄の黒澤健一です」

「あ、はじめまして、妹がお世話になってます」

「こちらこそ、はじめまして。よろしくお願いします」

「今日は二人で、遊びに来たの？」

「はい」

健一は二人に紅茶をおごってくれた。健一が、裕子の前でおとなしいので芽衣は少し安心した。

「ねえ、お兄ちゃん、ここの売店って本とかCDとか安く買えるんでしょ？」

「うん、十パーセントオフだよ。……でも学生証がいるだろう」

「エー、ほんとなんですか？ 行ってみたーい」

と裕子が言うので、この後売店に行ってみた。

「わー、このDVD新作なのに十パーセントオフ？、こっちのCDも？」

「買ってあげようか？」

「お願いしまーす」

健一は、それをレジにもって行き、計算機物理教室に請求書まわしといて、といて、サインをし、DVDとCDを裕子に手渡した。

「経費で落とすとくよ。他にも欲しい本とかあったら言ってね」

「わーありがとうございます。なんか、かっこいいですね」

「そうかい」

健一は照れていた。芽衣は不審に思っていたが、どうやら、裕子に気がある様だ。おかげで、今日は適当に遊んで帰れそうだった。が、甘かった。

「ちょっと芽衣に頼みたい仕事があるんだが、いいかな」

「でも、裕子がいるから」

「興味があるなら、一緒に見学してもらって構わない」

——うわー何それ！

「はい、ご一緒します」

「わかりました」

健一に連れられて、工学部の建物に入っていった。行き先は一階の、回路設計工学教

室。組立途中のシミュレータを見せるという。部屋へ入ると一部区画を区切って作業スペースとなっていた。

「こちら、回路設計助教の山崎先生と大学院生の山中さんだ」

「こんにちは」

「彼女が、わたしの助手を務めている黒澤芽衣です」

「うわさは伺ってますよ。黒澤先生の懐刀らしいですね」

「いえ、単なるお手伝いさんです」

「でも、このシミュレータの基本設計をされたんでしょう？」

「まあ、そうですが、……大したことはありません」

「でも、まあ、一回見てやってください」

回路設計教室でも、研究テーマと予算がついたので、この作業には意欲的だった。早速三人で、ヘルメットをかぶり区画内に入る。ラックに整然とユニットが並び、配線はほぼ終わっているように見える。

「まだ、仮ですが、電源を入れれば一応起動できる状態です」

「ちょっと、入れてみてもらえますか？」

と健一が注文を入れる。

学生が、簡単な電気配線工事をし、ユニットに電源が入った。メインスイッチを入れるとユニットに生命が宿った。モニター用に一台のノートパソコンがつながっている。芽衣は言われるまでもなく、パソコンを操作した。画面は真っ黒で、BIOS（機械の基礎ソフト）のみ起動している。芽衣が、手早くキーボードを操作するとエディターソフトが起動した。十基のCPUユニットと同数のバックアップユニットが作動するか確認する、簡単なプログラムを書き走らせた。

各ユニットは問題なく動作した。

次に、十基のCPUをダウンさせた。

各バックアップCPUが立ち上がった。

この作業を、周りの人間は魔法を見るように、呆然と見ていた。

「問題ないですね」と芽衣が言った。

「君すごいねー、これだけ使える人は見たことないよ。おかげで、以後の作業は自信を持って進められる。ありがとう」

「うん、計算機センターでもソフトは七割がた完成している。もうすぐだな」

帰り際、裕子がしきりに感心していた。

「お兄様かっこいいし、芽衣もかっこよかったよ」

「なんかお兄ちゃん、裕子に気があるんじゃないかなあ、悪い予感がする」

「うそ、わたしなんて何の取り柄もないのに？ 前に芽衣が、お兄様のこと人の才能しか見ない人って言ってたじゃない」

「でも、なんかおかしかった。ただで人に物をあげるなんて、今までなかったもん」

「きっと気のせいよ」

「そうかなあ」

途中のバス停で、芽衣は降り、裕子と一緒に病院に顔を出した。病室には医師と看護師がたくさん集まっていた。裕子が、お母さんに「どうしたの?」と聞いた。

「さっきね、まぶたが少しだけ動いたの。意識が戻ったんじゃないかって今脳波計を調べてるの」

裕子のお母さんは、かすかに希望を抱いていし、裕子も表情が明るくなった。診察をしていた医師が、お母さんに説明した。

「今、わずかですが、脳波が戻り始めています。確実とは言えませんが意識が戻る可能性があります。ですが、急変することもあるので、まだ危険な状態です。安心はしないで下さい」

芽衣は医者って残酷だと思った。もう少し希望を持たせる言い方をしたって良いじゃないかと思った。芽衣はしばらく、裕子に付き合っただけで大丈夫そうだったので、三十分ほどしておいとしました。

帰宅すると、母親が待っていた。

「お帰り、今日のテストどうだったの?」

「うん、まあまあかな」

——それしか聞くことないのかね?

「あんたのまあまあは、聞き飽きましたよ」

——だったら聞くなよ、と思った。

うんざりしながら、芽衣は、夕食までテレビを見た。ニュースでまた、中国海軍が出ていた。これもうんざりだ。

「今度は何やらかしたの?」

芽衣は独り言を言った。

——今日、午後一時頃、中国海軍のものと思われる原子力潜水艦が沖縄中間線から、日本国領海を侵犯、六時間にわたって航行しその後、東シナ海に消えました。領海侵犯の一部始終は自衛隊の対潜哨戒機がビデオに撮影しています。とアナウンサーは早口で喋った。

ビデオに撮ったって、全然敵の脅威になってないじゃんと思った。敵を追い払ったのは、他の要素だと直感した。

無口な夕食タイムを終えると、二階へ上がって、着替えてベッドに寝そべった。色々なことが頭によぎる。一体あのファイル「CODE 1」は何だったんだろう。あれから、この一件に巻き込まれたんだ。でも、そのせいでいろんな人と巡り合い、確実に人生は変わった。単なるファイル収集オタクから、計算機の専門家になってしまっている。

芽衣はもう一度、部屋のパソコンで「CODE 1」を開いた。分けの判らない文字の羅列。解読しても変な中国語。

「有事の際」とあの時兄は言っていた。

——「有事」って何だろう。お国の一大事のことだよな？

芽衣の高校生の限られた知識では、何も思いつかない。田端先生は防衛省出身だと言っていたのを思い出した。

計算機センターに侵入することを思い立った。早速アクセスしてみる。田端准教授のフォルダを見つける。が、強力なファイアウォールソフトが起動しているのに気づいて、あわてて閉じた。さすがに防衛省の情報分析官だ。

今度は手段を変え、文学部のサーバーを経由してアクセス、学内からだどガードが緩んでいるのではないかと期待した。アクセスを偽装するソフトを使い、ファイアウォールを一時的に無力化し、再度、田端准教授のフォルダにアクセスした。

今度は、成功した。防衛関係の独自の研究資料が一杯ある。その中で、「台湾上陸作戦における日本への妨害工作の可能性」というファイルを見つけた。すばやくダウンロードし撤収する。

内容は田端准教授の分析した、緻密な作戦計画とその影響だった。だが、相手から入手した計画情報も入っていた。

「A国が台湾へ上陸作戦を遂行するに当たり、一次的な敵は台湾海軍と陸軍である。二次的には、日本を母港とする、米国第七艦隊と沖縄海兵隊である。台湾軍はA国海軍で圧倒できるが、米国の介入がある場合作戦自体が困難となる。そこで、上陸作戦に要する一日の間、日本国にてサイバーテロを起こし、電力網を麻痺させ、航空管制、レーダー網を無力化してしまう必要がある。このサイバーテロは、A国が介在すると見られてはならない。あくまでも民間のハッカーの仕業にしなければならない。一旦上陸が成功し、実効支配が有効なものとなれば、米国ももはや介入することは出来ない」

ファイルにはこんなことが書かれていた。

——A国って中国のことだろう。

何ではっきり書かないのかよくわからなかった。だが、確かにそんなテロなら、一回きりで停電も一日限りのことだろう。ということは、田端先生はこの上陸作戦自体を阻止する気だと芽衣は判断した。さもないと、それだけのために何億円も使ってシミュレータを作る意味がない。

芽衣はもう寝ようとしたときあっとひらめいた。

——そうだ、「CODE 1」だ。あれって偽装ファイルだったんだ、と芽衣は気付いた。

あれには発電所を止めるウイルスと書いてあったらしいが、実際には日本中の送電網を麻痺させるものなんだから、完全に偽装ファイルにだまされていた。

この偽装ファイルの正体を暴くには、もう一仕事、このファイルにフィルターを掛ける必要があった。芽衣は、計算機センターの兄のフォルダに侵入し、フィルターソフトを拝借した。そして「CODE 1」をフィルターに掛けて見た。待つこと数分。

「CODE 1」の正体は画像ファイルだった。芽衣はやっぱりと思った。画面いっぱいに展開してみた。

画像は、台湾の周辺海域を含む地図だった。潜水艦の配備位置と、上陸予定地点が記入されている。もちろん台湾側の陣地も載っている。これで話が繋がったと思った。

以前、田端准教授が、米中海軍の小競り合いを挑発した人間を知らないかと、言ったとき、芽衣は知らないと答えたが、それが、芽衣本人だと、やっと気付いた。「敵」から、潜水艦配備図を盗み出し、「敵」のファイアウォールを破って強力なウイルスを送り込んだ。これ以上の挑発はないだろう。だから、中国海軍があれ以来示威的行動を繰り返しているんだ。芽衣は、余計なことをしてしまった自分に後悔した。

時計を見ると、十一時をまわっていた。兄はまだ帰ってこない。おそらくシミュレータの最終組立に付き合っているのだろう。芽衣は自分の甘さを悔いた。

あの程度のファイアウォールソフトでは、この有事は止められないかも知れない。もっと強力な、相手の黒幕ごと凍結してしまうような、アンチウイルス・ウイルスが必要だ。頭の中で、アイデアを探した。とにかく兄に一報入れよう。携帯電話を手にした。

「もしもし」

「はい、黒澤です」

「あ、芽衣です。お兄ちゃん、田端先生の計画知ってたの？」

「何のことだ？」

「今回の一件が、中国軍の台湾上陸作戦を阻止するためのものだって言うこと」

「はあ？」

「とにかく、単純なサイバーテロじゃないのよ」

「落ち着いて話せ、こっちは疲れてるんだ」

健一はまだ事態が把握できていなかった。芽衣は電話で怒鳴った。

「じゃそっちに、今までのファイル送るから検証してみて！」

「そっちってどっちだよ」

「今どこ？」

「工学部の方にいる」

「使えるパソコンある？」

「ああ、俺のフォルダに入れてくれ、こっちで誰かの借りてみるから」

「じゃあ、あとでね」

芽衣は、早速ファイルを送り、あらたなファイアウォールソフトを組み始めた。相手の情報機関が民間人のハッカーを経由してウイルスを送ってくるんなら、パケット履歴を調べれば、元の発信場所までまとめてウイルスを送り返せる。いや、同じのを送り返すだけでは効果は薄い。あの手この手と、やり直してくるだろう。相手のコンピュータを一日使用不可能にしなければならぬ。どういう手が有効だろうと考えた。

「そうだ、ファンを止めてCPUとハードディスクをオーバーヒートさせればいいんだ。CPUに余計な意味のない計算をさせて負荷を掛け、ハードディスクもアクセスしっぱなしにさせ、さらに回転数も最大限まで上げる。これなら数分でオーバーヒートする。メモリーも常に無駄なファイルを常駐させて温度を上げる」

芽衣は我ながら、今までで一番強力なウイルスだと思った。

「よし、この手で行こう、名付けてカウンターパンチ作戦」

だが、敵のシステム構造を予想しながら電源管理システムに介入するプログラムに手間取り、結局夜中の三時まで掛かって書き上げた。後は、どこかで試すだけだ。パソコンを一時的に壊すんだから友人ので試す訳にはいかない。そのときたまたま、ネットワークウイルスのアクセスがあった。自動的に相手にこの強力なカウンターパンチが発信される。

それを、パケット監視ソフトで観察し続けた。途中、居眠りをしてしまい。朝八時になってしまった。あわてて、パソコンを見た。すると、ネットワークウイルスの送り主は見事に停止したらしく発信元はネット上から消滅していた。効果は十分だった。

朝になったが、兄からは結局連絡はなかった。大学で徹夜したようだった。

最後まで、田端准教授の陰謀については、はっきり本人から聞くことは出来なかったが、シミュレータに搭載するファイアウォールソフトには、芽衣が新たに作った「カウンターパンチ」というアンチウイルス・ウイルスが搭載された。不正侵入したり、ウイルスを送り込むと自動的に相手と、その相手をコントロールしているコンピュータに回復不能なダメージを与える機能がある。したがって、ダミーを経由してアクセスしても、本人に危害が及ぶという危険なものである。

当初は、そこまでする気はなかったが、相手の動きを一日ストップさせる必要があることから、採用に踏み切った。

電力会社の協力も、予算とデータを送ってくれたのが関東電力と近畿電力の二社、データのための協力が、札幌電力、陸奥電力、中日本電力、福井電力、山陽電力、伊予電力、博多電力、那覇電力の八社に上った。いずれも山本教授の尽力によるものだった。

いよいよ明日、塗装が終わったシミュレータ本体が、計算機センターの建物に搬入される。その後、計算機物理の大学院生や学生の手により、基本ソフトと送電網データがインストールされ、試験後、本格稼働となる。モニターに用いる端末も十台がすでに据

え付けられている。これは、電力各社の送電状況をモニターするためだ。

ここまで準備が済んで、久々に健一が帰宅した。両親がいそいそと面倒を見る。

「お兄ちゃんお帰り」

「おう、ご苦労だったな。ただいま」

「結局、田端先生の陰謀ははっきりしなかったわね」

「まあ、諜報屋だからね、あの人は。聞かぬが花ということもあるだろう」

「随分理解がいいのね」

「まあ、対策は打てたんだからいいじゃないか。そんなことより、お前が、そこまで進歩してくれたのがむしろうれしいよ」

「はぁ？」

「だって、『CODE 1』の解明データを田端先生に提供したら、すごく喜んでたぜ、それで、話がつながって、自主的にファイアウォールを手直したんだらう？ 格段の進歩だ。これで、大学でも十分やっていける」

田端氏はあのデータを、防衛省経由で米軍に流したに違いない。でも、そんなことはどうでもいい。ハッカー対ハッカーの戦いはこれからだ。

そして、芽衣にはまだ高校生としての生活がある。前回のセンター試験模試では、芽衣の期待をはるかに上回る九十パーセントの得点率だった。いんちきなやり方ではあったが、これで進路指導教諭も、東都大受験を勧めてくれるようになった。この九十パーセントという数字に、芽衣は注目していた。情報分析によりこれだけのことがなしえるんだ、という意識が彼女を徐々に変えつつあった。まさに兄の口癖通りのことが目の前で実現したのだ。しかし、後は二次試験対策だった。情報分析は同じ様に役に立つだろうが、択一試験の様に意味が分からなくても得点できる様な奇跡は起こらない。それなりに知識がいる。自分はただの、お気楽女子高生だったのか、と多少自虐的になりつつある。

高校では文化祭が始まった。芽衣は、生物部の展示と称して、二日間高校をサボることにした。健一に、呼び出されているからである。朝から、健一と一緒に出勤した。

芽衣の仕事は、インストールの終わったシミュレータの最終チェックである。端末の一台に座り、画面を操作した。各電力会社の送電網と、送電量が逐次表示されていく。おかしいと思ったことは大学院生の山崎真一に言えと、言われている。

「あの一山崎君。福井電力の中継所からの送電線が二本切断されてるよ。データチェック願います」

「えっ、そうですか？ ああ本当だ。直します」

「それから、山陽電力の送電量の合計と発電量の合計が合っていないよ。入力漏れの発電所があるんじゃない？」

「えーと、リストでは……ああそうですね。抜けてます。すぐ直します」

時々、健一が見に来ている。芽衣の作業ぶりに満足げだ。三時間掛けてデータの入力

ミスを修正した。

一仕事終え、芽衣は缶コーヒーを飲みながら健一に語りかけた。

「お兄ちゃん。ちょっと思うんだけど」

「はい、何でございましょう？」

「えっとね。このファイアウォールソフトなんだけど、相手のコンピュータを破壊するものなの。だから、あんまり使いたくないのよ」

「興味本位のハッカーには酷ということか？」

「そう」

「でもなあ」

「要は、田端先生の陰謀通り、台湾上陸作戦を阻止できればいいんでしょ」

「でも、敵は国内からアクセスしてくるかも分からないんだぞ」

「だから、今分かってる十数種類のウイルスに対してだけ『カウンターパンチ』を使うの、それ以外のハッカーには従来通りの、通信遮断だけで対応したいの」

「でも、ウイルスの数はこれからも増えるぜ」

「それは、ウイルス対策ソフトの会社と一緒によ。常時、監視して対応ウイルスを増やしていくしかないと思うわ。それで、田端先生の了解を取れないかしら」

「じゃあ、これから話に行こう」

「え、お兄ちゃん話をつけてくれないの？」

「お前のアイデアだ」

「ひどーい」

二人で、田端准教授の部屋に入った。ソファに座り、芽衣は自分の考えを述べた。だが、田端准教授は折角の伝家の宝刀とも言える強力な攻撃性防壁である、カウンターパンチを手放す気はなかった。

「出来れば、完璧に敵を封じ込めるものにしたい」

「だからといって、関係ない人まで巻き込むのも考え物だと思います」

「関係なくはないだろう。不正アクセスは不正アクセスだ」

と、取り付くしまもない。芽衣は戦法を変えた。田端准教授の行動は調べてある。

「田端先生、台湾海峡の潜水艦配備図をアメリカ大使館の国務省職員に手渡しましたよね」

「何のことだ？」

「でも、その職員は国務省の人間じゃないですよ？」

「……」

「CIA東京支局のチーフ・オフィサーですね」

「何でそんなこと知ってるんだ」

「わたしだって情報分析者の端くれです」

「君には負けたよ。だが、彼はチーフじゃない。普通のケースオフィサーの一人だ」

「それで、その人は、北京に何しにいったんですか？」

「そこまで知っているのか？ ただの話し合いだよ」

「脅迫じゃないんですね」

「ふん、アメリカ外交の基本は、スピーク・ソフトリィ・バット・キャリー・ア・ビッグ・

スティック（穏やかに話せ、しかし棍棒を忘れるな。）だ。ソフトなうちは、話し合いだ。たぶん、想像だが、例の潜水艦の潜伏場所にグアムから飛び立った超音速爆撃機から魚雷をピンポイント投下すると言ったんじゃないか？」

「でも潜水艦って移動するんでしょ」

「いや、浅いところに出れば、台湾駆逐艦の餌食になる。潜伏できる場所なんて限られてるんだ。だからこそこの配備図が盗まれたことで、敵さんが示威行動を取るようになったんだ。やっぱり犯人は君だっただろう」

田端准教授の反撃には答えず、芽衣は質問した。

「それで、この作戦は頓挫したんですか？」

「分からない。中国共産党内で決定することだからな。でも、第七艦隊ではなくグアムからの超音速爆撃機なら、日本でサイバーテロを起こしてもメリットはない」

「じゃあ、ファイアウォールのレベルを下げてでもよろしいですね」

「不本意だが、負けたよ。でも君が今後も管理してくれることが条件だ」

「でも、来年入学できるかどうか分かりません」

「教授には私からも頼んでおく。何とかする」

「ところで、この間の中国原子力潜水艦なんですけど、どうやって追いついたんですか？」

「ふん、アメリカの駆逐艦が対潜ヘリコプターSH60を二機飛ばしてソナーから探信音波を発したんだ。もう一機は魚雷搭載機だ。……まあ威嚇だな。それで、敵は浮上して悠々とでもないだろうが、領海外へ脱出した。潜りっぱなしだと撃沈されていただろう」

「あの、こんなこと言っただけじゃないと思うんですが、自衛隊って張り子の虎なんですか？」

「厳しいこと言うな。基本的に戦闘のための法律が整備されていないのが実情だ。だから、撃たれない限りこちらは撃てないのだ。それも、ライフルならライフル、5インチ砲なら5インチ砲。それ以上の応戦は正当防衛を逸脱するからできない」

「そんなものですか？　じゃあ、サイバーテロも同じですか？」

「だから、我々が尽力しているんだ。君もね」

「はあ」

芽衣は何となく、煙に巻かれた気分だった。結局手製の爆弾で敵と戦うゲリラの気分だった。

こうしてシミュレータは完成した。山本教授の指揮でプログラムをスタートさせた。この瞬間、日本中の送電網が計算機センターの監視網に入った。明日は、電力各社の取締役がやってきてテープカットのセレモニーがある。

田端准教授の情報はさらに徹底していた。

駐北京アメリカ大使館のジェフリー・ダイソン書記官の訪問を受けたときの中国外交部は少し態度がおかしかったという。人民解放軍参謀本部から何の報告も受けていないらしかったからだ。そこに、アメリカがやって来たと思ったらやおら、書類ケースの中から台湾海峡の潜水艦配備図と、上陸予定地点の入った地図をテーブルに広げた。ご丁

寧に、米軍の爆撃予定ポイントも注記されていた。

——何ですかこれは？

——お国の人民解放軍の台湾上陸作戦計画です。もし実施すれば国際的な非難を受けますよ。

——馬鹿な、台湾は中国の領土です。

——まあ、それはどうでもいいことです、こちらとしてはこの海域での紛争は好ましくないと考えています。もし、これらの潜水艦が行動を起こせば即撃沈することを予告しておきます。

——そちらこそ、国際的な非難を浴びますぞ。

——何故です？ 水深三百メートルにある鉄の塊など誰にも知られませんよ。それにあなた方にとっても存在自体が秘密でしょう？

それで、米中秘密協議が終わったそうだった。この上陸計画は棚上げとなり、サイバー攻撃部隊の責任者である大佐の首が飛ばされたと、聞いた。

芽衣は、世話になった回路設計教室のための、送電網を使った研究テーマ用のプログラムを作った。電力消費地に近いところの発電所を効率のよい順に送電する最適化システムを作り、従来のものと比較して節約効果が分かるようにしたものである。ちょっとシミュレーションしてみると四パーセントほど節約効果がある様だった。これを見せると、工学部の大学院生の山中は喜んだ。

「これだけやっていただけるとすぐ論文に出来ますよ。どうも有り難う。われわれも、徹夜で、このシミュレータを組み立てた甲斐があります」

「いえ、お役に立ててよかったです」

「でも、黒澤さんて多芸ですね」

「いえ、コンピュータしか取り柄がないもので」

「でも、こんなに美人で頭がいいともてるでしょう？ こんなこと言ったらセクハラになるのかな？」

「そんなこと言われたのはじめてです」

兄貴が入ってきた。なんかうれしそうだ。芽衣は警戒した。

「おう、明日のオープニングセレモニーな、お前もテープカットに参加することになった。教室の代表だ」

「えー、そんなの困るよ。服もカジュアルしか持ってないし」

「そんじゃ買ってやるよ。だから頼むよ」と、兄貴は手を合わせた。

「ほんとっ。じゃあ出てもいいかな」

「現金なやつだな」

夕方から健一と、銀座の高級ブティックへ行きドレスとスーツを一着ずつ買ってもらった。どちらを着るかは、明日の状況に合わせることにした。

「後、何が必要かな？」

「バッグと指輪とネックレスと時計！」

「いっぱいいるんだな」

「だってレディーですもの」

「でも、テープカットだけじゃないか」

「だめ。い・る・の」

「わかったよ」

結局全部銀座の高級店で揃えてしまった。芽衣はご機嫌で、カルティエの時計と指輪を早速はめている。健一の携帯電話が鳴った。大学からだ。

「はい、黒澤です」

「ああ、山本です。今どこにいるの？」

「明日のテープカットの衣装をそろえに、妹と銀座に出ています」

「ああ、そう。今日ね、遠方の電力会社の方が上京されるそうなので、一席設けようと思うんだ。いつもの料亭でやるから、芽衣ちゃんと一緒に出てください。時間は七時」

「はい、かしこまりました」

教授は芽衣ちゃんと呼んだ。もうすっかりスタッフ扱いだ。

「お兄ちゃん何だったの？」

「料亭で接待だ。うまいもん食わしてやるからお前も来い」

「うん、今日のスーツがいいかな？」

「なんか、お前変わったな」

「そう」

「だって、田端先生やり込めちゃうし、高級料亭も平気になったし」

「そうかなあ」（金のかかる女？ ふふっと笑みがこぼれた。）

ふと、友人の藤原理恵のパソコンが、ウイルス漬けになっていることを思い出した。早いとこ大掃除をして、普通に使えるようにしてあげなければならない。以前は敵に探知されるのを恐れてウイルスを削除することをためらっていたが、シミュレータが稼働した今、恐れることは何もない。兄に伝えると、快諾してくれた。宴会までまだ時間がある、一旦大学へ戻り研究室のパソコンからリモート操作をかけた。

ざっとスキャンすると例の十種類のウイルスが住みついている。これらを駆除して、レジストリを元に戻す。年賀状ソフトの名簿機能を停止させていたのを解除した。ここで、再起動をかける。

——理恵ちゃん、部屋にいないのかしら？

と心配した。起動後、リモート設定を解除し、再度、再起動をかけた。もうリモート状態は利かない。これで一件落着した。

ついでに、シミュレータの作動状況を見に行った。気になる不正アクセスが一件あったみたいだが、ウイルスと認識されて通信遮断されている。

もうサイバーテロリストは、ここを嗅ぎ付けたんだろうか？ 普通に中央指令所へアクセスして、ここに掛かった可能性はあるが、中央指令所自体一般には知られていない。やはり、このシステムを構築するのを感じられたのかも？ あの中国商社はただのハッカーではない。洗練された情報機関であると芽衣はにらんでいる。当然防衛省やCIAも監視しているのだろう。ひょっとすると田端先生とCIAとの通信からばれたかもし

れない。

しかし、そんな心配をよそに送電状況は順調だ。「カウンター・パンチ」も作動していなかった。田端先生の言うとおりのあの計画が頓挫したなら、もう「カウンター・パンチ」は作動することはないかも知れない。

ついでに、中央指令所のキャッシュメモリに作用するようなウイルスを自動的にダウンロードするプログラムをつくり、パケット監視システム上に稼働させた。これで新しいウイルスが増えても、アラートを出せる。

シミュレータ本体を見に行った。ラックに収まったユニットは、黒く塗装されたせいで、なんとなく精悍な印象を受ける。自分の考えたシステムだと思えば愛着がわいた。

ネットワークの解法が必要な数学問題も解くことが出来るな。と思った。工学部が走らせているプログラムはその典型だ。今のところまだまだ余裕がある。兄が入ってきた。「おい、何やってんだ。もう行くぞ」

「はい」

理学部正門前にジャンボタクシーが止まっていた。回路設計教室と計算機物理学教室のメンバーがまとまっていくらしい。学生は入っておらず、芽衣だけ特別扱いだ。黒澤健一の妹ではない。今回の計画の立案者として、実力、能力が認められたのだ。

夕方の国道をジャンボタクシーが丁寧に走っていく。二十分ほどで赤坂のある料亭前に着いた。へえー、料亭ってテレビでしか見たことないけどこんなところなんだ、と思った。

山本教授が言った。

「芽衣ちゃん、スーツ着るとすごく美人だね。見違いちゃったよ」

「いやあ、そんなことはないです」

——照れるなあ。

「いや、小道具が効いているんでしょう」と兄。

この料亭も、教授の行きつけらしく、女将が出てきて丁寧に挨拶し、奥の間に通された。芽衣は末席にちょこんと座った。七時前になると電力会社の取締役が続々とやってきた。教授とは面識があるらしく挨拶だけ交わし、准教授以下はそれぞれ名刺交換をやっている。芽衣は高校生なので当然名刺なんて持っていない。が、みようみまねで挨拶する。一応、計算機センターの学生ということにしておいた。しかし、今回のメイン企画者ということは知られているらしく、相手の挨拶も丁寧に、色々質問してくる人もいた。相手は、ほとんどが副社長で、何人かは常務だった。

兄の言うとおりの、偉い人は才能を見るのであって、芽衣の容姿に触れてきた人はいなかったが、専門分野については詳しく聞かれた。

あまりの料理の多さに、全部食べられるかと思ったが、周りを見るとさすが男の人でちゃんと平らげている。もったいないとは思ったが、好きなものだけ食べることにした。食事しながら、今回のシミュレータについて色々質問が飛び交い、そのほとんどは、健

一が答えていたが、時々芽衣にも回ってきた。

ファイアウォールシステムについても、懸念の声があった。

「器物損壊罪に問われることはないの？」

これには、田端准教授が答えた。

「これは、攻撃型防壁という新しい概念です。確実に相手の計算機を使用不能にするものですが、直接相手を攻撃するものでなく。無駄な動きをさせるプログラムを注入させることにより、温度上昇させ自滅させるもので、いわば、自らによって自らの性能を超えてしまって、壊れることになります。従って、器物損壊罪にはあたらないと考えています」

「でも、損壊することには変わりはないんでしょう？」

「はい、しかし、これを送り込むのは、某国のサイバーテロリストの使う敵対的ウイルス十種類のみです。これらは明らかに、送電網の壊滅を企んだもので、逆に訴えることが出来ます。それ以外の不正侵入などに対しては、従来どおりの通信遮断によるのでまったく問題ありません」

——あっ、あたしのアイデアだ。

「ふーむ。まあ、ことがことだけにやむを得ないと言うところでしょうな」

ちょっと、芽衣が席を立つと廊下で秘書らしき女性が何人か待機していた。みなすごく美人で、スタイルもいい。へえー、重役秘書ってこんな人なんだ、と感心した。

「あのー電力会社の方ですか？」

「はい」

相手は、どちらかというとも芽衣に対して緊張していた。ちょっと意外だった。こんな美人なお姉様方なら、高校生の芽衣など問題外のはずなのに、どうしてだろう。

「秘書の方ですよ？」

「はい、そうです」

「大変そうですね」

どうやら、芽衣のことを二十億円のプロジェクトを取り纏める、東都大学の天才科学者だと認識しているらしい。それで、態度が違うのに納得がいった。芽衣は恥ずかしくて消え入りたかった。

お手洗いに言った後、また席に戻った。

「でも、さすが山本先生のお弟子さんだけある。こんなにお若いのにこのプロジェクトをまとめられるとは」

「おい、芽衣、お前のことだ」

「え、わたしですか？ 別に大したことはやってませんが」

「こりゃ、大物だ。将来が楽しみですな」

宴会は滞りなく終わり、みんな散り散りに帰っていった。重役の何人かは教授達と二次会へ繰り出したが、健一は芽衣を送って帰らなければならないので、特別に解放された。

芽衣と健一がタクシーで帰宅する。母親が真っ先に芽衣の服装をとがめた。

「ちょっと芽衣！ 何着てるの、それにそんなネックレスなんかして」

「ああ母さんちょっと待って、芽衣は明日の大学のセレモニーに出てもらうんで今日、俺

が買ったんだ」

「あら、そうなの。ならいいけど」

と、芽衣とは全然信用度が違う。今日は結構疲れた。高校では文化祭の一日目だ、それ以上の体験をしたような気がする。

受験生としては、早めに寝たが色々思い起こされる。あんなにきれいな電力会社重役秘書のお姉さんたちが、芽衣に圧倒されていた。普通だったら高校生の女の子なんて相手にもされない人たちである。やはり、ステータスがものを言うのだろうか？ 東都大大学院の研究者、実は都立緑が丘高校の三年生。そう思うと笑えてくる。

兄に買ってもらった、アクセサリやドレスだが、時計は使えそうだが、ネックレスや指輪は普段は使えそうにない。エルメスのバッグに至っては社会人になるまで使うことはないだろうと想像していた。でも、今日のお兄ちゃん気前よかったなあ。何でだろうと不思議に思った。

次の日も、高校は文化祭なのでサボって、健一と一緒に通勤した。大学についてすぐ、健一は教授に電話をし、今日の服装を確認した。重役たちは正装なので、どうやらドレスでいくらしい。健一は背広のままだ。ネクタイだけ白に替える。

「今、構内の美容室に電話して予約取ったから、メイクと髪を揃えてもらえ」

「美容室ってどこにあるの？」

「心配だな。学生に連れて行ってもらえ」

健一は内線電話を回した。

「黒澤だが、田中君いるか？ ちょっと来てくれ」

飛んできた。どうやら卒研（4年生）らしい。

「すまんが、こいつシミュレータのセレモニーに出るんだ、美容室まで送って、帰りもこっちに連れて帰ってくれ」

「はい、わかりました」

芽衣は、学生に連れられて美容室へと向かった。行き道、学生に話しかける。

「ねえ、田中君て四年生？」

早速タメ口をきく。

「はい、黒澤先生の下で、ファイアウォールの研究をしています」

——なんか立場が逆だね。

「ふーん、じゃあ、シミュレータのファイアウォールも手伝ったの？」

「はい、芽衣さんにはお世話になりました。攻撃型防壁なんて、すごいアイデアを出してもらった上に、プログラミングまでして頂いて、後は実証だけで論文になりそうなので助かりました。先生はこれで、学会賞をねらってるみたいですよ」

「そんなにすごいかしら？」

「それはもう。相手のウイルスの種類によって、対応を分けるなんて画期的です」

「ふーん、そんなものなの？」

「あれ、ご存知ないですか？ シミュレータ自体も画期的なマシンで、これも学会賞も

のだと言われていますし、工学部でもこのシミュレータを使った実証で、これも学会賞をねらっているらしいです。もちろん学位論文には十分なんで、みんな喜んでますよ」

「何だ、あたしそんなに貢献してたんだ」

「あ、美容室はここです。外で待ってます」

「ありがとう」

中に入ると、理容室と兼用になっている普通の美容院でおばさんの美容師がいた。連絡が入っているらしく、すぐに作業に掛かってくれた。

「あら、あなたきれいな髪してるわね。セレモニーだからドレスでしょ？ アップにする？」

「あ、はい」

芽衣はストレートのセミロングを下ろしていたが、美容師の手に掛かりくるくるとアップにし、髪留めで止められた。鏡を見ると、結構似合っている。うれしくなった。

「お化粧品は、まだ肌がきれいだから、薄めにするわね」

「はい、お願いします」

ファンデーションを極微量塗り、薄いピンクの口紅を塗られた。アイシャドーは薄い紫色、ほお紅も薄いピンクをちょっとだけつけた。自然な仕上がりだ。

鏡を見た。

「わー、まるで別人みたい」

「そうでしょ、はじめてお化粧品したときはそんなものよ。でもあなたきれいだわ」

ほめられた。

化粧が済んで、外へ出ると田中君が待っていた。ちょっとびっくりしていた。

「芽衣さん、すごくきれいですね」

ちよっぴり赤い顔でほめてくれた。帰りは彼は無口だった。

ドレスには兄の個室で、着替えた。

「ちょっとお兄ちゃん、十分ほど出て行って」

「早くしろよ」

白いドレスに着替え、ネックレスをつける。リングをはめてハンドバッグを持った。おっと靴もハイヒールに替えなきゃ。

「お兄ちゃん終わったよ」

「ふーむ。わが妹とは思えんな」

「何よ、それ」

「ほめてるんだ」

「じゃあいいや」

「うん、で、今日のスケジュールだが、セレモニーのテープカットが十時半、十二時から立食パーティー、懇話会があって三時終了、後、今日は研究室の打ち上げが七時からあるが、俺たちは教授と一緒に接待だ」

芽衣がカルティエの腕時計を見ると、すでに十時だった。もうすぐだ。

「場所はどこな？」

「シミュレータ本体の前に、ポールとリボンが飾ってあったらろう。そこでやる。後の行事は大会議室を使う。田中君に案内させる。念のため、バッグの中に携帯電話を入れておいてくれ」

「うん、もう入れてる」

セレモニー会場へ行った。昨日の重役たちが勢ぞろいしている。教授たちも一緒だ。なんかすごいことになっている、と思った。なんとなく出来てしまった機械だが、世紀の大発明といった様相を呈している。ちょっと不安を感じたが、まあ、後のことは健一や山本教授がうまくやってくれるだろう。

「あなた、昨日の宴席でご一緒しましたね」

一人の紳士が声を掛けてきた。

「はい、計算機センターの黒澤芽衣と申します」

——こんなこと言っているのかな？

「私は、関東電力副社長の副島《そえじま》と申します。あなたが、この計画の立案者だそうですね」

——まあ、思い付きを口にしたのは確かだけど。

「いえ、まだまだ、アシスタントに過ぎません」

「まあ、そう謙遜なさらなくてもいいですよ。どこの研究室でも若い人が実際の功労者なんて言うのは知ってますから……。それで、黒澤さんは学位取得後はどこか就職をお考えですか？」

「いや、まだそこまでは……」

「確かに、研究室に残りたいという気持ちは分かります。でも、あなたの様な頭脳を必要としている企業もあるんです。ぜひ関東電力の研究員という選択肢も考えてください」

「はい、また両親とも相談しまして、検討させていただきます」

とんでもないことになっていると、感じた。話しっぷりからして大学院生と思われている。しかし、近畿電力や山陽電力からも同じ様な申し出があった。実際は、来年の受験も危うい高校生だというのに。

セレモニーが始まった。全員並んで、学生からはさみを受け取り、関東電力副社長の音頭で、一斉にはさみを入れた。大学院生が、カメラのシャッターを切る。後で写真をもったら、芽衣が一番目立っていた。私タレントになろうかしら、と思った。

その後、教授がこのシミュレータの説明をし、十台の端末に案内した。重役たちはそれぞれ自社の送電網を見ながらしきりに感心していた。

「これを見ると、うちの送電網はあんまり効率よく使われてないのが、よく分かるね」

「はい、工学部の回路設計教室では、その最適化アルゴリズムを開発し、実際との差異を検証しています。来年三月の卒業論文と、学会で発表予定です」

「そんなにいいものがあるの？　ぜひうちにも論文のコピーを下さい」

「はい、よろこんで」

芽衣は、この会話を聞いて、さっきの田中君の話思い出した。想像以上にこのシス

テムの評価は高い。その田中君がやってきた。

「芽衣さん。次の会場まで案内します」

「ありがとう」

「ねえ、送電網の効率が上がるって、せいぜい四パーセントくらいだよ」

「いや、その四パーセントが大きいんです。電力会社だと年間数百億円の差になるはずですよ」

「えー、そんなに儲かるの？」

「はい、だから評価が高いんです。僕は芽衣さんのこと尊敬しています」

「それはありがたいけど、私、そんなに大した人じゃないよ」

「そんなことないですよ」

田中君は言い切った。芽衣はほとんど混乱してきた。この調子じゃ懇話会も憂鬱になってくる。が、予想に反して、芽衣の容姿をほめる人の方が多かった。自分では全然実感がないが、お化粧品のおかげだと思う。それに、健一に買ってもらったドレスもかわいい。

そんな中、攻撃型防壁に関して聞いてくる人もいた。

「黒澤さんでしたね。あなたが、このファイアウォールを考えたんですか？」

「はい、まあなんていうか……」

「もし、これが突破されたらどうなるんですか？」

「ハッカー対ハッカー戦になりますが、基本的にはシミュレータ内での戦いになると思います」

「電力会社には、影響は及ばないんですか？」

「そのためのシミュレータです。ウイルスに対する身代わりとお考え下さい。ウイルスはシミュレータ内で大暴れするでしょうが、ユニットごとロックするので中央指令所までは影響は及びません」

「ロックした後、どうなるんですか？」

「ウイルスの性質を特定した後、特定のウイルスであれば反対に攻撃を仕掛けます。ユニットはウイルス除去後、再起動してロックを解除します」

「その作業は、誰が？」

「基本的にメインユニットが監視しています。私も責任持ってみております」

「ああ、それじゃ心配なさそうだ」

「え、いいんですか？」

「黒澤先生が見てくださるんなら心配ないでしょう」

今度は先生ときた。芽衣の信用はうなぎ登りの様である。こんな調子で、懇話会は無事終了した。大学院生達が、秘書のお姉様方に声を掛けて回っている。今夜の接待のことらしい。また昨日の料亭かな？ と、聞き耳を立てていると田中君がやってきた。

「山本教授からの伝言です。今日の接待に、スタッフとして参加してくれとのことですよ。どうなさいますか？」

「はい、兄から聞いてます。参加します」

「それじゃあ、六時に理学部通用門からタクシーが出ますので、よろしくお願ひします。
料亭へは七時までに入ってください」

「田中君は行くの？」

「現地までは行きますが、外で待機です。二次会の案内もありますので」

「へえー、卒研生って大変なんだね」

「いや、研究に比べれば楽なもんです」

「そうなんだ」

「アイデアが出ないときなんて地獄ですよ」

「ふーん」

——全然実感がわかないや。

秘書のお姉さんにも声を掛けてみた。

「一緒に行かれるんですか？」

「はい、秘書ですから」

——当然か？

「黒澤先生、今日はすごくきれいですね」

「へ？ 本当ですか？」

「昨日と比べると、すごくきれいですよ」

「ありがとうございます。メイクした甲斐がありました」

そう答えると、笑われてしまった。

夕方までまだ時間がある。あらかじめスーツに着替えておこう。それにサボってきた文化祭も気になるので、智美に電話して聞いてみよう。田中君に一言、言ってその場を離れた。携帯電話の番号を知らせてあるので何かあったら連絡してくれるだろう。

着替えるために健一の研究室へ戻った。着替えようとしたが兄が戻ってきては困るので、紙に「立ち入り禁止」と書いてドアにテープで貼り付けた。

しかし、着替え中に教授にのぞかれた。あわてて閉めてくれたが、後で話があると言っていた。

「芽衣ちゃん、学内で張り紙をするときは教務課の承認印があるんだ。それで、無許可の張り紙があったんで、注意しに入ったんだ。のぞいたのは悪かったけど、今度から注意してね」

「知りませんでした。すみません」

——でも、目の保養じゃん！

教授から解放された後、携帯電話で、智美を呼び出した。

「あ、芽衣だけど」

「ちょっと、あんた。今どこにいるのよ？」

「うん、のっぴきならない用事があって、お兄ちゃんところ」

「まあいいわ。一応クラスの出し物の模擬店終了、これから片付けるところ」

「あら、終わっちゃったの？」

「何よ、来る気もないくせに」

「てへ」

「後、打ち上げ会があるんだけど、来られないでしょ？」

「うん、ごめん。みんなによろしく言っといて、じゃあね」

「はい」

特にサボって問題はなかったみたいだ。それに、裕子もこの二日間はお父さんの見舞いに行っているはずだ。鏡を見ると口紅がちょっと薄くなってきている。やっぱり、化粧品欲しいなー、と思う。売店にないかしら、と思ってハイヒールからスニーカーに履き替えて、売店まで走った。さすがに何でもおいている。が、元の色と同じものがどれなのかわからない。メーカーも様々だ。これが一番近いかな？ と、貴生堂のピンクの一番薄いのを選んだ。塗ってみたが違和感はなかった。

兄が戻ってきた。

「何を遊んでいるんだ」

「お兄ちゃん、この色どう思う？ さっき売店で買ってきたの」

「別にさっきと変わらんが」

「じゃあいいや、一安心」

「ところで芽衣、さっきファイアウォールを突破されたときの話をしていただろう」

「ああ、さっきのおじさん？」

「馬鹿、近畿電力の常務だ。それで、突破された後は人間同士の戦いになるのか？」

「本当に突破できればね。でも、最新ウイルスは常にパケット監視ソフトで管理、更新されていくし、今のメインユニットの監視でも対策としては十分だと思うよ」

「確かに、A国の線は田端先生のCIA筋の工作で消えたと思ってるけど、このシステムは、来年、学会発表しようとしているんだ。発表され次第、ハッカーたちの標的になると思わないか？」

「興味本位ってこと？」

「そうだ」

「興味本位のハッカーに対しては攻撃性防壁は働かないから、遊びで侵入することは十分考えられるかも？」

「そうだろう。人間対人間の戦いになった場合、芽衣が負けるとは思わないが、二十四時間監視できないし、いちいち相手してたらお前の体が持たないだろう」

「お兄ちゃん、今日は優しいね」

「いや、シミュレータのことを心配している」

——げっ、ひどい！

「じゃあ、こうしましょう。私の戦略を、メインユニットのプログラムに加えておくというのは？」

「どういうのだ？」

「まず、侵入されたら、一旦ユニットをロックするの。ウイルスを凍結して、アイデンティファイしてからパケット監視装置で侵入経路を特定、逆に侵入して内部調査、いわば逆探知ね。それで、ダミー端末であれば無視して、本物の侵入者を特定するの。本物かどうかは通信履歴と内部フォルダにウイルスを飼っているかで判別するの。そして、相

手の端末をロックしてしまうの。電源抜かなきゃ復帰できないから、ハッカーにとっては屈辱ね。

この作業と並行して、ユニットはウイルスを除去し、再起動かけて元に復帰、復帰確認後、電力会社に警戒警報を流して、ロックを解除する。この手順を自動化してしまえば、ほとんどの侵入には耐えられると思うよ。

「何なら、完成後に田端先生に侵入してもらおうってのはどうかしら」

「完璧だ。田端先生の話は抜きにして、俺が試験してみよう。いつ出来る？」

「明日からまた高校だしなー。しばらくシミュレータの存在は秘密に出来ないの？」

「よし、今からやろう。今日の接待は抜けさせてもらおう」

「えー、せっかく口紅買ったのに。主役が抜けてもいいの？」

「口紅よりメイク落としを買っといたほうがいいぞ。お袋がうるさいからな」

「そうだった。がーん」

「田中に言っておいてもらおう」

健一は卒研究生の田中の携帯電話に掛けた。

「シミュレータの手直しをするんで、俺と芽衣は接待には行けなくなった。山本先生に伝えておいてくれ。代わりに大学院生でこの発表をやるやつに、出ろと言っといてくれ。それから、売店にひとつ走りして、化粧品売り場に行って芽衣のメイク落としを買ってきてくれないか？」

「わかりました」

田中君がすぐにメイク落としを届けてくれた。芽衣に会うのがうれしそうだった。接待欠席については、教授はあまりいい顔をしなかったが、シミュレータの手直しならやむをえないと承諾してくれた。ただし、大学院生の代役は却下された。工学部の教授が出る様だ。

芽衣は、早速メイクを落とし、服を着替えた。作業はシミュレータの端末から行える。

十台あるうちの一号機に座り、さっき、健一に説明したことを一旦メモにし、プログラミングを開始した。ここまで作業している芽衣にとっては、時間は掛かるものの大して難しい作業ではなかった。

健一が缶コーヒーを持ってきてくれた。少しは優しいところがある。

コーヒーをすすりながらも芽衣の両手は忙しくキーボードを打ち続ける。まるで、頭の中から楽譜が飛び出してくるモーツァルトの様だと自分で思った。あまり集中しすぎては、体に悪いと思い少し手を休めた。

「調子はどうだ」

「うん、さっき言った通りのアルゴリズムをプログラム化してる。侵入者がダミーか本物か見分けるのが、このプログラムの味噌ね」

「苦心する箇所はあるのか？」

「あ、やっぱり優しい。苦心はしないけど同じ様な命令文が続くから、集中しないと間違えちゃいそう」

「じゃあ、だまってるな」

二時間ほどして、完了した。出来たプログラムをもう一度点検する。

「じゃあ、コンパイルして、インストールするね」

「あ、初期化するから警報出さなきゃ」

「そうだった」

十機一斉に、赤ボタンを押した。電力会社の中央指令所にはシミュレータの再起動警報が表示されるはずだ。これがないと各電力会社の中央指令所は異常が起こったのか、シミュレータの再起動を掛けたのか区別が付かなくなるのだ。

「よし、インストール開始しろ」

「うん」

十分くらいで、インストール完了、メインユニットは新しいシステムになった。ここで再起動をかける。しばらくしてシステム復帰。

健一が、システムのセキュリティを試してみた。

「さて、侵入してみるか？」

「どうぞ、お手並み拝見」

健一は何回かアクセスしようとしたが、ファイアウォールから「侵入警告」のメッセージが出るだけで、内部に侵入することは出来なかった。

「こりゃ、鉄壁だな」

「でしょう？」

「侵入できるのは芽衣だけじゃないか？」

「そんなことないでしょうけど、いつかは破られるわよ」

「おいおいそんな事言うなよ」

「だって、そのために人間の管理者がいるんだから」

「ほう。お前もいい事言うようになったな」

「ちょっとは進歩した？」

「俺のにらんだとおりだ。芽衣には素質がある。来年が楽しみだ」

「あ、かえって勉強しなくちゃ」

「俺が何とかしてやるよ」

「駄目、自分の力で入りたいの！」

シミュレータの手直しは芽衣の手際の良さも手伝って、思ったより早く終わった。プログラムリストは担当の大学院生に渡しておいた。一部改訂だが、大学院生も内容に舌を巻いていた。このプログラムを知っていても侵入は不可能だろうと、彼も言った。健一も芽衣も疲れていたのも、今日はこれで帰る事にした。

大学院生に帰る事を伝えて、二人で理学部棟を出てバス停に向かった。

「やっぱり、この研究室に来る気になっただろう」

「なんかお兄ちゃんにはめられた感じ。でも、いつまでも山本先生じゃないよね」

「ああ、先生は今年六十だから、あと五年か。後は田端先生が上がるのかな」

「じゃあ、もうちょっとCIAぽくなるのかな？」

「何だ、芽衣はCIA志望か？」

「違うけど、情報分析屋としては面白いじゃない。その方が」

「ふーん」

バスが来た。後ろの席が空いていたので、並んで腰掛ける。芽衣はまだカルティエの時計とリング、ダイヤのネックレスをしている、髪もアップにしたままだ。

帰宅すると案の定、母親にとがめられたが、健一のとりなしでいつも通り許された。

ハッカー侵入

6. ハッカー侵入

次の日、芽衣が登校すると理恵が泣きついてきた。状況を聞くと家のパソコンが壊れてしまったと言う。完全にフリーズしたまま、電源スイッチを押してもオフにならないらしかった。芽衣は外部からの侵入と言う予感がしたが、放課後、理恵のパソコンを見に行く事にした。

芽衣は中国の商社が気になったので、念のため、昼休みに大学にも電話してみた。

「あ、お兄ちゃん？」

「おお、芽衣か？ 何かあったか？」

「ちょっとシミュレータの通信履歴を調べてもらいたいの」

「急ぎか？」

「うん、昼休み中だから」

「悪い、今、工学部に来てるんだ。午後から戻るけど急いでるんなら田中君をつかってくれ」

「いいの？ わかった」

電話をかけなおす。段々学生をこき使う教官の気持ちがわかってきた芽衣である。

「はい、田中です」

「すみません、黒澤です」

「あ、芽衣さんですか？ うれしいな。掛けて貰えるなんて」

「すみません、ちょっと急ぎの用事で、……あの一、シミュレータの通信履歴を調べてもらえない？」

「はい、すぐに。……あ、一号ユニットに侵入を試みた痕跡があります」

「それで、対応はどうなってる？」

「はい、芽衣さんのプログラム通りです。いい線まで行ってますが、侵入は失敗、攻撃性防壁でダミーと本人に対し同じウイルスを返しています」

「どんなウイルス？」

「例の十種類のウイルスに似てますが、ちょっとだけパターンを変えています。相手をフリーズさせるものです」

「ダミーと、本人のIPアドレスは分かる？」

「はい、ダミーは国内プロバイダのユーザで都内からアクセス。本人は中国国内の商社ようです」

——まだ、諦めてなかったのか？

と芽衣は思った。

「で、現状はどうなってるの？」

「はい、どちらもフリーズしてるらしく、パケット監視からは消滅した状態です」

「あ、そう。わかったわ。どうも有り難う。中国の商社の件だけ田端先生に報告して」

「はい、分かりました」

これで、芽衣の方針は決まった。放課後、理恵と一緒に壊れたパソコンを復旧する事にした。

——全く何てことしてくれるのよ、わたしの友達のパソコンをダミーにするなんて！

午後からの授業が、やけに長く感じる。とは言うものの、最近ハマるようになってきた。来年の東都大受験を自力で乗り切りたいからだ。午後からの二限は選択科目になっている。国立理系志望なので、物理と地理を選択している。さっぱり訳が分からなかったが、理学部の大学院生に、やり方を習ってから、少しは受験生らしい点が取れるようになってきた。

「物理、特に力学は力の釣り合いがすべてです。作用する力を赤で、反作用を青で塗って見て下さい。バランスしてれば物体は静止してるけど、崩れると加速度が生じます。分かりますよね？ 力を質量で割ったものが加速度です。これを積分していくと速度と距離が算出されます。簡単な原理です」

などと、言っていた。さすが、計算機物理教室の学生だ。芽衣にも理解できた。高校の教師の説明は難しく、全然意味が分からないが、大学院生の説明は単純明快で分かりやすい。因みに数学は、健一から教わっている。

「高校で、出てくる定理は極、限られている。それを、どの定理を使って解くのか分からないように偽装するのが試験作成者の仕事だ。まずは何に関する問題なのか分析しなさい」

こちらの説明は、かえって深遠で分かりにくい。

長い二時間を過ごし授業が終わった。芽衣は理恵と一緒に帰った。理恵の家へ着くと、芽衣は早速パソコンの状態を見た。

「ね、完全に壊れてるでしょ？」

と、理恵は芽衣に訴えた。

「フリーズしてるだけだよ。直す直す」

「ほんと？」

「でも、データとかソフトとか消えちゃうけど、バックアップ取ってる？」

「データは、外付けハードディスクに入ってるけど、ソフトってパソコン買ったときに付いてたCD・ROMのこと？」

「そうそう」

理恵が、紙袋に入れた荷物を持ってきた。取扱説明書や保証書に混じって、リカバリーディスクがついていた。

「じゃあ、やるわよ」

「うん、お願い」

芽衣は、周辺機器の電源を切り接続ケーブルをはずした。パソコンの電源をコンセントを引き抜いて落とした。そして五秒ほどたったのを見計らって再度、コンセントを差し込んだ。

パソコンのスイッチを入れた。が、青い画面が出てきた。「不正終了のため、停止します」どうやら、システムが壊れてしまったようだ。

芽衣は、パソコンの起動をCD・ROMに切り替え、ファンクションキーを押しながら、電源を入れた。リカバリー画面が出てくる。ハードディスクを初期化し、プリインストールソフトをインストールした。後から買った、ワープロソフトや年賀状ソフトも忘れず、インストールする。

芽衣はふと、ウイルス対策ソフトが、プリインストールの古いものであるのに気づいた。

ウェルカム・ビールス二〇一〇、これじゃ古いと思った。一旦再起動し、インターネットに接続した。計算機センターにアクセスし、最新のウイルス対策ソフトをインストールした。ファイアウォールのレベルを高に設定する。周辺機器をつなぐ。デバイスドライバをインストール。再度、再起動。理恵のパソコンは蘇った。

「これで、元通りだよ」

「ほんとっ？ 芽衣ちゃんすごーい。ありがとー」

作業は簡単だが、パソコンの復旧にはやたら時間が掛かる。終わったころには七時になっていた。

理恵のお父さんが仕事から帰ってきた。理恵からパソコンを直してもらった事を聞く。

「黒澤さんいらっしゃい。いつもすみません、用事ばかり頼んで」

「いいえ、お友達ですから」

「ああそうだ、よかったらご飯をご一緒しませんか？」

「ありがとうございます。でも、遅くなる事言っておりませんし、受験勉強もありますので、今日は遠慮させてください」

「そうだったね。理恵はのんびりしてるけど、黒澤さんはこれから本番だからね」

このお父さんとは、話をしたかったが、まだ、仕事がある。早々に失礼した。

兄に電話する。

「はい、黒澤です」

「芽衣です。シミュレータの件なんだけど」

「ああ、中国の商社か？ 今、田端先生が情報収集に当たってる。芽衣もこっちに来るか？」

「うん、タクシー使っていい？」

「おお、予算はたっぷりあるから、観光バスでもいいぞ」

頼もしい事、いや、楽しい事を言ってくれる、と思った。近くの国道でタクシーを拾った。東都大学理学部の計算機センターまで指示する。二十分ほどで到着した。

健一の個室をのぞいたが、不在だった。また、どこかに行ってるかしらと、机の上を見るがメモも置いていない。研究室をのぞき、大学院生に声を掛けた。

「黒澤先生知らない？」

「あ、田端先生の部屋で会議をやってます」

「あ、そう、ありがとう」

まるで、指導教官気取りの芽衣であった。田端先生の部屋は健一の隣である。表札を確かめて、ノックした。

「どうぞ」

「こんにちは」

「ああ、君か。入りなさい」

と、山本教授。他に田端先生と兄の健一がいた。空いている椅子を持ってきて腰をかける。今回の中国の商社からのアクセスが、問題になっていた。結局侵入する事は出来ずに追い返したのだが、CIAの工作により諦めていたはずの事が起こったのだ。それで、田端准教授は、さらに情報収集に当たっていた。

「まず、くだんの商社ですが、北京のアメリカ大使館職員の情報によると、商社などではなく、おじいさんとおばあさんが二人でやっているただの雑貨屋だということです」

「その情報は間違いはないのですか？」

「はい、確かな筋からの情報です」

——それならホームページがないのも納得だった。

「その雑貨屋さんからどうしてハッキングなんてしたんですか？」

芽衣も口を挟む。

「現地の捜査員の調査によると、電話線に細工がしてあり、コンピュータ本体は別の場所につながれているということだった」

「と、いうことは、そのおじいさんとおばあさんは、この件は全く知らないわけですね」

「たぶん、ダミーにつながれている事すら気づいてないと思う。今日も通常通り商売をしていたそうさ」

山本教授が、口を挟んだ。

「じゃあ、その接続先はどこなのか気になりますね」

「しかし、NSA（米国国家安全保障局）でもなければ、電話回線の把握は困難です」

芽衣が、アイデアを出した。パケット監視システムで、昨日と今日で運転が変わっているところを、抽出したらわかるのではないかと提案した。

「それが、この雑貨屋じゃないの？」

「いえ、雑貨屋さんならパソコン一台止まるだけですが、こんな大胆な組織です。大型コンピュータの端末から操作したはずですが、そうすると、このウイルスによって、メインサーバーのカーネル（システムの中核部）が破壊され、全端末が止まっているはずですが。そんな機関を見つければいいんです。大型サーバーなら復旧に一日掛かると思います」

山本教授は言った。

「彼女のアイデアは適切だ。早速やってみよう」

黒澤の号令で、研究室の学生たちが集められた。

「各端末を使って、パケット監視システムを検索してくれ。昨日まで動いていて、今日大規模に消滅しているところがターゲットだ」

早速作業にかかりだした。検索といっても、電話回線のダイヤルアップでインターネットを使っている人まで、検索に掛かるので、昨日と今日の比較も楽ではない。

「たぶん、北京近辺だと思う」

と、ちょっとだけヒントを出す。

芽衣も調査に参加する。山勘でえいっと画面を移動すると、コンピュータが集中して配置されている箇所が見つかった。北京市内でもある。もしやと思い。現在の画面に時間をずらす。すると、これらのコンピュータは消滅してしまった。時間をさかのぼっていくと、消滅したのは、シミュレータに不正侵入が試みられてから十分後だった。

「お兄ちゃん、見つけたよー」

「また、芽衣か。目ざといな。よし、みんな作業終了！」

皆が、周りに集まってきた。

「田端先生、ここどこでしょう？」

「うーむ、私の資料にはないね。ちょっと聞いてみよう。その地図頂戴、芽衣ちゃん」

「USBメモリーに落とします」

それをもって、田端先生は自室へ戻って言った。電話をかけるらしい。携帯電話じゃ駄目なのかな？ と芽衣は思った。相手先はアメリカ大使館だった。

「田端先生って、CIAの人なの？」

「CIAではないが、防衛省は信用ないから、田端先生が個人的に付き合ってるんじゃないか？」

「さっき、言ってた北京の捜査員で、CIAエージェントのことでしょ？」

「多分、そうだろうね。でも、情報分析の限界を感じる事件だね。やはり、人間が歩いて情報収集するにはかなわない」

「そうだよ。この商社だって、その人が行くまでちゃんとした会社だと思ってたもん。まさか、単なる雑貨屋さんだったなんて、思いもしなかったわ」

二十分ほどして、田端先生は戻ってきた。

「マッケイ氏の情報だと、人民解放軍のサイバー攻撃部隊の本拠地だとらんでいた場所らしい。今回証拠が挙がったんで、確定できたと言っていた。後、衛星画像とも照合するらしいが、ほぼ間違いないだろう」

「でも、彼らは、サイバーテロを諦めたんじゃないんですか？」

「いや、彼らが潜水艦配備図と上陸地点の情報を盗まれて今回の上陸作戦が頓挫したんだ。あの情報をCIAのマッケイ氏が突きつけたときの奴らの顔は、普通じゃなかったそう。それでサイバー攻撃部隊の責任者の首が飛んだ。それ以来、こちらに対する報復の機会をうかがっていた、と言うのがマッケイ氏の見解だ」

「全くはた迷惑な連中ね。わたしの友達がダミーに使われてパソコンがフリーズしちゃったの」

「でも、報復ならそれこそ力攻めにするんじゃないですか？」

「いや、米中秘密協議で人民解放軍は動けない。サイバー部隊の個人的報復だ」

「こっちから、先制攻撃するのはどうかしら」

「それはいかん、わが国は専守防衛だ」

「まあ、その対策を考えよう。要は、その機関をつぶしてしまえばいいんだから」

「後は、私とマッケイ氏とで、善後策を考える。また、プログラムでは芽衣ちゃんの世話になるかもしれないけど、よろしくね」

田端准教授にしては、珍しい事を言うと、思った。まずは今回の事は、一件落着と考
えていいのだろう。早く帰って、受験勉強しなくちゃと思った。帰りのタクシーの中で
芽衣は健一に自分のプランを述べた。

「サイバー部隊が中央政府を転覆させるという文書を作って、中央政府にリークさせたら
どうかしら？ 同時にサイバー部隊の端末の一部に、中央政府のサーバーに侵入した痕
跡と、送信用のウイルスを仕込んでおくの。そうすれば、サイバー部隊のメンバーが失
脚するんじゃないかしら」

「芽衣は恐ろしい事を平気で言うね。あの国でそんなことしたら銃殺刑だぜ」

「それもかわいそうね。じゃあ、転覆の件だけは辞めておいたら」

「それなら、更迭くらいですむかな。何にしても、現地の状況は北京支局の捜査員しか知
らないんだ。田端先生に任せてちょっと様子を見よう」

「まあ、いいか。どうせ、完全復旧には一週間以上掛かるはずだから」

家に帰った後、健一は芽衣のプランを田端准教授にメール送信していた。

芽衣は、母親に最近帰りが遅い事を、とがめられた。大学で、勉強を教わっていると
言い訳したが、芽衣は兄と違ってあまり信用されていない。悔しいが、中堅高の落ちこ
ぼれ生徒なんだから、ある程度の不利はやむを得ない。何としてでも東都大に入ってや
る、と思った。でも、確かにこの間から、服もちょっと派手になったし、口紅も買った
し、腕時計はカルティエだし、親が心配する要素は多いと思った。

次の日、登校すると理恵がうれしそうな顔でやって来た。

「実はね、おとといパソコンがおかしくなって、お父さんと悪戦苦闘してたの。それで芽
衣ちゃんに泣きついたんだけど」

「ああ、気にしないで朝飯前だから」

「ううん、お父さんも昨日、元通りになったパソコンを見て、芽衣ちゃんの事ほめてた
の。で、今度の週末、お礼って言うほどのものじゃないんだけど、一緒に食事しません
かって」

「お父様が？ なら、もう一度お話したいと思ってたんだ。喜んで」

「ほんと？ ありがとー」

放課後、金魚にえさをやっている時、裕子が入ってきた。

「最近どうよ？」

「あ、試験勉強ならやってるよ」

「そう、なんかあんたのお兄さん人使いが荒くて心配してるの」
「どうもご親切に。でも、確かに大学の仕事が増えたなー」
「でしょ。あんた断りきれないでしょ」
「いや、そんな訳じゃないよ。自分がやんなきゃって思うだけ」
「そんなに重要？」
「わかんないよ」
「まあ、適当にやんなさいよ」
「うん、ありがとう。でも裕子は大丈夫なの？ 裕子の進学のための貯金ぐらいあるってお母さんがおっしゃってたけど」
「確かに、あたしが進学をあきらめたらお父さんも悲しむと思う。でも、もしお父さんが死んじゃったら、……心の整理なんて簡単に付かないよ」

あまり人の事に干渉する性質ではないのに、今日は違っていた。結構いいやつかもしれない、と思った。高校での芽衣の交際範囲は極めて狭い。裕子が唯一、中学から付き合い合っている友人だ。他にはいない。電力テロの問題がなければ、理恵と付き合うこともなかっただろう。だからこそ、裕子の悲しそうな目を見る度に、電力テロだけは絶対に阻止する気であった。

週末、理恵との約束どおり食事に招かれた。青山にあるフレンチレストランらしい。ちょっとおしゃれる事にした。紺のワンピースを選び、ネックレスをし髪をアップにして、口紅だけが化粧もした。鏡を見ると、ネックレスのダイヤがいやに大きい。ちょっと下品かなと思って、ダイヤを外し、宝石箱にしまった。プラチナの鎖だけだが、これでいいやと決定。

待ち合わせ場所に、時間通りに行くと、もう待っていた。
「うわー、芽衣ちゃんすごくきれい。私もお化粧してきたらよかった」
「てれるなー。理恵ちゃんもOLになれば、きれいになるよ」
「いや、女の子は化粧すると見違えるね」
「今日は、お招きいただきありがとうございます」
「いえ、今回はいろいろお世話になって、こちらこそありがとう」

理恵のお父さんの案内で、レストランに入った。結構おしゃれるな雰囲気、素敵な店だ。

「ねえ、そのバッグかっこいいけど、どこの？」
「ああこれ、お兄ちゃんに買ってもらったんだけど、どこだろう？」

エルメスだとは言えなかった。

お父さんが芽衣に話しかけた。

「そういえば、お兄さんは東都大の先生でしたね」

「はい」

「今はどんな研究をされてるんですか？」

「そうですね、ネットワークが主なんですが、ファイアウォールや、送電網最適化アルゴリズムの実証シミュレーションなんかをやってるみたいです」

シミュレータの存在には触れなかった。

「えらく、詳しいね。研究室にも出入りしてるんですか？」

「時々、忘れ物を届けたりする程度です」

「へえ、そうとは思えないけどね」

「まあ、ちょっとは仕事を手伝ったりしてます。それで、このバッグなんかを買ってもらったんです」

「はっはっは、面白い人だな」

「いやどうも済みません」

ソムリエが、ワインリストを持ってきた。お父さんはグラスワインだけ頼んだ。未成年者二人とでは、ボトルは空けられないだろう。芽衣達は、フルーツジュースにした。

しばらくして、ギャルソンが来たので、お父さんがランチコースを三つ頼んだ。

「ところで、黒澤さん。大学卒業後の進路は考えてるの？」

「え、いいえ、まだ合格の目処もたってないので」

「ふーん、黒澤さんさえよければ、関東電力はどうかな」

「え、わたしがですか？ 多分何のお役にも立たないかと思いますが」

「いや、そんな事はないでしょう。実は、理恵だけだと心配で、それであなたが付いていてくれれば安心なんです」

「いや、そんなに買いかぶらないで下さい。ただの落ちこぼれ生徒なんですから」

「これからは、コンピュータの時代です。あなたのような人材が世の中を変えていくんです。そう期待しています」

えらく見込まれてしまった。何でだろう。出てくる料理を食べながら、将来の事を想像した。兄の助手になってしまえば、CIAの工作人員のような毎日が待っていそうな気がする。それもいいが、関東電力なら結構優雅に過ごせるんじゃないか？ ふと重役秘書の女性や受付のお姉さんを思い浮かべた。

食事後、コーヒーを飲みながら、お父さんから会社に入った頃の話の話を伺った。昔は発電所といえば石炭焚きボイラーが中心だったそう。それが重油になり、オイルショックを経て、再び石炭に。そして今、二酸化炭素問題で火力発電はやり玉に上がっている。と寂しそうに語った。今、お父さんが所長をしている千葉発電所は天然ガスを使ったガスタービン発電所らしい。排気ガスももう一度熱交換器に通し、熱を回収し発電にまわすので効率は高い。

色々話を聞いて、店を出た。

「じゃあ、わたしは用事があるのでここで失礼します。理恵をよろしく」

「今日は、ご馳走様でした。ありがとうございました。失礼します」

お父さんと別れた後、芽衣と理恵は買い物に出かけた。理恵も化粧品が欲しいらしい。

今日は土曜日なので、街はどこも人であふれている。
「ねえ、芽衣ちゃんはどこ化粧品つかってるの？」
「えー、化粧ったって、口紅だけだよ。あとなーんももってないし」
「口紅かわいいじゃない」
「そう？ 実は大学生協の売店で買ったの、貴生堂のピンクの薄い色のやつ」
「へえー、大学でも売ってるんだ。すごいんだね。私も貴生堂にしよ」

デパートの化粧品売り場に行った。何人か、店の人に相談して化粧してもらっている。二人で貴生堂のブースに行った。

「いらっしゃいませ」
「あの一、わたしに合う口紅探してるんですが」
「どのようなイメージになさいますか」
「あ、彼女みたいな」

芽衣を指して言った。いいのかなと思った。店員は、ピンク系の色の中から彼女の肌に合う色を選んでくれた。付けてくれるというので、お願いした。筆の先にちょっとだけつけて、理恵の唇に塗っていく。これだけで、随分大人びた感じになった。芽衣は、女の子って化粧するだけで変わるもんだなど、自分の事は棚に上げて、思った。

「芽衣ちゃんどう？」
「いや、すごく大人に見える」
「そう？」

うれしそうだった。ついでに、メイク落としも買っといたほうがいいよと、忠告しておいた。後、バッグも欲しいと言っていたが、さすがに高校生に買える物で、いいのはなかった。理恵は芽衣のバッグをうらやましがっていたが、エルメスだとは最後まで言えなかった。

でも、兄は何であの時、気前よく買ってくれたんだろうと芽衣はいぶかしんだ。あの時健一が使っていたカードを思い出した。コーポレートカードだ！ なんだ、研究室の予算を使ったんだ。予算が余っていると言っていたが、二十億もあればあんなシミュレータを組んだ位では、使い切れないだろう。それも困るはずだ。なるほど、……もって買ってもらおう、といけないことを企んだ。

この後、喫茶店でお茶した。理恵はつけたばかりの口紅を気にしたが。
「大丈夫だよ。ちょっとくらいじゃ落ちないから」
「そうなんだ」

あと、高校生活の愚痴を言い合い、お互いのばら色？ の未来について、想像している事を語り合った。理恵は理想的なOL生活を夢見ている。昼間仕事をし、アフターファイブも充実したものにする。芽衣は大学でのんびり講義をうけながら、サークル活動を楽しむ。

「ばら色の未来にカンパーイ」と紅茶で乾杯した。

帰りはバスだ。途中の停留所で別れた。

帰宅後、芽衣は一日遅れた分を取り戻すべく問題集に取り組む。分かるようになって

からは、問題を解くのも苦にならなくなってきた。その点、東都大の学生に勉強を教わった効果が出たようだ。

反擊開始

7. 反撃開始

次の日は日曜日、のんびり起きると携帯電話にメールが入っていた。健一からで、「芽衣の提案採用。起床次第来られたし。タクシー可」と入っていた。

芽衣は混乱していた。

——私の提案って何だっけ？ 色々ありすぎて覚えていられない。

お腹が空いていたので、芽衣は朝食のトーストをほおぼり、着替えた。今日はジーンズにTシャツにパーカーという、ボーイッシュないでたち。もちろんすっぴん。これが一番芽衣らしい。時計もGショックにした。ぶつけても気にならないのがいい。

タクシーといていたが、バスで行った。昼間でも本数が多いので、時間はあんまり変わらない。

理学部前で降りて、健一の部屋へ向かった。

「お兄ちゃん、来たよー」

「お、早いな。実はな、お前の提案が採用された」

話を聞いてみると、

「サイバー攻撃部隊が、中央政府を転覆するという文書を作って、リークさせる。同時に、サイバー攻撃部隊の端末に、中央政府のサーバーに侵入した痕跡と送信用のウイルスを入れておく」

という、芽衣の作戦について、北京のアメリカ大使館でも検討した結果、現在の政治情勢から犯人が銃殺される可能性は、不満分子の暴動を誘発する恐れがあるので、かなり低い。サイバー攻撃部隊のメンバーを更迭するには非常に効果的である。という結論になった。

「それで、文面は田端先生が書いて、現代中国語学科に持って行って翻訳中だ。それで、芽衣の観点から、ちょっと作業を見て欲しいんだ」

「何で、わたしなの？」

「いま、わが研究室のナンバーワン・エージェントだからな。いわばジェームズ・ボンドだ」

「もう、何考えてるのよ」

「頼むから、ちょっと見てきて」

「了解。でも、現代中国語学科ってどこにあるの？」

「田中君に案内させよう」

二人で研究室をのぞいた。

「あ、田中君。ちょっといいか？」

「はい、先生」

「こいつを、現代中国語学科の研究室に連れて行って、また連れ帰ってもらいたいんだ」

「はい、わかりました」

二人で、文学部棟に向かった。途中、テニス部らしい学生とすれ違った。

「おはようございます！」

大声で、最敬礼の挨拶をした。

「うわ、今の人って何者？」

「びっくりさせて済みません。硬式テニス部の後輩です」

「えー、田中君、硬式テニス部なの？」

「はい、高校のときからやっています。体育会系は一年が奴隷で、四年は天皇と言われてるんですが、研究室では四年は二等兵です。すごいギャップがありました」

「へえー、そうなんだ」

改めて、田中君を見ると、長い間研究室にこもっているの肌白くなったが、太い眉と高い鼻。白い歯もかっこいい。それに、体格もよく背も高い。よく考えれば、東都大理学部の四年生で、硬式テニス部でかっこいいと来ると、本来なら、落ちこぼれ高校生の芽衣など相手にされない様な人である。そう考えると自虐的になってしまうが、いまさら田中さんと呼ぶのも変だ。

「芽衣さんどうかしましたか？」

「え、いいえ」

「いや、急に無口になられたんで」

「いや、田中君、東都大生でテニス部員なら、すぐくもてるんじゃないかな、なんて」

「そんなことないですよ。芽衣さんこそすごいんじゃないですか？ 美人で頭もよくて」

「いやー、わたし男子の友達いないんですよ」

「そんな、信じられません」

「ほんと、ほんと」

そうしているうちに、文学部棟に到着、中に入り階段を上がる。看板が出ているので、ノックして研究室に入る。田中君が声を掛ける。

「あのー理学部の計算機物理のものですが」

「はい、わたしです。早川といいます」

分厚いめがねをかけた男が出てきた。健一は文学部の人間は本の中に住んでいる虫を食べて生活していると冗談を言っていたが、この人を見ると本当のような気がする。

「計算機センターの黒澤です。作業を見る様に言われてきました」

「そうですか。一応翻訳は終わったんですが、今プリントします」

「ちょっと、原文を見せてもらえますか？」

「はい、これです」

田端准教授の作成した原稿だ。

「作戦計画書

サイバー攻撃部隊は、共産党本部を制圧するため、偽の命令を発信し人民解放軍を動員し、党本部を占拠する。その後、人民大会を開催し強行採決を持って政権を篡奪する。

この目的を達成するため、

- 一、党中央本部のサーバーをウイルス攻撃しダウンさせる。
- 二、全国の通信網を麻痺させる。
- 三、強行採決を実行するために投票プログラムを改ざんする。

作戦成功後は、部隊長が国家主席となり政権を運営する。以上」

相変わらず、硬い文章だと芽衣は思った。

——軍人ってこんなものなのかしら？

「早川さん、人民解放軍の文書って見た事ありますか？」

「はい、田端先生が入手したのを翻訳した事があります」

「こんな硬い文章？」

「うーん、書き手によって様々ですから。でも決起文なら、硬いほうがリアルです」

「じゃあ、翻訳文を見せてください」

簡体字で、よく分からない。

「サイバーはどう訳したんですか？」

「適訳がないので電網としました」

「ダウンは？」

「下降です」

「ウイルス攻撃は？」

「病毒攻撃としました、攻撃の撃は簡体字です」

まあ、そんなものか。しかし、こんなものを受け取ったところで、どう思うだろう。ちょっと臭いような気がした。善意の人なら、サイバー攻撃部隊を陥れようとするものだと思っちゃうよと思った。

——そうよ、何かに偽装してばれたらいいんだわ。

芽衣は早川助教に、リクエストした。

「あの一、もう一枚作ってもらえませんか？」

「はい、いいですよ」

「部隊のメンバー十人の日勤表を、作ってください」

「どんな風な？」

「えっと、上に当番表として、横に工作人員一から十まで書いて、その横に月曜から日曜まで表を作って、誰が、何曜日の当番か丸を入れてください。適当でいいです」

「はい、えーと、できましたが、こんなのでいいですか？」

「はい、上出来です」

「何に使うんですか？」

「決起文だけだと、信用されない可能性があるんで、この日勤表で偽装するんです。解読に成功して、決起文が見つかる間違いなく信用されます」

「なるほど、頭いいですね。さすが理学部だ」

「じゃあ、どうも有り難うございました」

「こちらこそ有難うございました」

——予算もらったのかな？

帰り道、田中君は感心して言った。
「さすが芽衣さん、すごいアイデアですね。田端先生以上の戦略家だ」
「冷やかさないでよ」
「いや、もし僕がこの資料を取りに行つてこいと言われたら、表現の確認や偽装工作もなしに受け取って帰ったと思います」
「田中君、それじゃがきの使いだよー」
「面目ないです」
二人仲良く、健一の部屋へ帰ってきた。
「どうだった」
「うん、作戦計画書だけだとちょっと臭いで、ダミーの日勤表を作ってもらっちゃった」
「どういうこと」
「あまりに話が出来すぎなんで、善意の人が見ると、サイバー攻撃部隊を陥れるためのわなと受け取られる可能性があるの。で、偽装ファイルにする事にして、ダミーは普通の日勤表にしたの。解読してばれたんなら、まず信用するでしょう？」
「お前もすっかり悪人になったな」
「何よ」

健一の端末で偽装ファイルを中国製USBメモリーに保存し、それを田端准教授に届けた。後は、彼がアメリカ大使館に届け、北京の工作人員からしかるべき筋に配布する段取りは付いている。芽衣の仕事は、作戦計画にあった攻撃用ウイルスと投票プログラムをつくって部隊の端末のひとつに残すことだった。これには、大学の端末は不都合だった。万が一脚が付いたときに、日本側の関与が疑われる。これでは逆効果だ。健一は街のインターネットカフェを何軒か経由させることにした。

「芽衣、田中を連れて、学生街のインターネットカフェへ行け。必ず何箇所か経由してハッキングしろ」
「プログラムはUSBメモリーに入ってるんだから、どこだっていいじゃない」
「デートさせてやろうって言ってるんだよ」
「うそばかり」
「学生街のネットカフェはちょっと危険だからな」

田中君とデートになってしまった。彼はうれしそうだ。芽衣はちょっと憂鬱。大学四年だから十八歳の芽衣より四つ年上である。東都大生だし、テニス部でかっこいいし彼氏には申し分ないのだが、芽衣は落ちこぼれ高校生だ普通ならつりあわない。

途中の喫茶店で、お茶に誘われたが、芽衣は作業を優先した。近くのインターネットカフェに入る。こんなところに来るのははじめてだ。会員証を作る事を求められる。これは、田中君がやってくれた。

「へえー、田中君、運転免許持ってるんだ」
「はい、メカが好きで、十八歳になった日に試験場に行ったんです。大型二輪ももってま

すよ」

ますます、かっこいいと思った。芽衣はあいているパソコンに座った。田中君はガードするように後ろに立ち芽衣を守っているように見える。ちょっと感動した。

「さて、作業開始」とつぶやいた。

まず、都内の日本語学校へ侵入、そこのコンピュータをリモート状態に置く。そこから、ベトナムの図書館へアクセス。変な文字が出てきたが、関係ないので英語に変換、意味は通じないがパスワードを抜くのには関係ない。侵入完了、ここもリモート状態に置く。次にシンガポールの商社へ侵入した。

「このくらいでいいか。どう思う？」

「はい、三箇所も経由すれば、普通は十分ですが」

「ここいれて、四箇所だよ。田中君が十分ならもう一個行っとく？」

北京市内のネットカフェに侵入、これで、舞台装置は完成。

次に、各リモートアクセスを経由して、サイバー攻撃部隊のサーバーに侵入を試みた。勘のいい芽衣は、ファイアウォールがある事を予測していた。

「芽衣さん、何で、ファイアウォールに気づいたんですか？」

「だって、ここのサーバー、この間うちの、シミュレータの攻撃性防壁に攻撃されたばかりでしょ。対策講じてなかったら、サイバー部隊を名乗る資格はないよ」

「そうでした。恥ずかしいです」

「じゃあ、侵入開始」

もってきたUSBメモリーを挿入し、ファイルの中からアクセス偽装ソフトをインストールし起動する、これでファイアウォールはこの侵入を正規アクセスと認識する。次にパスワードを要求してきた。この規模だと八文字以上だろうな。システム管理者のID番号を組み合わせる。だが、アクセスを拒否された。芽衣はパスワード解析ソフトを起動し総当たり方式でパスワードを抜いた。

「もう侵入したんですか？」

「そうよん」

「端末が、十四台ある」

「どれがいいかな」

「一番目から検査するだろうから、三番目くらいが自然じゃないですか？」

「それ採用」

芽衣は三番目の端末に、用意してきた共産党本部攻撃用ウイルス、通信網かく乱ウイルス、投票システム改ざんソフトをフォルダに追加し、見えなくなるよう設定した。これ見よがしにこんなファイルを保存する人はいない。しかし、プロが見ればすぐ分かるものだ。

次にワープロソフトを起動し、例の決起文を保存した。最後に、ここから、党本部のサーバーに侵入し、形跡だけ残して何もせずに撤収、これは三分で終了した。

「ふー、やっと終わった」

「肩でも揉みましょうか？」

「えっち」

「そ、そんな意味では、ありません」

「冗談よ」

これからもう一仕事、作業に使ったパソコンを現状復帰していかなければならない。

「経由先、全部メモして、黒澤先生に報告しといてね」

「はい、わかりました。これだけ飛ばすと、どこからのアクセスか分かりませんね」

「でも、うちだったら分かるじゃん」

「そうですね。だから、ここで作業したんですよ」

「じゃあ、戻りましょ」

帰りは、芽衣からお茶に誘った。田中君はうれしそうだった。

「いやあ、いつもながら芽衣さんの手際のよさには感服しています」

「まあ、黒澤先生もそのためだけにわたしを使ってるんだから」

「芽衣さん、随分屈折してるんですね」

「そう思う？」

「何か、心の奥で引っかかっているような、物の言い方ですから」

「さすが情報分析屋だね」

「そんなんじゃないです。芽衣さんの事が気になってしょうがないんです」

「ありがと」

ウェイトレスが来たので、コーヒーを二つ頼んだ。

「ねえ、田中君。英語の参考書でさあ。分からない単語が出てきても前後の文章から推察せよ。というのがあるよね」

「そうですね」

「でも、主語も知らない、述語も知らない場合、推察なんて出来ないこともあるの」

「うーん、こんな方法が正しいかどうか、今も自信がないんですが、僕が受験のときに使った方法で、こういうのがあります。意味の取れない英文について、要点を述べよ。といわれたとき、こちら意味不明の日本語訳を書くんです。例えばですが、……『生命というのは過去から未来へと永遠に進歩し続けるものであるが、個体の生命は有限であり未来性までも必ずしも保証されたものでない。従って、過去から未来への生命の伝承は、個体ではなしえない。つまり、生命の系として考えたときのみ成り立つ、理論なのである』ってな具合です」

「ふーん、今の言葉、ちょっと感動した。意味わかんないけど」

「芽衣さんにそうっていただけるとうれしいです」

「じゃあ何、東都大生でもあの英語、百パーセント理解できるわけじゃないの？」

「他の人は、どうか知りませんが、僕は七十パーセントくらいの単語しか覚えていませんでした」

「ふーん、田中君で七十か。わたしだったら、三十くらいかな」

「今度から始まるリスニングはどうなんですか？」

「ああ、一年のときに交換留学生の友達がいたから、会話は出来るよ」

「あ、会話とリスニングは違うものですよ。会話は聞き返したり、他の質問に切り替えたりできますが、リスニングは一回流れておしまいですから」

「えー、そうなの？」

コーヒーが来た。

「急にボキャブラリを増やす方法はない？」

「急といっても三ヶ月以上あるじゃないですか？ 英語の本を一冊丸暗記するのもいいし、英語講座シリーズの連鎖式暗記法という本なんかもお勧めです。でも、ヘミングウェイの『老人と海』くらいなら短いし、文章のセンスもいいし暗記するなら、ヘミングウェイがお勧めです。後、研究室でやってる論文の輪講会に参加するのもいいかと思います」

「ありがと。その英語講座シリーズっていうの買って見る。売店にあるかしら？」

「高校向けの参考書は扱ってないと思います。これから近所の本屋で探しましょうか？」

「そうだよ。じゃあつきあってくれる？」

「はい。喜んで」

二人は近所の本屋へ入り、英語講座シリーズの「英単語連鎖式暗記法」と言うのを買った。

帰り道、二人で並んで歩くと、本当に彼氏だったらいいな、と、芽衣は妄想を抱いた。ふとした弾みに彼の腕に触れると、そこだけ熱くなったような気がした。

「あ、あの、……」

「何ですか？」という田中の声も少し高くなっていた。

「え、いや」

でも、芽衣は言い出せなかった。研究室の人の噂では、テニス部のマネージャーの女子と仲がいいらしかった。芽衣は少し焦りを覚えていた。

用事が済むと大学へ戻った。兄が待っていた。

「おう、ご苦労さん。どんな按配？」

田中君が答えた。

「まず、学生街のネットカフェから、都内の日本語学校、ベトナムの公立図書館、シンガポールの商社、北京市内のネットカフェ、そこからサイバー部隊の十四あるうちの三号端末に侵入、党本部へのアクセスも行いました。証拠を残さず撤収完了です」

「ふーん、中国のエージェントの介在を想像させるところばかり選んだな。まあ、いいだろう。田端先生に報告しとく」

「でも、肝心のUSBメモリーはどうするの？」

「それは、CIAのスタッフが動いてくれるんじゃないか？ どうやるのかは知らないけど」

内線電話が掛かってきた。田端准教授からである。健一は芽衣たちがハッキングに成功した事を告げた。田端准教授の話では大使館のマッケイ氏にUSBメモリーを手渡したそうである。工作はこれから始まるので、数日以内に決着するだろうと言うことだった。

しばらくは、芽衣にも平穏な日々が送れた。健一からの電話もないせいで。結構ボケッと授業を受ける振りをして、問題集をこつこつ解いている。もうすぐクリスマスだが、今年だけは関係ない。就職の決まっている理恵だけが例外的に、楽しそうである。

何回か、東都大理系模試を受けたが、最近ようやくC判定くらいは取れるようになって来た。喜んで見たものの、A判定でなければ意味がない。

四日ほどして昼休みに芽衣の携帯電話に、健一から電話が掛かってきた。

「今いいか？」

「お昼休みなんですけど」

「この間の作戦が終わったらしい。今日、その報告に大使館の高官が来るらしいんだ。それで、そのミーティングにお前も出てくれないか？」

「お兄ちゃんじゃ駄目なの？」

「向こうじゃ、芽衣の事を高く評価している。ぜひとも会いたいらしい」

「どーしよっかなー」

「そんな事言わずに頼むよ」

「お兄ちゃんも出るんでしょ？」

「いや、出られない。教授と防衛省一佐の准教授だけだ。やっぱり身分と言うのがあからな」

「じゃあ、わたしみたいな落ちこぼれ女子高生なんて、お呼びじゃないんじゃない？」

「芽衣は別だ。今回の作戦の作戦将校として扱われている」

「ほんじゃ、今回だけよ」

「悪いな。それから、黒のスーツみたいなので、出席してくれ」

「もってないよ」

「それじゃ、田中君に頼もうか、放課後銀座までひとっ走りして調達してくれ。彼にカードを渡しておくんで、好きなの買ってくれ。美容院も忘れずに」

「はーい」

授業が終わって、金魚にえさをやると急いで学校を出た。校門の前で田中君がタクシーで待っていた。

「あ、芽衣さん、お待ちしてました」

「えー、ずっと待ってくれてたの？」

「いえ、終わる時間を黒澤先生から聞いておりましたから。さあ、急ぎましょう」

タクシーは走り出した。芽衣は田中君に話しかけた。

「田中君、クリスマスはどうするの？」

——大学生って楽しいんだろうな、と想像した。

「卒論の下書きの提出期限なんです。多分、研究室で徹夜していると思います」

「あら、結構大変なんだ」

「でも、芽衣さんが研究を手伝ってくれたおかげで、すごく楽になりましたから」

「まあ、そういわれると助かるな」

「卒業後は、どうするの？」

「大学院の前期課程に進みます」

「へえー、すごーい」

「いえ、芽衣さんに比べればレベルの低い話です」

「そんなことないよー」

「でも、学位をとったら、アメリカの大学に行こうかと思ってます」

「えー、なんか目標あるの？」

「スタッドフォード大か、MITの研究所で最先端科学に触れたいんです」

「ふーん、何かさびしくなっちゃうね」

少し間をおいて、ボソッと言った。

「でも、芽衣さんが止めるなら、東京にとどまります」

え、これって、告白ってやつ？ 芽衣はかなり戸惑った。今まで経験のない世界だ。

なぜか涙が出てきた。確かに田中君が彼氏ならいいな、と思っていたのは事実だ。しかし、あまりにつりあわないと諦めていた。どういったのか分からない。

「芽衣さんごめんなさい。突然こんなこと言ったりして」

「……いいえ、でも、わたしと田中君じゃ全然つりあわないから」

二人とも無言になってしまった。

銀座界限に入った。

「あ、この辺で止めてください」

「はい」

芽衣が先頭に立ち、この間のブティックに入った。店員に大使館でミーティングだと告げ、紺のビジネススーツを選んでもらった。これにあわせて、ブラウスとネックレスを合わせてもらう。次にバッグだ。前はエルメスだったのだが、今回はデザインで選んだ。ちょっと大き目のノートパソコンの入るやつにした。

時計は前に買ったカルティエをしているのでOK。後、靴とノートパソコンを買ってもらい、美容室へ行った。今回は髪をいじらず、化粧だけ、前髪を少しだけそろえ、すそが広がっているのをワックスでまとめてもらった。以上で、準備OK。

「準備は出来たよ。今日はどこであるの？」

「アメリカ大使館内です。前までお送りします」

また、タクシーを拾い、大使館まで芽衣を送り届けた。かれが、守衛所で英語で説明している。タクシーごと建物の前に通された。教授たちはまだのようだ。田中君は中に入れないので、一旦大学に戻るらしい。芽衣だけ応接室に通された。ひとりの紳士が入ってきた。背広の襟に、星条旗のマークが入っている。国務省の高官だ。

「ハロー、マイネーム イズ メイ・クロサワ ハウ ドゥユドゥー」

芽衣から先に挨拶した。たどたどしい英語だった。

「こんにちは、芽衣さん。日本語で大丈夫です。国務省参事官のジョン・マッケイといいます。このたびは一連の作戦立案ご苦労様でした」

「失礼ですが、マッケイさんはCIAの方ではないのですか？」

「ははは、ご冗談を。わたしは国務省の一官僚に過ぎません」

「じゃあ、今回の作戦にあたったエージェントと言うのはマッケイさんではないのですか？」

「わたしは、国務省の役人に過ぎません。CIAの現地エージェントがやったはずですよ」

——うそをついているな？

「でも、サイバー攻撃部隊の本拠地を衛星で監視していたのではないですか？ 二時間おきの画像をファイルしているはずですよ。それに、USBメモリーを渡してから解読に三日間もかかるんで、現地に何度も機《げき》を飛ばしていらしたでしょう」

「よくご存知ですね」

じろりとにらまれた。確かにこの世界の人だと確信した。

「確かに、日本側の作戦責任者はわたしでした。しかし、想像以上の効果を挙げた」

マッケイ氏は渋面で答えた。

「どういう意味ですか？」

「以前から、わが国にとってあの施設は厄介な存在でした。しかし、手は出せなかった。それが、政府転覆の汚名を着せられて、メンバーはコンピュータもない田舎の役人に左遷させられたんです。もう一度あの組織を作るには、五年以上の歳月がかかるでしょう。その間われわれにはアドバンテージが与えられる。また、当初計画ではあの政府転覆計画を党本部に信用させるため、相手のエージェントにあのUSBメモリーを一万ドルで売りました。高いほど信用性があるからです。偽装ファイルにしたのもいいアイデアでした」

「そこまでは、予定通りですよ」

「そう、彼らは人民解放軍二百人を動員してサイバー攻撃部隊を強襲し、全員を拘束しました。しかし、疑問に思うのは、実際の証拠はないんですから、大胆な処分は出来ないはずなのに、彼らが更迭されたことです」

「実は、わたしが、サイバー攻撃部隊の端末に侵入して、本部攻撃のツールをおいてきたんです。それが証拠になったんだと思います」

「え、あそこに侵入できたんですか？」

「ええ、割と簡単でした。田端先生の文章にあるものすべて置いてきましたから」

「投票改ざんツールと言うのがありましたが、どんなものですか？」

「電子投票の結果を改ざんして常に過半数を維持するものです」

「それもらえませんか？」

「はあ？ 別にいいですけど」

——何に使うんだろ？

芽衣は、持って来たノートパソコンから、計算機センターにアクセスし、自分のプログラムフォルダからダウンロードした。USBメモリーに落として、マッケイ氏に手渡す。「それでは、この作戦の成功の真の功労者は芽衣さんということになりそうですね」

「そうなんですか？」

「ハッキングがなければ、連中が左遷されることもなかったわけですから」

「あのUSBメモリーの代金一万ドルは、あなたのものになりそうですが、どうなさいますか？」

「赤十字に寄付してください」

——そんなのうけとれないよ。

教授たちが遅れて到着した。マッケイ氏も挨拶に向かう。隣の会議室ではフランス料理の準備がなされていた。共同オペレーションの成功を祝う晩餐会であった。

晩餐会には、大使も参加した。確かに助教では出席しにくかっただろう、と思った。

田端准教授は、マッケイ氏からカーネル・田端と呼ばれ、田端准教授もまた、マッケイ氏の事をカーネルと呼んでいた。芽衣が聞いてみると元海軍大佐で、今は国務省らしい。しかし、現地のCIAエージェントをあごで使うところをみると、CIA作戦部のケースオフィサーの様に思える。よく分からない世界だ。

芽衣はワインは飲めなかったが、大使と話は出来た。このたびのサイバーテロの一件に対処するためシミュレータを構築した事、ファイアウォールに攻撃性防壁という強力な防御ツールを組み込んだ事。など、一連の作業を紹介した。

大使と、マッケイ氏は何か話していたが、どうやら、芽衣をスカウトする話のようだった。CIAでも、必要な人材らしい。しかし、教授が間に入り、まだ学業途中の身である事を説明し、丁重に断った。しかし、学位取得後アメリカの大学に留学する事を熱心に勧められた。

芽衣は思う。成績なら自分より頭のいい人がごまんという。こんなことで、評価されてちやほやされても、後になって裸の王様である事に気づかれて、落とされる事がこわい。

パーティーが終わってから、大学関係者は丁重に挨拶して、帰った。タクシーの中で、教授が言った。

「芽衣ちゃん、今回はご苦労だったね。まさかアメリカ大使館から感謝状をもらうなんて思わなかったよ」

「いえ、コンピュータをいじるだけ取り柄ですから」

「それが、大事なんだよ。一芸に秀でるとはそういうことだよ」

「そんなもんですか？」

「わしはそう思ってる。少なくとも君が、成績だけでその辺の私立大や短大に進むような事があつたら、日本にとって損失だと思っている」

「でも、今の入試制度なんて、偏差値次第じゃないですか？」

「そうだな。文部科学省も何か考えてはいるようなんだが、すぐにどうこうできる状態でもないのは確かだ。しかし、今の合格者は、試験マニアばかりで後で使い物にならない。例えば、うちの修士課程の山崎や、学部の田中など入学時の成績は偏差値七十超だったが、研究では、芽衣ちゃんの助けがなければ論文にならなかったところだ。だから、ドラスティックに改革したいと思っている」

へえー田中君って。そんなに頭よかったんだ、とちよっぴり尊敬。自分が役立っていることがうれしかった。

力強い言葉を頂いた後、一旦大学に荷物を取りに戻った。皆まだ研究中だった。芽衣の姿を見た学生が寄ってきた。

「うわー、今日の芽衣さんかっこいいですね。キャリアウーマンみたいです」

「あら、そう」

——ちょっとうれしい。

田中君が、やって来た。芽衣はどきどきした。

「おかえりなさい。どうでした」

「うん、国務省の参事官と会ってきたけど楽勝、楽勝」

「さすが、芽衣さんですね」

「心臓に毛が生えてそう？」

「そんな意味じゃありません」

「冗談よ。例のサイバー攻撃部隊、全員拘束された後、田舎に左遷されたらしいよ」

「へえー、芽衣さんのハッキングが効いたんですね」

「でも、たぶん、イタチの最後っ屁が来ると思うの。『カウンター・パンチ』の準備よろしくね」

「はい、分かりました」

田中君から着替えを受け取り、健一の部屋へ行った。空だったので、すばやく着替えた。後は、化粧落としを忘れずにと。帰り支度を進めていると健一が戻ってきた。

「おう、今日のご苦労さん」

「いいえ、おかげで色々買ってもらったし。美味しいもの食べられたし」

「おいおい、それだけかい？ 大使館から感謝状なんてすごいじゃない」

「でも、わたしだけの手柄じゃないもん」

「えらく謙虚になったな」

「もともと謙虚だよ。自分の価値なんて自分で分かるもん」

帰る前に、シミュレータの端末を操作し、通信履歴を確認した。不正アクセスが何件か遮断されている。が、以前より件数が増えていると感じた。なんでだろう。シミュレータのメインユニットを検索するが、特に侵入されたり、ウイルスが入ったりと言った事はなかった。大学院生に声を掛け、不正アクセスが増えている事と、どこからのアクセスか調べるよう指示だけ出しておいた。

芽衣の第六感は警報を出していた。敵のテロリストはコンピュータもない田舎に左遷と言っていたが、コンピュータ技術者の本分はそんなことでは損なわれない。もちろん強力な設備は失ったかもしれないが、その武器である侵入のノウハウは失われてはいないだろう。電話線を使ったダイヤルアップ接続でも、サイバーテロは十分可能なのだ。今はまだ、ファイアウォールで通信遮断されているが、そのうちこれを突破する方法を見付けるのは時間の問題だ。

それに親友の裕子のパパの意識も戻っていない、こんなときに停電を起こされたら三日の命なのだ。

健一はまだ帰らないというので、芽衣だけ先に帰った。遅くなったが、明日も学校がある。

高校生活だが、二学期も後一週間となった。願書を進路指導教諭に届けるようになっている。毎年、書類不備や出し忘れなど、多いのでそれを防ぐためだ。進学校でないのがつらい。

芽衣は、京浜女子大教育学部と東都大学理学部の二通を提出した。裕子は京浜女子短大保育科ともう一校、東洋清心女子大文学部で出していた。

芽衣が理由を聞いてみると、やはり四年制大学で臨床心理士を目指すことにしたらしい。

「あんたそんなのに、興味があったの？」

「失礼ね、病院に長くいるとね、素敵な女性の臨床心理士の人がいて、……その人の影響かな」

「その資格って、国家試験受けるの？」

「今のところは未定、国家資格もあるみたいだけど、現状では民間資格では大学の後、指定大学院の心理学研究室で実習を受けないとならないらしいの」

「ふーん、じゃあ、大学院まで進むんだ、裕子」

「でもどうなんだろう、お父さんの意識が戻ったらなあ、相談もできるんだけど」

「まあでも、できる内にやっちゃいなさいよ」

「うん、そうする。頑張ろうね、お互い」

「おー」

芽衣は、大学の研究室のことが気になった。

——田中君はもう論文を書き終えているかな？

と少し気になる。今日のホームルームの後、終業式まで、特に授業も行事もない。放課後、芽衣は裕子を誘って大学に遊びに行くことにした、健一に何かおごってもらおうと言う魂胆である。

バスに乗って、理学部前で降り、計算機センターをのぞくと大騒ぎになっていた。芽衣は大学院生の山崎をつかまえて聞いた。

「山崎君。何かあったの？」

「あ、芽衣さん。いいところに来てくれました」

「何よ」

「今日の午前中、大型コンピュータに侵入者がありました。端末は全部ダウンしています」

芽衣に取り、思わぬ盲点だった。電力シミュレータの方の対策は万全すぎるほど万全だったが、いつも使っている大型コンピュータの方は、そのままになっていた。どうや

ら、シミュレータにアクセスしようとしていた輩は、諦めて、ターゲットを乗り換えたらしい。ハッカーとしての誇りを全うするかの様だ。

「侵入元は、判明したの？」

「それが、パケット監視システムも、大型コンピュータで動いているので……」

「まあ、いいわ、どれか動かせる端末ある？」

「それが、ひとつも、他学科も聞いてみたんですが、皆ダウンしてるみたいです」

「ねえ、芽衣どうなったの？」

「この大型コンピュータが乗っ取られたみたい」

「えー、それって大変じゃん」

「まあ、何とかするわよ。内線電話借りるわよ」

「はい、必要なものは何でも使ってください」

芽衣は、電話線を引き抜き、通信カードにつないでノートパソコンに差し込んだ。民間のプロバイダ（接続業者）にアクセスする。コーポレートカードを借りて会員登録を済ませ、ここからインターネットを使うことにした。侵入者と同じ手口で、大型コンピュータにアクセスする。自分のフォルダから、必要なツールをダウンロードする。ノートパソコンなのであまりメモリに余裕がない。

しかし、どのフォルダも消去などの被害は受けていない。この間のやつなら、必ず、カーネル（中枢部）の破壊が目的だと推測した。先回りして待ち受ける。

この間、新しいファイアウォールのアイデアが浮かんだ。

正規ユーザは、普通に通し、不正侵入だけ、迂回させてあみだくじのような回路へ導く、何度パスワードを抜いても次から次からファイアウォールが出てくる仕組みだ。これを途中から無限ループにした。これなら、接続を切らないと閉じ込められたままになってしまう。手早くそんなプログラムを設置した。

敵のウイルスを探したが、特にいなかった。どうやら、全ユーザをロックしているだけの様だ。証拠を残さない気配りだろう。同情しながら、ロックを解いた。

「芽衣さん、端末が復旧しました」

「まだ侵入者は中にいるよ。閉じ込めたけど。侵入元を探知してみて」

「はい、……えーと、中国吉林省から、ダイヤルアップで接続」

彼らはそんなとこまで左遷されたのか、と芽衣は思った。いい加減無限ループに引っ掛かったのに気づいたのか、侵入者は接続を切った。

戦いは終わった。

「山崎君、カーネルに、新しいファイアウォールを作ったの、これ削除して正式のファイアウォールに加えるね」

「あ、はい、でもすごいアイデアですね」

「感心してないで、各ユーザに案内を出しといて、ID間違えると無限ループに落ちちゃうよって」

「全部にですか？」

「そんなの、ユーザーリストからコピーすればいいじゃん」

「そうでした」

「しっかりしてよ。念のためウイルスチェックと、消されたファイルがないかのチェックもね」

「ねえ、芽衣復旧したの？」

「うん、楽勝」

「あんた気楽ねえ」

健一の部屋へ、行ってみた。何やら電話対応に追われている。どうやら、端末が落ちたことの苦情処理らしい。

「お兄ちゃん、復旧したよ」

と、大声で伝えた。

「おお、芽衣来てくれたのか？」

さっき大学院生にメールを各ユーザに打ってもらったから。と告げると、ほっとした様子だった。

「これだけ、秀才が揃ってる研究室でも、いざとなるとこんなザマなんだ。あきれられるろう」

「でも、相手は情報機関のプロよ、学生さんには荷が重過ぎると思う」

「芽衣もそんなこと言う様になったか。どんな対策したんだ」

簡単に説明した。

「ふーん、今度は攻撃性防壁を使わなかったのか？ どうして？」

「だって、シミュレータは敵対的侵入者を前提としてるけど、大型コンピュータはみんなが使うものでしょう？ ID間違えたくらいで攻撃されたら、それこそ苦情が殺到するわよ」

「それもそうか」

健一は一旦電話を置き、教授室へ向かった。山本教授は文部科学省の端末の苦情を受けている。端末が復旧したことと、芽衣が新しいファイアウォールを設置したことを、メモで渡した。教授はしばらくして電話を置いた。

「また、芽衣ちゃんのお世話になったようだね」

「あいつがいなければ、とんでもない事態になっていました」

「これは、ぜひともうちの研究室に入れないと、工学部でもねらっているらしいですよ」

「そうですね。あいつのプログラムで学会賞とって、電力会社から研究費を取ってましたから」

芽衣は、裕子と計算機物理教室の研究室で遊んでいた。

「ね、田中君論文の下書きとやらは出来たの」

「はい、今日、指導の大学院生に提出しました」

「へえ。よかったわね。じゃあ、後は長い冬休みって言うわけ？」

「いえ、そうしたいんですが、まだまだ実験は続きます」

「ふーん、大変なんだ」

「でも、正月は田舎に帰ります」

「どこなの？」

「岡山なんです」

「へえー。結構遠いところから来たんだね」

「いえ、今のことでですからそんなに時間はかかりません」

「それもそうだね」

ちょっとさびしかった。そんな芽衣を見て裕子が口を挟んだ。

「田中さんて、芽衣の彼氏なんですか？」

「いや、そんな恐れ多い。誤解です」

「でも、芽衣……なんか態度おかしいよ」

「そんなことないよ」

二人とも、顔が赤い。

山本教授が研究室に入ってきた。

「芽衣ちゃんここにいたか。今日はどうも有り難う」

「あ、いいえ」

「どうだい、お礼にお寿司でも？」

「あのー友達と一緒にでもいいですか？」

「あ、こちらの方？ いいよ、いらっしゃい」

裕子も一緒にできると聞いてはしゃいでいる。

「回転寿司じゃないんだよー。銀座のお寿司屋さんなんだ」

「えー、うそ、銀座？」

裕子も、銀座の高級寿司店など初めてだった。

教授と健一に連れられてのれんをくぐると、先に田端准教授とアメリカ大使館のマッケイ氏が来ていた。芽衣は軽く会釈した。

「こんばんは。芽衣さん、お久しぶりです」

「こんばんは。ご無沙汰しております」

「まだ彼らが活動していると聞いたのですが、本当ですか？」

どうやら情報収集が目的らしい。

「はい、でも吉林省からのダイアルアップ接続でしたので、個人的な恨みか、組織的なものかよく分かりませんでした」

「手口はどうでしたか？」

「鮮やかに、ファイアウォールを通過し、全端末をロック、カーネルを破壊する予定のようでした。その一歩手前で食い止めたんですが」

「全端末をロック？ 芽衣さんはどうやって作業したんですか？」

「一般のプロバイダから、侵入者と同じ手口で追いかけてました。フォルダが無事だったので、この間の仕返しにカーネルだけを破壊するものと判断して先回りしたんです」

「それで、ファイアウォールを新しく組み替えたんですね。お見事です」

「彼らは、まだ動いているんでしょうか？ 個人的にハッカーになるほうがかえって厄介な気がします」

「いや、個人では設備が貧弱です。やはり軍の組織のほうが恐ろしいでしょう。でも、北京の同僚に、彼らの動きを追ってもらいましょう。そのほうが安心でしょう」

「よろしくお願いします」

「それと、お先に頂いてますが、今日はブリが最高ですよ」

マッケイ氏は、そういうとにやっと笑って片目をつぶった。ユーモアらしい。

「じゃあ教授、ブリはやめときましようか？」

「芽衣ちゃんも、ユーモアを解するようになったかな」

裕子が聞いた。

「あの外人さんだあれ？」

「うん、田端先生のお友達」

「そういうことかな。われわれは、マグロにしようか、大将、お願い」

「かしこまりました」

どうやら、片目をつぶったのは今日のブリはずれと言うことらしかった。

芽衣はあまり食べない方だが、裕子は食い気たっぷりだった。

それにしても、裕子がいると健一がおとなしい。芽衣はますます怪しく思った。

しかし、今日のサイバーテロリストの大型コンピュータへの侵入は、システムの破壊が目的ではなかった。むしろ敵である芽衣の能力を計るためと、あるフォルダの内容を調べるのが目的であった。無論最初から、このコンピュータをターゲットにしていたのではなかった。田端准教授とアメリカ大使館のC I A作戦室の暗号メールの送受信から脚が付いたのである。この時点では大使館のマッケイ氏も含め誰も気付いてはいなかった。

年が明けて、第二週の成人の日を含む、日・月曜にセンター試験があった。これは国公立だけでなくほとんどの私大も含まれている。当然、芽衣も裕子も受けに行った。

もう、鉛筆転がしでしのいでいる場合ではない。普段はふざけて受けている芽衣もこの日ばかりは真剣だ。英・数・国と選択の物理・地理。

もう高校では、ほとんど授業もなく二月の期末試験だけで、後は自由である。しかし、三月一日には国立大の二次試験前期日程があり、その後、一週間して京浜女子大の二次試験があった。

暇と思われたのか、空いた時間は健一に呼び出される日が多くなった。卒研究生や大学院生の論文の指導に人手が足りないためである。なぜ、受験生の芽衣に大学の卒業論文の指導をさせるのかいまいち理解できなかったが、押し付けられるといやとはいえない芽衣であった。

今日は田中君の提出した論文を、読んでいた。システムの重要性を論じた後に、ファイアウォールの適用を持ってきている。ちょっと順序がおかしいと言うか、不自然だと思った。

「田中君、システムの話の後に、ファイアウォール？何かおかしいと思わない？」

「あれ、まずかったですか？」

「ファイアウォールが要るのは、不正侵入やウイルス攻撃を防ぐためでしょ？」

「ああそうか！ もう一章増やします、システムを守るための理由ですね」

「がんばってね。不正侵入の実例を入れたらもっとよくなるよ」

「有難うございます」

こんな調子で、卒研究生や大学院生の学位論文を添削している。芽衣はかなり論理的だった。

芽衣の悩みはつきなかった。

田中のことである。もう、彼のことが「好き」なのは、自分でもはっきりしていた。できることなら近づきたい。

だが、この大学に入るには試験の成績はいまいちであると、自分でも分かっていた。新センター試験はマークシート方式で採点から集計まで人間が携わることはない。二次試験は筆記試験なので不正のしようはないように思えた。

——ものは考えよう。

芽衣はそう思った。大学の先生が赤ペンを持って採点した後、表計算シートに入力して、一次試験の結果を足して並べ替え、上位百名が理学部の合格者だ。

だから、大学のコンピュータに侵入して結果を書き換えれば理論上は合格可能だった。ずるい、と芽衣は自分でも思ったが、こうでもしないと合格は無理と思った。たとえば山本教授が特別推薦で五十点くれたとしても、とても足りないだろうと思った。

まもなく、三月一日になった。

理学部大教室のいくつかに分かれて二次試験が行われた。長い机に一つ置きに座るようになっていた。カンニングを防ぐためだ。芽衣は教室の真ん中の席になった。左に男子生徒、右側が女子生徒だった。

九時に数学の試験から始まったが、あまり、出来なかった。問題の意味もわからないでいたら、そのうち、鉛筆を筆箱ごと席の前に落としてしまった。布製でファスナーを閉めていたから大きな音はしなかったが、横の生徒にじろりと見られてしまった。

——あう。

自分でも情けなかった。問題が解けておらず、ほとんど白紙なので試験委員の先生に知らせて拾ってもらうのも気が引けた。

もじもじしていると、隣の女子生徒が鉛筆を一本貸してくれた。

——ありがとう。と、眼で合図した。

試験が終わり休憩時間中に彼女にお礼を言った。

「時間もったいないから、お礼なんていいよ」

「でも」

「あたし、試験慣れしてるの」

「え？」

「今年で三回目なの、これで駄目なら終わりにしようって決めてるから」

「そんな」

彼女の受験票には、大畑円佳《まどか》と書いてあった。住所は静岡で年齢は芽衣より二つ上だった。背は芽衣より十センチほど低かったから、見た目は若く見えた。

「あなた、芽衣ちゃんていうの？　可愛い名前ね」

「いや、名前だけっす」と間の抜けた返事しか出来なかった。

結局、次の英語と選択物理も何も書けず、大畑とも喋らないまま入試を終えた。彼女は
その足で新幹線に乗るらしく、一緒にお茶でもという芽衣の誘いを断り帰ってしまった。

新たな危機

8. 新たな危機

嘘発見器《ポリグラフ》を使っているはずだ。装備の貧弱さもそれを裏付けるものだった」

「じゃあ、C I Aとしては得るものは余りなかったんでは？」

「いや組織の全容とそれまでの活動内容が分かった。どこにハッキングして、どんな情報を得てきたか。それをつかむのが目的だった」

「じゃあ目的は、達したわけですね」

「まあ、一応はね。結果、わが国の防衛省はすっかり信用をなくした」

「え、じゃあ、筒抜けだったんですか？」

「そう、もうC I Aは防衛省にデータを渡さないだろう」

「それって、防衛省が情報弱者になるってことですか？」

「やむを得まい。われわれが、その代わりに務めなければな」

　　そこまで言って、田端准教授は話を切り替えた。

「今日、マッケイ氏と会うんだが、一緒に来てくれるかい？」

　　余り、気は進まない。が、断る理由も見つからない。午後六時にタクシーで、いつもの寿司屋に行くことになった。

　　研究室に戻った。

「また、國務省の人と会うことになっちゃったよー」

「芽衣さんも大変ですね。情報分析官としてですか？」

「マスコットガールかも？」

「それはないと思います」

　　——何だよ？

「あたし、そんなに魅力ないかなー？」

　　——田中くーん！

「……」

「芽衣さん鋭すぎるんですよ。浮気しても、筒抜けになりそうで、……」

　　ショックでその場を離れた。

「なんで、付き合う前から浮気の心配までするかなー」

　　でも、——もしつきあったとしたら、という前提で話をしたのははじめてのことだった。ショックの割にはショックでなかった。

六時になったので、荷物を持って理学部通用門まで行った。田端准教授が待っていた。タクシーで、銀座へ向かう。いつもの寿司屋の前で降りる。

のれんをくぐると、いつもの大将の威勢のよい声がする。座敷席を見ると外国人が二人座っている。田端准教授は、今日は座敷席にしようと言って、その外国人の向かいに座った。一人はマッケイ氏だ。

「こんばんは、芽衣さん、カーネル・田端。こちらは在北京大使館の國務省職員のジェフリー・ダイソンです。彼は日本語少しね」

「はじめまして東都大准教授の田端です。こちらは、研究生の黒澤芽衣です」

「ジェフリー・ダイソンです」

主な会話は、マッケイ氏が行った。

「お先に注文しましたが、彼は日本が初めてなので、寿司懐石にしました。よろしかったですか？」

「はい、もちろん。でも懐石もあったんですね。知りませんでした」

「ところで、芽衣さん、あなたのおかげで貴重な情報を得ることが出来ました。合衆国を代表してお礼申し上げます」

「結局、作員はサイバー攻撃部隊の生き残りの個人的行動だったんですか？」

「はい、自白剤を使って尋問しましたが、あなたの推察どおりでした」

芽衣はひどいことをしているな、と思った。

「それで、日本の防衛省のデータが筒抜けだったということですか？」

「直接、抜かれていたわけではありません。ある国会議員から抜かれていました。しかし、日本国の憲法では国政調査権が認められているので、敵対的国会議員に対し、国家機密を守ることが出来ません。それで、防衛省への情報協力には制限を設けるようC I Aからリクエストがありました」

これは、政治上の問題だ。情報分析屋の関わることではないと判断した。

料理が運ばれてきた。懐石なので量は少なめだ。芽衣はちょっと助かった。田端准教授はビールを注いで口をつけた。芽衣はお茶を飲んだ。熱かった。

「ところで芽衣さん。いつの段階で敵対的侵入に気づいたんですか？」

「兆候は去年の十月ごろです。例の『CODE 1』を入手し、彼らが暗躍していることを察知しました」

マッケイ氏が隣のジェフリー・ダイソン氏に潜水艦配備図のことだと説明する。

「同時に、彼らのサーバーにアクセスして、関連証拠を採取、日本の電力網がねらわれていることを掴みました。これは、第七艦隊の動きを封じるためのものでした」

「いや、芽衣さん、あなたは実に迅速に情報を集め対策を講じている。C I Aの情報部でもあなたほどの人材はありません」

「マッケイさん、偶然の積み重ねです。余り買いかぶらないで下さい」

「しかし、スタッフが行方不明になった後、国内にいるか、日本に潜入して破壊工作に従事するか議論をしましたね。そのとき芽衣さんは、サイバーな手口を使うと予想しました。その理由を教えてくださいませんか？」

「彼は、ハッキングするとき、目的以外の行動は一切取りませんでした。普通いたずらのハッキングだと、ファイルを消去したり、改ざんしたりします。ですが、彼の行動には一貫性がありました。それで、ハッカーとしての誇りを感じたんです。それで、アナログな手段はプライドにかけて取らないと思ってました」

「面白いですね。ハッカーの誇りですか？　しかしその予想が当たったのですから、完璧です」

ダイソン氏と田端准教授は、日本酒をぐいぐい飲んでいる。あんまり酔わないらしい。しかし、何の目的もなしにこんなミーティングをするような男ではない、と芽衣は判断していた。

マッケイ氏が、早口の英語でダイソン氏と会話を交わした。

田端准教授に、向き直って、改まった態度で話しかけた。

「今回、防衛省への情報提供を制限するようCIA作戦本部から要求されています。われわれとしては、残念ながら従わざるを得ません。しかし、それでは日米安全保障上、不都合です。そこで、カーネル・田端、あなたに情報窓口をやっていただきたいのです。国務省としては、あなたから、防衛省のしかるべき人員に情報を提供するのは問題ないと、解釈しています。また、あなた方の情報分析能力の高さを、今回のミーティングで確認しました。よろしいですか？」

「はい、われわれもそれを望んでいました。間違いなくお引き受けいたします」

芽衣は、冗談じゃないわよ、と思った。えらいことに巻き込まれてる。

そう思ったが、田端准教授に見事にはめられた。このために今日連れて来られたんだ。

話がまとまった後、田端准教授は上機嫌で、二人に酒を勧めた。相手も、妥協案がまとまり、ほっとしている雰囲気であった。やはり、CIAと国務省は一枚岩でもなさそうだと、思った。

また、国防総省と国務省とCIAとホワイトハウスの関係を把握しておく必要があると、感じていた。もちろん、政権が入れ替わるごとにこの関係はガラッと変わるだろう。しかし、これを把握しておかなければ、世界情勢は理解できない。そう感じていた。

決着

9. 決着

合格発表までは、芽衣は兄貴の研究室でのんびりと遊んでいた。目的は田中君の顔を見るためである。

田端准教授と健一が入ってきた。

「お、芽衣ここで遊んでいたのか？」

「しつれいね」

「ところで、芽衣ちゃん、今からマッケイ氏のところへ行くんだが一緒に行ってくれるかい？」

今日は、ジーンズとパーカーだ。

「え、こんなカッコでいいですか？」

「会議だけだからいいだろう」

「じゃあ、これから行きましょうか？」と健一。

理学部通用門からタクシーに乗り、アメリカ大使館へ向かう。もう顔なじみになったのか、守衛も簡単に通してくれた。本館のロビーで来訪要件を告げ、しばらく待っていた。「芽衣も偉くなったな。大使館に顔パスなんだから」

「可愛いからだったりして」

「一生言ってる」

二階の作戦室に通された。マッケイ氏と、もう一人情報部員らしき人が一緒だった。ジョン・スレーター捜査員と言っていた。

マッケイ氏が尋ねる。

「芽衣さん、もしもの話ですが、あの電力網シミュレータのファイアウォールですが、中身を知らないとして、あなたなら突破できますか？」

「何ですかマッケイさん、もし停電してもあたしのせいではありませんよ」

「いや、例えばの話です。可能ですか？」

「情報を知っているので、十五分も掛からないと思います。もし知らなくても、二時間もあれば中央指令所まで到達できます」

「実は、もう一人の工作員が姿を消しました。中国当局も後を追っている様ですが、今のところ行方は分かりません。スレーター君、消えた工作員について分かったことを報告してくれ」

「はい、工作員は元サイバー攻撃部隊の構成員で、台湾上陸作戦の遂行に当たり必要となった電力テロを実行するためにMITT留学から帰国し企業で働いていたのを、スカ

ウトされた人物です。専門分野は送電工学、MITTではネットワーク理論を応用し、送電網の脆弱性の研究をしています」

何それ、同業者じゃない。芽衣が質問した。

「それはもしかして、台湾上陸作戦をまだ諦めていないということでしょうか？ それに、そんな人材ならこっちの手口も読まれると思いますが」

「確かに、人民解放軍の中には現政権に不満を持っている若手将校もいます。しかし、三百万もいる軍隊の中ではごく少数だし、第一、中央の指令がないと、作戦に必要な海軍の援護が得られないでしょう。ですので、台湾を狙った線は薄いと判断しています」

「じゃあ、作業者が日本に攻撃を仕掛けるとしたらその目的は？」

「もし、中央のエリート集団から失脚させられ、田舎の役人に左遷させられたら、その人間の気持ちが分かりますか？ おそらく報復でしょう。一人は先に手を出して返り討ちに遭いました。彼の気持ちも分からないでもありません」

「でも、ファイアウォールの専門家と組むのが、この作戦の条件ですよ」

「はい、今のところは、その担当者はおとなしく田舎の役所の仕事をしているようです。しかし、こちらの捜査員を二十四時間つけられないのが、もどかしいのですが。それで、もし、電力網がやられたらどうなりますか？」

これは、田端准教授が答えた。

「わが国は、電力依存が高いので、被害は相当数出ると思います。まず、関東電力管内で大停電が起これば、関東にサーバーを持つプロバイダや大学など、コンピュータ網が麻痺します。したがって送電システムの復旧は人間の手で行わなければなりません、おそらく一週間以上掛かるでしょう。」

次に、懸念されるのが、ガスと水道です。制御電源を喪失すると大抵のバルブは閉まるようにできています。水道はいいのですが、ガスの遮断は一旦、各家庭のガスの弁が閉じられていることを確認しないと再開できません。そのまま開くと、爆発事故につながったりするためです。電話は非常電源があるので、有線電話は使用可能でしょうが、携帯電話は遮断されます。

二次的な被害として、航空管制が効かなくなるので、緊急無線で成田や羽田では他の空港への迂回を指示しなくてはなりません。日本規模での停電では海外の空港への迂回が必要となります。

また、信号も止まるため、自動車事故、鉄道の停止など被害は多岐に及びます。

市民生活では、百貨店など窓のない施設は営業停止、生鮮品も冷蔵庫が止まるので全部ごみになります。銀行や証券取引も営業停止に追い込まれるでしょう。

その他病院では非常電源に切り替えると思いますが、一週間の停電に耐えるだけの燃料の備蓄がありません。従って医療にも支障が出ます。水道がなければ透析の必要な患者にとっては命取りとなります」

「では、そのファイアウォールの専門家の動向次第という訳ですか？」

芽衣は冷静に聞いた。

しかし、実際には冷静ではなかった。裕子のパパも小康状態とはいえ、まだ、安全とは言えない。芽衣のせいではないが、自分がその鍵を握っている状態なのだ。

「正直な話、敵が正攻法で来た場合、何か対策はありますか？」

マッケイ氏も深刻な声で返答した。

「今のシステムで持ちこたえる設計にはなっています。しかし、高度なレベルの侵入者となると、突破される可能性はあります。もし本格的な対策を採るなら、ガスや水道などのライフラインには別系統の送電線を確保する方法もありますが.....」

「この作戦自体、極秘で動いています、電力会社でも取締役しか知りません。その方法は困難でしょう。第一、一時しのぎにしかないのでは？」

「そうですね、では、相手よりレベルの高い管理者が、常駐して見張るしかないと思います」

健一が発言した。

「いつ動くか分からん奴のために、常駐体制なんか取れるのか？」

「そうよね、マッケイさん中国当局に元のメンバーを拘束させることは出来ませんか？」

そうすると、その人に電力テロの意思があれば事前に、逃亡すると思うんです」

「難しい作戦ですね、何か手段はありますか？」

「新しいサイバー攻撃部隊が出来ましたよね、そこに、旧組織のスタッフが破壊工作を仕掛ければいいんです。報復と称して」

「うまく中央が、引っ掛かるとは思いますか？」

「百パーセントの自信はありませんが、新しい組織にはまだ情報分析能力が十分ではありません。うまく偽情報に掛かって中央政府に報告する可能性は十分あると考えます」

「なるほど、それでライオンを檻からおびき出すわけですね」

「後は一対二の勝負です。何とかします」

「それでは、この間、万が一に備え第七艦隊には燃料と作戦機を満載させ、グアム・沖縄間の洋上で待機させておきます。民間航空機が迷子になったときには、警戒管制機で誘導させることにしましょう。スレーター君、作戦部から指示を出すよう伝えておいてくれ」

「はい」

と、スレーター捜査員は部屋から出て行った。

ネットカフェ

10. ネットカフェ

ワン・イー（王偉）は北京にいた。

三ヶ月前に、父親とも慕っていたウー・シャオ・フー（武小虎）が電子戦攻撃部隊の指揮官を解任され、吉林省政府の役所に軟禁状態にされてしまった。

きっかけは、本部コンピュータに置かれていた台湾関係ファイルの流出と、それを元にアメリカから共産党本部に圧力を加えられたことで、責任を取らされたのだ。誰かの陰謀とは思ったが、それ以上に、事前に情報を得て事態の収拾に当たっていた矢先の出来事だった。

自身で沖縄に飛び、東京の暴力団幹部を呼び出しターゲットの抹殺を依頼したものの相手を特定できないままに警視庁の介入で手を引かれるという失態を犯してしまった。

ワンは時計を見た。午後十時になり、天安門が見える通りから一本入ったところにあるインターネットカフェに入った。最近は規制が厳しくなっているが、ワンは偽の身分証をいくつももっていたから気にはしない。

コーヒー一杯を飲みながら、かつての同僚だった、フー・ピン（胡平）を待っていた。「おい」

肩をたたかれてワンは振り向いた。

「少し痩せたのか？」

そう言うフー・ピンもかなりやつれていた。電子戦攻撃部隊少尉から、地方の部隊に左遷され食用豚の世話係をしていたのだ。かつての栄光が本当に糞にまみれていく気がした。

「お互い様さ、フリーの俺の方がまだましかも知れない」

ワンはそう強がりを見た。

だが、精神的ダメージは大きかった。ウー大佐が失脚したのをきっかけに、かつての恋人のマーとも連絡が取れなくなっている。彼女の父親がワンと隔離したのか、それとも彼女が関係者と見なされて逮捕されたのか現在は分からなくなっていた。党のコンピュータにハッキングを仕掛ければわかることだが、追われている身でそれも難しかったのだ。もし、ワンの人質のつもりで軟禁されているのなら本当に処刑されてしまうかも知れないからだ。

ワン自身この三ヶ月間、人目を避けて住所を転々としていた。ウー大佐が事前に知らせてくれなければ真っ先に逮捕されていたに違いない。

「それで、ワンよ。本当に報復攻撃をするのか？」

「本気さ、こちらの實力を見せつけない限り我々への監視の目は永遠に続くんだ」

ウー大佐への忠誠が八割方だったが、フーを協力させるために、現職復帰というえさをちらつかせた。

「こんなネットカフェから、アクセスできるのか？」

「どこからだろうと関係がない、すでに一度、侵入には成功している。肝心なのは侵入してから正確な攻撃ポイントだ。在日米軍を少なくとも二十四時間麻痺させないと中央も注目してくれない」

「攻撃のためのデータはそろっている。ほぼ、東日本を壊滅できる。だが、電力麻痺だけで本当に中央が俺たちを必要とするか、彼らはサイバー攻撃の重要性をほとんど認識していないように思うんだが」

「そんなことはない、飛行場が止まれば、確実に飛行機も落ちるんだ」

フーは半信半疑そうな顔をした。彼も部隊を抜け出してワンのいいなりに、転々と居場所を変えていた。

実際に、国家反逆罪ではめられると、最初は復讐を誓っていた仲間も段々死を恐れだした。同じ相手の陰謀だとワンは主張したが仲間はもう、逆らう気持ちを喪っていた。ウー大佐が金を出していた暴力団もすでに、言うことを聞かなくなっている。元々金だけの仲だったからしょうがない。

そして、今日、ここでインターネットに接続し、関東電力の指令所に侵入したするのだ。

フーがワンにメモリースティックを渡した。

「何だ？」

「日本の関東一円の送電網のデータだ」

ワンはパソコンの前に座り作業を開始した。一旦、香港とシンガポールのサーバーを経由させて東京へと接続した。回線はすべて党本部のネット監視員によって見張られている。ワンはその能力を如何なく発揮した。

「ふふ」

「もう、関東電力にたどり着いたのか？」

「ああ、敵がファイア・ウォールの向こう側にダミーのようなシステムを作っていることは、確認した」

「本当か？」フーはなおも不安げだった。

「東京の情報屋にも確認している」

「そうか、でも、もう一度確認しろ」

「わかっているさ」

ワンは、ファイア・ウォールを突破して電力シミュレータの中に侵入し、偽の信号を送る準備をした。

「おい、送電網のデータが古くなっている。新しく送電線を設置したのか？」

偽造データにフー・ピンが気づいた。

「電線や道路はあちらの国では年中変わっている。大きな送電線でなければ、このまま行こう。確認するには百人からの部下がいる。今回はデモンストレーションなのだ」

ワンは強がった。

「これが正しいとすると、陸奥電力から関東電力への中継所、それに千葉発電所から中央幹線への中継所を遮断しろ。将棋倒しに関東一円に停電が起こる。第七艦隊も動けないだろう」

「本当だろうな」

ワンは、その通り操作信号を発信した。

待つこと三十分、コンピュータの画面上で関東一円を含む東日本全域で大停電が起こった。ワンの顔は満面の笑みだった。これで復讐を果たした。

店を出ようと立ち上がったとき、人民警察の捜査官に取り囲まれているのに気付いた。「しまった。どこで脚が付いたんだ」

まさか、罠にはまり北京のアメリカ大使館からの通報で人民警察が動いているとは夢にも思わなかった。だが、ここから日本にアクセスしていればそれなりのハッカーだと思われるし、つかまった方が都合がよかった。

「二人とも動くな、国家反逆罪で逮捕状が出ている」

「なんだと？」

「共産党本部への不正アクセス及び政権篡奪を共謀した容疑だ」

ワンともう一人のエージェントは手錠を掛けられ、護送車に押し込められた。だが、復讐を果たしたと信じ込んでいる以上、もう心残りはなかった。もう一人のエージェントと護送車の中でフツと笑いを浮かべ、そして警察署に連行されていった。

——これで、ウー大佐以下、部隊員の名誉は回復される。

東京大停電

1 1. 東京大停電

大学に帰ってから田端准教授は学生を動員し、電力シミュレータの端末を二十四時間監視させることにした。学生は三十人近くいるので適当に交代できるし、どの道、実験で徹夜組もいる。問題は侵入を検知したときにどう対処するかだ。

芽衣も考え込んでしまった。どんな手段で侵入する気だろう。

健一が話しかけた、邪魔な男だ。

「まずは、ライオンを檻から出すことだ。何かウイルスでも仕込め」

「そんなお気楽女子高生みたいなこと言わないでよ。情報機関に侵入するのって危険なんだからね」

「お前にそんなこと言われるとは思わなかった。悪いものでも食べたのか？」

「お兄ちゃんより、いいモノなんて食べてないわ！」

完全に芽衣の機嫌は悪かった。健一も一時退散した。

もし、自分がセキュリティの固いコンピュータに侵入するならどうするだろう、いつもなら、アクセス偽装ソフトを起動させ、正規ユーザーを装って侵入している、しかし、電力シミュレータのファイアウォールは、中央指令所のキャッシュメモリ書き換えプログラムには敏感に反応し、通信遮断してしまう。

どう考えても、抜け道はなかった。しかし、芽衣の第六感は警報を鳴らし続けている。よしセキュリティを破る話はもうやめて、一旦、ファイアウォールを抜けられた後の処理を考えよう。

現在、電力会社の送電網は中央指令所で、コントロールされている。その中に何箇所かの遮断が、大停電を招く危険な場所がある。おそらく相手の専門家はこれを探知したんだろう。このコントロールは手動スイッチで行われる、ウイルスが狙うのは、信号のやり取りをするキャッシュメモリ（一時記憶装置）で、信号の中身を書き換えることで電力網を誤動作させる。それを防ぐために、信号は一旦電力シミュレータを通すことになっているのだ。だから、ここが乗っ取られると好きな信号を出すことが出来るいわば諸刃の剣と言う訳だ。

罠を仕掛けるため、芽衣は別のコンピュータをもう一台、ダミーに使うことにした。研究室の大型計算機である。

早速、不正侵入検出プログラムの作成に掛かった、メインプログラムを徹夜で組み上げた。あとは元の電力網をコピーして入力してお仕舞にした、が、まてよ、さらにコピーして、もう一個別の電力網を作り上げた。こちらの方は偽物で実際より線を増やしておいた。いわゆるあみだくじの発想である、増やすだけでなく減らしもした。実際の指令所には、ウイルスが書き換えた内容を再度変換してしまう、攻撃ポイントが外れれば、ドミノ式の大停電にはならないからだ。侵入した犯人がどちらを選ぶか五十パーセントの確率になる。芽衣はこれは使うことはないが、最後の保険と考えておいた。

親友の裕子のパパの命が掛かっている。絶対に大停電にはできない。

ここまで出来たことを田端准教授に報告し、次はサイバー攻撃部隊へのダミー攻撃を行うことにした。信憑性を増すために一旦北京市内のネットカフェに侵入してダミーにし、ここからサイバー攻撃部隊のホストコンピュータに侵入した。やり口は前の作業員と同じで、全ユーザーをロックした上で、カーネルの一部を書き換えた。これで完了。

一旦家に帰ることにした。長時間プログラミングした後で寝不足を感じ、夜まで寝ることにした。

夕方頃、芽衣の携帯電話がけたたましく鳴った。田端准教授からだ

「ふぁい。黒澤です」

「寝ていたところ悪いんだけど、今日中国のサイバー攻撃部隊のホストコンピュータが攻撃を受けたと、マッケイ氏から情報が入った。手口はユーザーをロックした上で、カーネルを書き換えたいらしい、いつかこっちがやられたのと同じ手口だ。これで、人民警察は元のメンバー全員を拘束する事になるだろう」

「それで、ファイアウォールの専門家はどうなったんですか？」

「今、北京のエージェントが確認中らしい。また連絡する」

一番気にかかる情報が入ってこない、いらだちを感じつつも夜間の徹夜組に、合流するつもりでもう一眠りした。

夜中の十一時になって起きようとして、蛍光灯のスイッチを入れたがつかなかった。

「あれ、蛍光灯が切れてるのかな？」

懐中電灯を持って、居間に下りていった。父親が起きていた。ろうそくが燈っている。

「お父さん、一体何の真似？」

「馬鹿、停電だ」

「ええ？ こんなに早く？ ニュースは？」

一瞬、最悪の事態が脳裏をよぎる、芽衣がテレビをつけようとする、父親が止めた。

「馬鹿、停電だと言っとるだろう。こういうときはラジオだ常識だろう」

父親がラジオを持ってきたが、電池が切れている。

「お父さんこそ、馬鹿じゃないの？ 電池切れてるじゃん」

「これは発電器付きなのだ。お前レバーをまわせ」

「何で、あたしが……」

こんなことをしている場合ではなかったが、少しでも停電情報が欲しかった。せっせと発電ハンドルを回しながらニュースを聞いた。手を緩めると音が消えてしまう。

「おい、もっとしっかり回せ」

と、親父がうるさい。

「十一時のニュースです。今夜首都圏で大規模な停電がありました。原因は送電線の容量を超えたため、一部の中継所が遮断されたことによるものと、関東電力から発表がありました。詳細情報は、また入り次第連絡します」

「あーよかった」

「何がいいんだ？」

「だってラジオ局が動いてるってことは都内のスタジオも送信所も無事ってことでしょ。全域じゃなかったんだ」

「何をのん気なことを言っている」

大学に行きたかったが、家の周囲は真っ暗で女の子一人では外出できない。タクシー会社に電話をしたが、今混乱していてすぐに配車出来ないと言われた。どうしようか迷っていると、大使館の車が迎えに来てくれた。スレーター捜査員だ。

「連絡がつかないので、マッケイ部長の指示でお迎えに上がりました」

「有り難うございます。使えるコンピュータはありますか？」

「作戦室が稼動しています」

「じゃあ、同行します」

芽衣は大使館に着くと、二階の作戦室へ行った。マッケイ氏も眠そうな顔で指揮をとっている。

「遅れました。マッケイさん状況はどうでしょうか？」

「今一掴めていません」

「端末お借りできますか？」

「そのつもりで呼んだんです」

芽衣は、端末につなぐとまず東都大学に設置してある電力シミュレータに接続した。ファイアウォールは見事に抜かれている。しかしこの手口は芽衣のやり方にそっくりだった。大型コンピュータの芽衣のフォルダを調べてみた。芽衣のハッキングツールの侵入偽装ソフトが何者かにダウンロードされていた。接続先のIPアドレスを通信履歴から探ると、相手は北京市内のネットカフェだ、インターネットの普及率が高いとはいえ、ここまで来ると犯罪の温床になってるな、まじめに使ってる人も多いんだろうけど。

「マッケイさん犯人の居場所はここです」

「北京市内のネットカフェですか？　すぐに中国人民警察に通報します」

一方、東京のアメリカ大使館で、事後処理に当たっていた芽衣だが、不審な点に気付

いた。

（何であたしのフォルダが狙われたんだろ？　あたしの存在は知られていないはずなんだけどなあ。あ、ひょっとして）

と思いC I A 作戦部のファイルを調べてみた、案の定、芽衣とC I A、電力会社の共同作戦のファイルがしまわれている。ラングレーの本部のコンピュータを調べると、通信履歴に北京のネットカフェとの通信が記録に残っていた。

「マッケイさん、この犯人、C I Aのファイルからあたしの存在を知ったようです」

「なんですって？　本部のファイアウォールを抜いたわけですか？」

「それだけの實力を持った犯人と言うことです」

深刻な顔のマッケイ氏を放って置いて、犯人の行方を追跡した。電力シミュレータに侵入した後で、ここでウイルスプログラムを書いている。これではファイアウォールを通過出来る訳だ。攻撃ポイントは送電工学の専門家が教えたんだらう。ここから信号を発信すると、ダミーの大型コンピュータへ誘導される。ここも、同様の手口で突破されていた。この送電網データには二種類用意してある。問題はどちらを選んだかだ。

「マッケイさん、どちらの送電網が本物だと思いますか？」

「わたしには電気の知識がないので分かりませんが、普通は複雑な方が本物だと思いますよね」

「犯人もそう判断したようです」

芽衣が、様子を見ると偽装データを選びそこからさらに中央指令所へデータ改ざんウイルスを送っていた。これが、今回の首都圏大停電と言うわけだ。

芽衣は、シミュレータではなく「実際の」被害状況を調査した、停電は東京の板橋区、練馬区、荒川区、墨田区、埼玉県川越市の一部と小範囲だった。

事態の把握が出来ると、特急作業で電力シミュレータからウイルスを除去し、復旧作業に当たった。病院では非常電源に切り替わっているはずだが、中央指令所からのコントロールで復旧は数分で可能なはずだ。三日もかかるはずがないと確信していた。

芽衣の予想通り、まもなくニュースで、電力が復旧したと報道があった。

復旧した携帯電話（使えなかったのは墨田区内の芽衣だけだったが）で、大学に連絡を入れた。

「お兄ちゃん？」

「芽衣か、今どこにいる？」

「大使館の作戦室、ここから作業したの」

「まあ、最悪の事態は免れたが、どうやったんだ？」

「大型コンピュータをダミーにして、偽情報を載せておいたの。脆弱ポイントをえらんでも、あみだくじ方式で小規模な別の施設に変換される仕組み。その結果が今回の停電の

正体というわけ。ライフラインの保護を考えたから、住宅地には犠牲になってもらったわ、夜中に数時間止まるだけなら困るのはビデオ録画くらいでしょ」

「でも、どうして犯人が偽装データに引っかかると思ったんだ？」

「本物のデータと一緒に偽のデータを置いたの。普通複雑な方が本物と思うでしょ？」

「ふん、策士だな。で、五十パーセントの確率にかけたのか？」

「数字の上ではね。馬鹿な学生ならどっちを選ぶか分からないけど、今回の犯人はあたしのやり方を研究している専門家よ。まず引っ掛かると思った。それより、関東電力に謝罪に行かないといけないんじゃない？」

「芽衣もついて来るか？」

「いやよ」

スレーター捜査員が、マッケイ氏に報告に来た。

「北京のわが方のエージェントからの情報によると、こちらからの通報後、ネットカフェを集中監視、先ほど人民警察が踏み込み犯人二名を拘束した模様です」

「分かった、有り難う。しかし、こんな犯人ならこちらで拘束すべきだったかな。至急でラングレーの作戦部長を呼び出してくれ。向こうは朝だろう」

まもなく電話がつながり、早口の英語で芽衣には聞き取れなかったが、CIAのホストコンピュータに侵入され、データを盗まれていたことを報告しているらしかった。

芽衣は念のため、裕子の携帯電話にも掛けたが、病院の非常電源が入ったと説明されたが気が付かないくらいだったと言っていた。芽衣は一安心した。

次の日の新聞では昨夜の大停電がトップ記事で出ていた。サイバーテロの話は伏せられていた。あくまでも、容量オーバーによる中継所の遮断と関東電力広報部が発表したことを、そのまま載せていた。論調ではライフラインの脆弱性とその保護が論じられていた。

芽衣はもうやってるよ。と思いながら新聞を読んでいた。健一も起きてきた。

「おい、今日は関東電力の副社長のところへ行かなきゃならないんだ。お前も来い」

「やだよ、約束があるもん」

「いつもは来てくれるじゃないか？」

「気が変わったの」

「意地悪するなよ」

「意地悪なのお兄ちゃんじゃない。怒られに行くんでしょ」

「状況の釈明だ」

「おんなじじゃない」

「また、服買ってやるから、なあ」

「ほんと？」

「何だ、現金なやつだな」

先方にアポイントメントを取ってから、教授と健一、芽衣は関東電力に行った。受付を見ると今日は理恵が座っている。

「理恵ちゃん働いてるね」

「あ、芽衣ちゃんいらっしゃい、今日は仕事？」

「うん、副社長に怒られに来たの」

「あ、承っております。こちらどうぞ」

と、一人前に案内してくれた。

取締役室に案内され、副社長と面会した。山本教授から話を切り出した。

「このたびはご期待に沿えず、申し訳ありません」

「何のことでしょう？ 昨日の停電なら記者会見済みですが」

「しかし……」

「東京大停電にならなただけでも良しとしましょう。今日経済産業省から事情を聞かされました。特A級のテロリストの逮捕劇だったそうじゃないですか？」

「はあ、どうも」

早々に退去したが、国務省のマッケイ参事官が、経済産業省に根回しをしておいてくれたらしい。まあ、大事に至らなくてよかったと、教授も安心していた。

後日、マッケイ氏が大学を訪問してきた。CIAと国防総省からファイアウォール構築に協力してもらいたい旨、要請があったらしい。田端准教授は上機嫌で引き受けていた。研究費も出るらしいと健一も喜んでいる。また、厄介なものを持ってきたなど芽衣だけが不機嫌であった。

最後に、これ国防総省からと手土産をもらった。チョコレートの詰め合わせだった。菓子折りという日本の習慣に合わせたのかしら、と笑ってしまう芽衣であった。

大学のコンピュータが落ちなかったおかげで、芽衣の受験番号は、ソフトの通り不合格者として発表されるはずだった。手に汗がにじんだ。複雑な思いだった。

発表会場ではサークルの勧誘などでごった返していた。やっとの思いで掲示板をみてびっくりした。なぜだか芽衣の番号があった。あっと思って隣の番号も見たがこちらも合格していた。

帰り際、大畑円佳の姿を見つけて芽衣ははっとした。

「大畑さん」

「あら、あなたの番号はあったわね、その隣の男の子も」

「ごめんなさい」

「どうして謝るのよ、よかったじゃない。これから一緒に大学生活を楽しもうね」

そう言われ芽衣はしどろもどろになった。

きっと、兄貴と山本教授が裏から手を回して自分を確保するために何らかの手段を講じたに違いなかった。それだけに正規の手段で入学した円佳に引け目を感じた。

一ヶ月後、裕子からお父さんの意識が戻ったと言う知らせを聞いて、芽衣は花束を持って病院にお見舞いに行った。

意識が戻ったと言っても、まだ喋れるわけではなく、目と目で合図する程度だった。

裕子のお母さんが恐縮してお見舞いの花束を受け取った。

「あらまあ、芽衣ちゃん。こんなことしてくれなくてもよかったのに」

「いえ、このたびは大きくご回復なされたそうでおめでとうございます」

「ありがとう」

裕子も喜んでいて、花の香りがみんなの鼻をくすぐった。

だが、この裏で起こっていた、台湾上陸作戦を頓挫させ、復讐鬼となったサイバー攻撃部隊員の電力テロを最小限に食い止めた作戦については、芽衣しか知らない。全部、芽衣のせいで引き起こされ、そして、幕を引いたのだ。

——これから、社会に恩返しできればそれでいい。

そう意味深なことを言ってくれるのは、兄貴と山本教授たちだけであった。が芽衣に取っては理解者が一人でもいたら嬉しかったのだ。了

奥付

奥付

東京大停電

../../../../book/93339

著者：黒川 文

著者プロフィール：../../../../users/cqm00171/profile

感想はこちらのコメントへ

../../../../book/93339

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/93339>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

東京大停電

著 黒川文

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
